



世界怪談名作集

上

リットンほか
岡本綺堂 編訳



青空文庫



青空
文庫

序

外国にも怪談は非常に多い。古今の作家、大抵は怪談を書いている。そのうちから最も優れたものを選ぶというのはすこぶる困難な仕事であるので、ここでは世すでに定評ある名家の作品のみを紹介することにした。したがって、その多数がクラシックに傾いたのはまことに已^やむ得ない結果であると思つてもらいたい。

怪談と言つても、いわゆる^{ゴースト・ストーリー}幽霊物語ばかりでは単調に陥る嫌いがあるので、たとひ幽霊は出現しないでも、その事実の怪奇なるものは採録することにした。たとえば、ホーソーンの作には「ドクトル・ハリスの幽霊」があるにもかかわらず、ここには「ラッパチーニの娘」を採録した類である。ストックトンの「幽霊の移転」のような、ユーモラスの物を加えたのも、やはり単調を救うの意にほかならない。

アンドレーフの作のごときはすこぶる芸術味の豊かなもので、大衆向きにはどうあろうかと少しく躊躇したのであるが、普通の怪談とはその選を異にし、死から一旦^{いったん}よみがえつたらザルスという男を象徴にして、「死」に対する人間の恐怖を力強く描いたもので、こういう物も一つぐらいは読んで貰いたいという心から掲載することにしたのである。

アラン・ポーの作品——殊^{こと}にかの「黒猫」のごときは、当然ここに編入すべきであつたが、

この全集には別にポーの傑作集が出ているので、遺憾ながら省くことにして、その代りに、ポーの二代目ともいふべきビヤースの「妖物」ダムドシングを掲載した。人にあらず、獣けものにあらず、形もなく、影もなく、わが国のいわゆる「鎌いたち」に似て非なる一種の妖物が、異常の力をもつて人間を粉碎する怪奇の物語は、実に戦慄に値すると言つてよからう。

支那も怪談の本場であるから、いわゆる「志怪」の書なるものは実に枚挙いしよまに暇あらず、これもその選択にすこぶる窮したのであるが、紙数の都合で「牡丹燈記」を選ぶことにした。これは「剪燈新話」中の一節で、誰も知っている「牡丹燈籠」の怪談の原作である。

ここに編入されたものは、外国の怪談十六種、支那の怪談一種、その原著者はいずれも古今著名の人びとのみで、いちいちあらためて紹介するまでもあるまいと思われるので、単にその時代と出生地のみを記録するにとどめて置いた。

昭和四年初夏

訳者

目次

貸家

リットン…… 1

スピードの女王

プーシキン…… 47

妖物^{ダムドシング}

ビヤース…… 101

クラリモンド

ゴーチエ…… 121

信号手

ディッケンズ 177

ヴィール夫人の亡霊

デフォー…… 203

ラツパチーニの娘

ホーソーン…… 225

貸家

リットン

Edward George Earle Bulwer-Lytton

(1803-1873、英)

一八〇三年五月二十五日、英国ロンドンに生まる。

小説家、戯曲家、政治家。

普通にリットン卿という。

一八七三年一月十八日、トルキューーに逝く。

わたしの友達——著述家で哲学者である男が、ある日、冗談と真面目と半分まじりな調子で、わたしに話した。

「われわれは最近思いもつかないことに出逢ったよ。ロンドンのまんなか**に**化け物屋敷を見つけたぜ」

「ほんとうか。何が出る。……幽霊か」

「さあ、たしかな返事はできないが、僕の知っているのはまずこれだけのことだ。六週間以前に、家内と僕とが二人連れで、家具付きのアパートメントをさがしに出て、ある閑静な町をとおると、窓に家具付き貸間という札が貼つてある家を見つけたのだ。場所もわれわれに適当であると思つたので、はいつてみると部屋も気に入った。そこでまず一週間の約束で借りる約束をしたのだが……。三日目に立ちのいてしまった。誰がどう言つたつて、家内はもうその家にいるのは忌だという。それも無理はないのだ」

「君は何か見たのか」

「別にいろいろの不思議を見たり聞いたりしたわけでもないのだが、家具のないある部屋の前を通ると、なんとも説明することの出来ない一種の凄気にうたれるのだ。但し、その部屋

で何も見えたのではなし、聞こえたのでもないが……。そこで、僕は四日目の朝、その家の番をしている女を呼んで、あの部屋は何分われわれに適当しないから、約束の一週間の終わるまでここに居ることは出来ないと言ひ聞かせると、女は平気でこう言うのだ。

「へわたしはその訳を知っています。それでもあなたがたはほかの人たちよりも長くいたほうです。ふた晩辛抱する人さえ少ないくらいで、三晩泊まっていたのはあなたがたが初めてです。それも恐らくあの連中があなたがたに好意を持ったせいでしょう」

「なんだかおかしな返事だから、僕は笑いながら「あの連中とはなんだ」と訊いてみると、女はまたこう言うのだ。

「へなんだか知りませんが、こここの家うちに執とり着ついている者です。わたしは遠い昔からあの連中を識しっています。その頃わたしは奉公人ではなしに、こここの家に住んでいたことがあるのです。あの連中はいずれ私を殺すだろうと思つていますが、そんなことは構かまいません。わたしはこの通りの年寄りですから、どの道みちやがて死ぬからだです。死ねばあの連中と一緒になつて、やはりこの家に住んでいることが出来るのです」

「いや、どうも驚いたね。女はそんなことを実に怖ろしいほど平気で話しているのだ。僕は薄気味が悪くなつて、もう何も話す元気がなくなつたので、早そうそうに立ち去つてしまつた。

もちろん約束通りに一週間分の間代まだいを払つて来たが、そのくらいのことでは逃げ出せれば廉やすいものや」

「不思議だね」と、わたしは言った。「そう聞くと、僕はぜひその化け物屋敷に寝てみたいよ。君が不名誉の退却をしたという、その家のありかを後生ごしやうだから教えてくれないか」

友達はそのありかを教えてくれた。彼に別れたのち、わたしはまっすぐにかの化け物屋敷だという家へたずねて行くと、その家はオックスフォード・ストリートの北側で、陰気ではあるが家並やなみの悪くない抜け道にあったが、家はまったく閉め切つて、窓に貸間の札もみえない。戸を叩いても返事がない。仕方がなしに引返そうとすると、となりの空地にビールの配達配達が白い金属の罐かんをあつめていて、わたしのほうを見かえりながら声をかけた。

「あなたはそこの家で誰かをお尋ねたずなさるんですか」

「むむ。貸家があるということを知ったので……」

「貸家ですか。そこはJさんが雇い婆さんに一週間一ポンドずつやつて、窓の開け閉あてをさせていたんですがね。もういけませんよ」

「いけない。なぜだね」

「その家は何かたに祟たたられているんですよ。雇い婆さんは眼を大きくあいたままで、寝床のなかに死んでいたんです。世間の評判じゃあ、化け物に絞しめ殺されたんだと言いますが……」

「ふむう。そのJさんというのは、この家の持ち主かね」

「そうです」

「どこに住んでいるね」

「G町です」と、配達はその番地をも教えてくれた。

わたしは彼にいくらかの心付けをやつて、それから教えられた所へたずねて行くと、主人のJ氏は都合よく在宅であつた。J氏はもう初老を過ぎた人で、理智に富んでゐるらしい風貌と、人好きのするような態度をそなえていた。

正直に自分の姓名と職業とを明かした上で、わたしはかの貸間の家に何かの祟りがあるらしく思われるということ話を話した。そうして、わたしはぜひその家を探険してみたいから、ひと晩でもいいからどうぞ貸してくれまいか。それを承知してくれば、お望み通りの金を払うと言つた。

J氏はそれに対して、非常に丁寧に答えた。

「よろしゅうございます。あなたのご用の済むまでお貸し申しませう。家賃などはどうでもかまいません。あの婆さんは宿^{やど}なしの貧乏人で養育院にいたのを、わたしが引き取つて来たのです。あの婆さんは子供の時にわたしの家族のある者と知り合ひであつたと言いますし、またその以前は都合がよくつて、わたしの叔父からあの家を借りて住んでいたこともあるというので、それらの関係からわたしが引き取つて番人に雇つておいたのですが、可哀そうに三週間前に死んでしまいました。あの婆さんは高等の教育もあり、気性もしっかりした女で、わたしが今まで連れて来た番人のうちで無事にあの家に踏みとどまつていたのは、あの女ばかりでした。それが今度死んで、しかも突然に死んだものですから、検視が来るなどという

騒ぎになって、近所でもいろいろの忌な噂を立てます。したがって、そのかわりの番人を見つけるのも困難ですし、もちろん借り手もあるまいと思えますから、今後一年間はその人がすべての税金さえ納めてくれればいいという約束で、無代ただで誰にでも貸そうと考えているのです」

「いったい、いつごろからそんな評判が立つようになったのです」

「それは確かには申されませんが、もうよほど以前からのことです。唯今ただいまお話し申した婆さんが借りていた時、すなわち三十年前から四十年前のあいだだそうですが、すでにそのころから怪しいことがあつたといえます。わたしが覚えてからでも、あの家に三日とつづけて住んでいた人はありません。その怪談はいろいろですから、いちいちにそのお話をすることは出来ませんし、また、そのお話をしてあなたに何かの予覚をあたえるよりも、あなた自身があの家へ入り込んで直接にご判断なさるほうがよろしかろうと思います。ただ、なにかしら見えるかもしれない、聞こえるかもしれないというお覚悟で、あなたがご随意に警戒をなさればよろしいのです」

「あなたはあの家に、一夜を明かそうというような好奇心をお持ちになったことはありませんか」

「一夜を明かしたことはありませんが、真つ昼間に三時間ほど、たった一人であの家のなかにいたことがあります。わたしの好奇心は満足されませんでした、その好奇心も消滅して、

ふたたび経験を新たにする気も出なくなりました。と申したら、なぜ十分に探究しないかとおっしゃるかもしれませんが、それにはまた訳わけがあるのです。そこで、あなたもこの一件について非常に興味を持ち、また、あなたの神経が非常に強いというのであれば格別、さもなければあの家で一夜を明かすということは、まあ、お考えになつたほうがよろしくはないかと思ひます」

「いや、わたしは非常の興味を持つて居るのです」と、私は言つた。「臆病者はともかくも、わたしの神経はいかなる危険にも馴なれて居ます。化け物屋敷でも驚きません」

J氏も深くは言わないで、用よう筆ひつ筒づつから鍵をとり出して私に渡してくれた。その腹蔵ふくざうのない態度にわたしは衷心ちゆうしんから感謝し、また、わたしの希望に対して紳士的の許可をあたえてくれたことを感謝して、わたしは自分の望むものを手に入れることになつた。そうなると気が急せくので、わたしはひとまず我が家へ戻るやいなや、日ごろ自分が信用しているFという雇い人を呼んだ。彼は年も若いし、快活で、物を恐れぬ性質で、わたしの知つて居る中では最も迷信的の偏見へんけんなどを持つて居ない人間であつた。

「おい、おまえも覚えて居るだろう」と、わたしは言つた。「ドイツに居るときに、古い城のなかへ首のない化け物が出るというので、その幽霊を見つけに行つたところが、何事もないので失望したことがある。ところが、今度はお望み通り、ロンドンの市中で確かに化け物の出る家のあることを聞いたのだ。おれは今夜そこへ泊まりに行くつもりだ。おれの聞いたとこ

ろによると、その家には確かに何かが見えるか聞こえるかするのだ。その何かがすこぶる怖ろしい物らしい。そこで、おまえと一緒に行ってくれれば、何事が起こっても非常に氣丈夫だと思うのだが、どうだろう」

「よろしい、旦那。わたくしをお連れください」と、彼は齒をむき出して愉快そうに笑った。「では、ここにその家の鍵がある。これがその所在地だ。これを持ってすぐに行つて、おまえのいいと思う部屋へおれの寢床を用意しておいてくれ。それから幾週間も空家になつていたのでから、ストーブの火をよくおこしてくれ。寢床へも空気を入れるようにしてくれ。もちろん、そこに蠟燭や焚き物があるかどうか見てくれ。おれの短銃と匕首も持つて行つてくれ。おれの武器はそれでたくさんだ。おまえも同じように武装して行け。たとい一ダースの幽霊が出て来たからといって、それと勝負をすることが出来ないようでは、英国人のつらよごしだぞ」

しかし、私は非常に差し迫つた仕事をかかえているので、その日の残りの時間は専らその仕事についてやさなければならなかつた。わたしは自分の名誉を賭けたる今夜の冒険について、あまり多く考える暇を持たないほどに忙しく働いた。わたしは甚だ遅くなつてから、ただひとりで夕飯を食つた。食うあいだに何か読むのが私の習慣であるので、わたしはマコーレーの論文の一冊を取り出した。そうして、今夜はこの書物をたずさえて行こうと思つた。マコーレーの作は、その文章も健全であり、その主題も実生活に触れているので、今夜のよう

な場合には、迷信的空想に対する一種の解毒劑げどくざいの役を勤めるであろうと考えたからである。

午後九時半頃に、かの書物をポケットへ押し込んで、わたしは化け物屋敷の方へぶらぶらと歩いて行つた。わたしはほかに一匹の犬を連れていた。それは敏捷で、大胆で、勇猛なるブルテリア種の犬で、鼠をさがすために薄気味のわるい路の隅や、暗い小径こみちなどを夜歩きするのが大好きであつた。かれは幽霊狩りなどには最も適當の犬であつた。

時は夏であつたが、身にしむように冷えびえする夜で、空はやや暗く曇つていた。それでも月は出ているのである。たといその光りが弱く曇つていても、やはり月には相違ないのであるから、夜半よなかを過ぎて雲が散れば、明かるくなるであらうと思われた。

かの家にゆき着いて戸をたたくと、わたしの雇い人は愉快らしい微笑を含んで主人を迎えた。

「支度は万事できています。すこぶる上等です」

それを聞いて、わたしはむしろ失望した。

「何か注意すべきようなことを、見も聞きもしなかつたか」

「なんだか変な音を聞きましたよ」

「どんなことだ、どんなことだ」

「わたくしのうしろをばたばた通るような蹠音あしおとを聞きました。それから、わたくしの耳のそばで何かささやくような声が一度か二度……。そのほかには何事ありませんでした」

「怖くなかつたか」

「ちつとも……」

こう言う彼の大胆な顔を見て、何事が起こつても彼はわたしを見捨てて逃げるような男でないということが、いよいよ確かめられた。

わたしたちは広間へ通つた。往来にむかつた窓はしまつている。わたしの注意は今やかの犬の方へ向けられたのである。犬もはじめのうちは非常に威勢よく駈け廻つていたが、やがてドアの方へしりごみして、しきりに外へ出ようとして引つ掻いたり、泣くような声をして唸つたりしているのです、私はしずかにその頭をたたいたりして勇氣をつけてやると、犬もようよう落ち着いたらしく、私とFのあとについて来たが、いつもは見識らない場所へ来るとまつききに立つて駈け出すにもかかわらず、今夜はわたしの靴の踵かかとにこすりついて来るのであつた。

私たちはまず地下室や台所を見まわつた。そうして、穴蔵に二、三本の葡萄酒の罎びんがころがっているのを見つけた。その罎には蜘蛛くもの巣が一面にかかつていて、多年そのままにしてあつたことが明らかに察せられると同時に、ここに棲む幽霊が酒好きでないことも確かにわかつたが、そのほかには別に私たちの興味をひくような物も発見されなかつた。外には薄暗い小さな裏庭があつて、高い塀にかこまれている。この庭の敷石はひどくしめつているので、その湿気とほこりと煤煙ばいえんとのために、わたしたちが歩くたびに薄い足跡が残つた。

わたしは今や初めて、この不思議なる借家において第一の不思議を見たのである。

わたしはあたかも自分の前に一つの足跡を見つけたので、急に立ちどまってFに指さして注意した。一つの足跡がまたたちまち二つになったのを、わたしたちふたりは同時に見た。ふたりはあわててその場所を検査すると、わたしの方へむかつて来たその足跡はすこぶる小さく、それは子供の足であった。その印象はすこぶる薄いもので、その形を明らかに判断するのは困難であったが、それが跣足はだしの跡であるということは私たちにも認められた。

この現象は私たちが向うの扉にゆき着いたときに消えてしまつて、帰る時にはそれを繰り返すようなこともなかつた。階段を昇つて一階へ出ると、そこには食堂と小さい控室がある。またそのうしろには更に小さい部屋がある。この第三の部屋は下男の居間であつたらしい。それから座敷へ通ると、ここは新しく綺麗であつた。そこへはいつて、わたしは肘かけ椅子に倚よると、Fは蠟燭立てをテーブルの上に置いた。わたしにドアをしめると言いつけられて、彼が振りむいて行つたときに、わたしの正面にある一脚の椅子が急速に、しかもなんの音もせず壁の方から動き出して、わたしの方から一ヤードほどの所へ来て、にわかに向きを変えて止まつた。

「ははあ、これはテーブル廻しよりもおもしろいな」と、わたしは半分笑いながら言った。

そうして、わたしがほんとうに笑い出したときに、わたしの犬はその頭をあとへひいて吠ほえた。

Fはドアをしめて戻つて来たが、椅子の一件には気がつかないらしく、吠える犬をしきりに鎮めていた。わたしはいつまでもかの椅子を見つめていると、そこに青白い靄もやのようなものが現われた。その輪郭りんかくは人間の形のようなのであるが、わたしは自分の眼を疑うほどにきわめて朦朧たるものであった。犬はもうおとなしくなっていた。

「その椅子を片付けてくれ。むこうの壁の方へ戻して置いてくれ」と、わたしは言った。Fはその通りにしたが、急に振りむいて言った。

「あなたですか。そんなことをしたのは……」

「わたしが……。何をしたというのだ」

「でも、何かがわたくしをぶちました。肩のところを強くぶちました。ちょうどこの所を……」

「わたしではない。しかし、おれたちの前には魔術師どもがいるからな。その手妻てづまはまだ見つけ出さないが、あいつらがおれたちをおどかす前に、こつちがあいつらを取っつかまえてやるぞ」

しかし、私たちはこの座敷に長居することはできなかつた。実際どの部屋へやも湿しめっぽくて寒いので、わたしは二階の火のある所へ行きたくなつたのである。私たちは警戒のために座敷のドアに錠じょうをおろして出た。今まで見まわつた下の部屋もみなそうして来たのであった。

Fがわたしのためにえらんでおいてくれた寝室は、二階じゅうでは最もよい部屋で、往来

にむかつて二つの窓を持つている大きい一室であった。規則正しい四脚の寝台が火にむかつて据えられて、ストーブの火は美しくさかんに燃えていた。その寝台と窓とのあいだの壁の左寄りにドアがあつて、そこからFの居間になつてゐる部屋へ通ずるようになっていた。

次にソファ・ベッドの付いてゐる小さい部屋があつて、それは階段の昇り場あがになんの交通もなく、わたしの寢室に通ずるただ一つのドアがあるだけであつた。

寢室の火のそばには、衣裳戸棚が壁とおなじ平面に立っていて、それには錠をおろさずに、ぶいとみ鳶色の紙をもつておおわれていた。試みにその戸棚をあらためたが、そこには女の着物をかける掛け釘があるばかりで、ほかには何物もなかつた。さらに壁を叩いてみたが、それは確かに固形体で、外は建物の壁になつてゐた。

これでまず家じゅうの見分けんぶんを終わつて、わたしはしばらく火に暖まりながらシガーをくゆらした。この時まで私のそばについていたFは、さらにわたしの探査を十分ならしめるために出て行くと、昇り口の部屋のドアが堅くしまつてゐた。

「旦那」と、彼は驚いたように言った。「わたくしはこのドアに錠をおろした覚えはないのです。このドアは内から錠をおろすことは出来ないようになってゐるのですから……」

その言葉のまだ終わらないうちに、そのドアは誰も手を触れないにもかかわらず、また自然にしずかにあいたので、私たちはしばらく黙つて眼を見あわせた。化け物ではない、何か人間の働きがここで発見されるであろうという考えが、同時に二人の胸に浮かんだったので、わ

たしはまずその部屋へ駆け込むと、Fもつづいた。

そこは家具もない、なんの装飾もない、小さい部屋で、少しばかりの空き箱と籠かごのたぐいが片隅にころがっているばかりであった。小さい窓の罫戸よろいどはとじられて、火を焚くところもなく、私たちが今はいつて来た入り口のほかには、ドアもなかった。床には敷物もなく、その床も非常に古くむしばまれて、そこにもここにも手入れをした継ぎ木の跡が白くみえた。しかもそこに生きているらしい物はなんにも見えないばかりか、生きている物の隠れているような場所も見いだされなかった。

私たちが突っ立って、そこらを見まわしているうちに、いったんあいたドアはまたしずかにしまった。二人はここに閉じこめられてしまったのである。

私はここに初めて一種の言い知れない恐怖のきざして来るのを覚えたが、Fはそうではなかった。

「われわれを罫わなに掛けようなどとは駄目だめなことです。こんな薄っぺらなドアなどは、わたしの足で一度蹴ればすぐにこわれます」

「おまえの手であくかどうだか、まず試ためしてみろ」と、わたしも勇気を振るい起こして言った。「その間におれは鎧戸かんぬきをあけて、外に何かあるか見とどけるから」

わたしは鎧戸かんぬきの貫木かんぬきをはずすと、窓は前にいった裏庭にむかっているが、そこには張り出しも何もないので、切っ立てになっている壁を降りる便宜よすがもなく、庭の敷石の上へ落ちるまでのあいだに足がかりとするような物は見あたらなかった。

Fはしばらくドアをあけようと試みていたが、それがどうにもならないので、わたしの方へ振りむいて、もうこの上は暴力を用いてもいいかと聞いた。

彼が迷信的の恐怖に打ち克かつて、こういう非常の場合にも沈着で快活であることは、実にあつぱれとも言うべきで、わたしはいろいろの意味において、いい味方を連れて来たことを祝さなければならなかった。そこで、わたしは喜んで彼の申しいでを許可したが、いかに彼

が勇者であつてもその力は弱いものと見えて、どんなに蹴つてもドアはびくともしなかつた。彼はしまいには息が切れて、蹴ることをあきらめたので、わたしが立ち代つてむかつたが、やはりなんの効もなかつた。それをやめると、ふたたび一種の恐怖がわたしの胸にきざして来たが、今度はそれが以前よりもぞつとするような、根強いものであつた。

そのとき私は、ささくれ立つた床ゆかの裂け目から何だか奇怪な物凄いような煙りが立ち昇つて来て、人間には有害でありそうな毒気が次第に充満するのを見たかと思うと、ドアはさながら我が意思をもつて働くように、またもやしずかにあいたので、監禁を赦ゆるされた二人は早そうそうに階段のあがり場へ逃げ出した。

一つの大きい青ざめた光り——人間の形ぐらいの大きさであるが、形もなく、ただふわふわしているのである。それが私たちの方へ動いて来て、あがり場から屋根裏の部屋へつづいていける階段を昇つてゆくので、私はその光りを追つて行つた。Fもつづいた。

光りは階段の右にある小さい部屋にはいったが、その入り口のドアはあいていたので、私もすぐ跡あとからはいると、その光りはうず巻いて、小さい玉になつて、非常に明かるく、あたかも生けるがごとくに輝いて、部屋の隅にある寝台の上にとどまっていたが、やがて顫ふるえるように消えてしまったので、私たちはすぐにその寝台をあらためると、それは奉公人などの住む屋根裏の部屋には珍らしくない半天蓋はんてんがいの寝台であつた。

寝台のそばに立つている抽斗戸棚ひきだしの上には絹の古いハンカチーフがあつて、その綻ほころびを縫

いかけの針が残っていた。ハンカチーフはほこりだらけになっていたが、それは恐らく先日ここで死んだという婆さんの物で、婆さんはここを自分の寢床にしていたのであろう。

わたしは多大の好奇心をもって抽斗をいちいちあけてみると、そのなかには女の着物の切れっぱしと二通の手紙があつて、手紙には色のさめた細い黄いろいリボンをまきつけて結んであつた。わたしは勝手にその手紙を取りあげて自分の物にしたが、ほかには何も注意をひくような物は発見されなかつた。

かの光りは再び現われなかつたが、二人が引つ返してここを出るときに、ちようどわたしたちの前にあつて、床をばたばたと踏んでゆくような躰音あしおとがきこえた。私たちはそれから都合四間よまの部屋を通りぬけてみたが、かの躰音はいつも二人のさきに立つて行く。しかもその形はなんにも見えないで、ただその躰音が聞こえるばかりであつた。

わたしはかの二通の手紙を手を持っていたが、あたかも階段を降りようとする時に、何もかが私の臂ひじをとらえたのを明らかに感じた。そうして、わたしの手から手紙を取ろうとするらしいのを軽く感じたが、私はしつかりとつかんで放さなかつたので、それはそのままになつてしまつた。

二人は私のために設けられている以前の寢室に戻つたが、ここで私は自分の犬が私たちのあとについて来なかつたことに気がついた。犬は火のそばに摺すり付いてふるえているのであつた。

私はすぐにかの手紙をよみ始めると、Fはわたしが命令した通りの武器を入れて来た小さい箱をあけて、短銃ピストルと匕首あいくちを取り出して、わたしの寝台の頭のほうに近いテーブルの上に置いた。そうして、かの犬をいたわるように撫なでていたが、犬は一向にその相手にならないようであつた。

手紙は短いもので、その日付けによると、あたかも三十五年前のものであつた。それは明らかに情人がその情婦に送つたものか、あるいは夫が若い妻に宛てたものと見られた。文章の調子ばかりでなく、以前の旅行のことなどが書いてあるのを参酌さんしやくしてみると、この手紙の書き手は船乗りであつて、その文字の綴り方や書き方をみると、彼はあまり教育のある人物とは思われなかつたが、しかも言葉そのものには力がこもつていて、あらつぱい強烈な愛情が満ちていた。しかし、そのうちのそこに何らかの暗い不可解の点があつて、それは愛情の問題ではなく、ある犯罪の秘密を暗示しているように思われた。すなわち、その一節にこんなことが書いてあつたのを、私は記憶していた。

——すべてのことが発覚して、すべての人がわれわれを罵ののり憎んでも、たがいの心は変わらないはずだ——

——けつして他人をおまえと同じ部屋に寝かしてはならないぞ。夜なかにおまえがどんな寝言を言わないとも限らない——

——どんなことがあつても、われわれの破滅にはならない。死ぬ時が来れば格別、それま

ではなんにも恐れることはない——

それらの文句の下に、それよりも上手な女文字で「その通りに」と書き入れてあった。そうして、最後の日付けの手紙の終わりには、やはり同じ女文字で「六月四日、海に死す。その同じ日に——」と書き入れてあった。わたしは二通の手紙を下に置いて、それらの内容について考え始めた。

そういうことを考えるのは、神経を不安定にするものだとは思いつながら、わたしは今夜これからいかなる不思議に出逢おうとも、それに対抗するだけの決心は十分に固めていた。

わたしは起ちあがって、かの手紙をテーブルの上に置いて、まだ熾さかんに輝いている火をかきおこして、それにむかってマコーレーの論文集をひらいて、十一時半頃まで読んだ。それから着物のままで寝台へのぼって、Fにも自分の部屋へさがつてもよいと言いつ聞かせた。但たし、今夜は起きていろ、そうして私の部屋との間のドアをあけておけと命じた。

それから私は一人になって、寝台の枕もとのテーブルに二本の蝋燭をともした。二つの武器のそばに懐中時計を置いて、ふたたびマコーレーを読み始めると、わたしの前の火は明るく燃えて、犬は爐ろの前の敷物の上に眠っているらしく寝ころんでいた。二十分ほど過ぎたころに、隙すきもる風が不意に吹き込んで来たように、ひどく冷たい空気がわたしの頬を撫でたので、もしやあがり場に通じている右手のドアがあいているのではないかと見返ると、ドアはちゃんとしまっていた。さらに左手をみかえると、蝋燭の火は風に吹かれたように揺れて

いた。それと同時に、テーブルの上にある時計がしずかに、眼にみえない手につかみ去られるように消え失せてしまった。

わたしは片手に短銃、かた手に匕首を持って跳び起きた。時計とおなじように、この二つの武器をも奪われてはならないと思つたからである。こう用心して床の上を見まわしたが、どこにも時計は見えなかつた。このとき枕もとでしずかに、しかも大きく叩く音が三つ聞こえた。

「旦那。あなたですか」と、次の部屋でFが呼びかけた。

「いや、おれではない。おまえも用心しろ」

犬は今起きあがって、からだを立てて坐つた。その耳を左右に早く動かしながら、不思議な眼をして私を見つめているのが、わたしの注意をひいた。犬はやがてしずかに身を起こしたが、なおまっすぐに立つたままで、総身の毛を逆立たせながら、やはりあらゆる眼をして私をじつと見つめていた。しかも、私は犬のほうなどを詳しく検査している暇はなかつた。Fがたちまちに自分の部屋からころげ出して来たのである。

人間の顔にあらわれた恐怖の色というものを、私はこのときに見た。もし往来で突然出逢つたならば、おそらく自分の雇い人とは認められないであろうと思われるほどに、Fの相好はまったく変わっていた。彼はわたしのそばを足早に通り過ぎながら、あるかないかの低い声で言つた。

「早くお逃げなさい、お逃げなさい。わたしのあとからついて来ます」

彼はあがり場のドアを押しあけて、むやみに外へ駆け出すので、わたしは待て待てと呼び戻しながら続いて出ると、Fはわたしを見返りもせず、階段を跳ね降りて、手摺りに取りついて、一度に幾足もばたばたさせながら、あわてて逃げ去った。わたしは立ちどまって耳を澄ましていると、表の入り口のドアがあいたかと思うと、またしまる音がきこえた。頼みのFは逃げてしまつて、私はひとりでこの化け物屋敷に取り残されたのである。

ここに踏みとどまろうか、Fのあとを追つて出ようかと、わたしもちよつと考えたが、わたしの自尊心と好奇心とが卑怯に逃げるなど命じたので、わたしは再び自分の部屋へ引返して、寝台の方へ警戒しながら近づいた。なにぶんにも不意撃ちを食つたので、Fがいったい何を恐れたのか、私にはよく分からなかつたのである。もしやそこに隠し戸でもあるかと思つて、わたしは再び壁を調べてみたが、もちろんそんな形跡もないばかりか、にぶい褐色の紙には継ぎ目さえも見いだされなかつた。してみると、Fをおびやかしたものは、それが何物であろうとも、わたしの寝室を通つて進入したのであるか。わたしは内部の部屋のドアに錠をおろして、何か来るかと待ち構えながら、爐の前に立つていた。

このとき私は壁の隅に犬の滑り込のめんでいるのを見た。犬は無理にそこから逃げ路を見つけようとするように、からだを壁に押しつけているので、わたしは近寄つて呼んだ。

哀れなる動物はひどい恐怖に襲われているらしく、齒をむき出して、顎からよだれを垂らして、わたしが迂濶にさわつたらばすぐに咬みつきそうな様子で、主人のわたしをも知らないように見えた。動物園で大蛇に吞まれようとする兎のふるえてすくんだ様子を見たことのある人には、誰でも想像ができるに相違ない。わたしの犬の姿はあたかもそれと同様であった。いろいろに宥めても賺しても無駄であるばかりか、恐水病にでも罹つていようこの犬に咬みつかれて、なにかの毒にでも感じてはならないと思つたので、わたしはかれを打ち捨てて、爐のそばのテーブルの上に武器を置いて、椅子に腰をおろして再びマコーレーを読み始めた。

やがて読んでいる書物のページと燈火とのあいだへ何か邪魔にはいつて来たものがあるらしく、紙の上が薄暗くなつたので、わたしは仰いで見まわすと、それはなんとも説明し難いものであつた。それは、はなはだ朦朧たる黒い影で、明らかに人間の形であるともいえないが、それに似た物を探せばやはり人間の形か影かというのほかはないのであつた。それが周囲の空気や燈火から離れて立っているのを見ると、その面積はすこぶる大きいもので、頭は天井にとどいていた。それをじつと睨んでみると、わたしは身にしみるような寒さを感じたのである。その寒さというものがまた格別で、たとい氷山がわたしの前にあつてもこうではあるまい。氷山の寒さのほうがもつと物理的であろうと思われた。しかも、それが恐怖のための寒さでないことは私にも分かつていた。

わたしはその奇怪な物を睨みつづけていると、自分にも確かにはいえないが、二つの眼が高いところから私を見おろしているように思われた。ある一瞬間には、それがはつきりと見えるようで、次の瞬間にはまた消えてしまうのであるが、ともかくも青いような、青白いような二つの光りが暗い中からしばしばあらわれて、半信半疑のわたしを照らしていた。わたしは口をきこうと思っても、声が出ない。ただ、これが怖いか、いや怖くはないと考えるだけであった。つとめて起^たちあがろうとしても、支え難い力におしすくめられているようで起つことが出来ない。わたしは私の意思に反抗し、人間の力を圧倒するこの大いなる力を認めないわけにはいかなかった。物理的にいえば、海上で暴風雨に出逢ったとか、あるいは大火災に出逢ったとかいうたぐいである。精神的にいえば、何か怖ろしい野獣と闘っているか、あるいは大洋中で鱧^{ふか}に出逢ったとでもいうべきである。すなわち、わたしの意思に反抗する他の意思があつて、その強い程度においては風雨^{あらし}のごとく、火のごとく、その実力においてはかの鱧のごときものであつた。

こういう感想がだんだんにたかまると、なんともいえない恐怖が湧いて来た。それでも私は自尊心——勇氣ではなくとも——をたもつていて、それは外部から自然に襲つて来る怖ろしさであつて、わたし自身が怖れているのではないと、心のうちで言っていた。わたしに直接危害を加えないものを恐れるはずはない。わたしの理性は妖怪などを承認しないのである。いま見るものは一種の幻影に過ぎないと思つていた。

一生懸命の力を振るい起こして、わたしはついに自分の手を伸ばすことが出来た。そうして、テーブルの上の武器をとろうとする時、突然わたしの肩と腕に不思議の攻撃を受けて、わたしの手はぐたりとなつてしまった。そればかりでなく、蝋燭の火が消えたというのでもないが、その光りは次第に衰えて来た。爐の火も同様で、焚き物のひかりは吸い取られるように薄れて来て、部屋の中はまったく暗くなった。この暗いなかで、かの「黒い物」に威力を揮ふるわれてはたまらない。わたしの恐怖は絶頂に達して、もうこうなったら気を失うか、呶どな鳴るかのほかはなかった。わたしは呶鳴った。一種の悲鳴に近いものではあつたが、ともかくも呶鳴った。

「恐れはしないぞ。おれの魂は恐れないぞ」と、こんなことを呶鳴ったように記憶している。

それと同時に私は起たちあがつた。真つ暗のなかを窓の方へ突進して、カーテンを引きめくつて、鎧戸よろいどをはねあげた。まず第一に外部の光線を入れようと思つたのである。外には月が高く明かるく懸かっているのを見て、わたしは今までの恐怖を忘れたように嬉しく感じた。空には月がある。眠つた街にはガス燈の光りがある。わたしは部屋の方を振り返つてみると、月の影はそこへもさし込んで、その光りははなはだ青白く、かつ一部分ではあつたが、ともかくもそこらが明かるくなつていた。かの黒い物はなんであつたか知らないが、形はもう消えてしまつて、正面の壁にその幽霊かとも見えるような薄い影をとどめているのみであつた。わたしは今、テーブルの上に眼を配ると、テーブル——それにはクロスもカヴァーもない、

マホガニーの木で作られた円い古いテーブルであった——の下から一本の手が臂のあたりまでぬうと出て来た。その手は私たちの手のように血や肉の多くない、痩せた、皺だらけの、小さい手で、おそらく老人、ことに女の手であるらしく思われたが、そろりそろりと伸びて来て、テーブルの上にある二通の手紙に近づいたかと思えるうちに、その手も手紙も共に消えうせた。

この時さつき聴いたと同じような、物を撃つ音が大きく三度ひびいた。その音がしずかにならぬやむと、この一室が震動するよう感じられて、床の上のそこからもここからも、光りの泡のような火花と火の玉があらわれた。それは緑や黄や、火のごとく紅いのや、空のごとく薄青いのや、いろいろの色をなしているのであった。椅子は誰が動かすともなしに壁ぎわを離れて、寝台の正面に直されたかと思うと、女の形がそこにあらわれた。それは死人のように物凄なものではあったが、生きている者の形であるらしく明らかに認められた。

それは悲しみを含んだ若い美人の顔であった。身には雲のように白いローブ（長いゆるやかな着物）をまとつて、喉から肩のあたりは露出になっていた。女は肩に垂れかかる長い黄いろい髪を梳きはじめたが、私のほうへは眼もくれずに、耳を傾けるような、注意するような、待つような態度で、ドアの方を見つめていると、うしろの壁に残っている「黒い物」の影はまた次第に濃くなつて、その頭にある二つの眼のようなものが女の姿を窺っているらしくも思われた。

ドアはしまっているのであるが、あたかもそこからはいつて来たように、他の形があらわれた。それも女とおなじくはつきりしていて、同じく物凄く見えるような、若い男の顔であった。男は前世紀か、またはそれに似たような服を着ていたが、その襞ひだの付いた襟や、レースや、帯どめの細工さいくをこらした旧式の美しい服装が、それを着ている死人のような男と不思議の対照をなして、いかにも奇怪に、むしろ怖ろしいようにも見られた。

男の形が女に近づくと、壁の黒い影も動き出して来て、この三つがたちまちに暗いなかにかまれてしまったが、やがて青白い光りが再び照らされると、男と女の二つの幽霊は、これらのあいだに突っ立っている大きい黒い影につかまれているように見えた。女の胸には血のあとがにじんでいた。男は剣を杖にして、これもその胸のあたりから血がしたたっていた。黒い影はかれらを呑のんで、いずれも皆そのままに消えてしまうと、以前の火の玉がまたあらわれて、走ったり転ころがつたりしているうちに、だんだんにそれが濃くなつて、さらに激しく入り乱れて動いた。

爐の右手にある化粧室のドアがあいて、その口からさらに老婆の形があらわれた。老婆はその手に二通の手紙を持つていた。また、そのうしろに蹙音が聞こえるようであった。老婆は耳を傾けるように振り返ったが、やがてかの手紙をひらいて読みはじめると、その肩越しに蒼ざめた顔がみえた。それは水中に長く沈んでいた男の顔で、膨れて、白ちやけて、その濡れしおれた髪には海藻がからみついていた。そのほかにも、老婆の足もとには死骸のような物が一つ横たわつていて、その死骸のそばには、またひとりの子供がうずくまつていた。子供ははじめな穢い姿で、その頬には饑餓の色がただよい、その眼には恐怖の色が浮かんでいた。

老婆は手紙を読んでいるうちに、顔の皺が次第に消えて、若い女の顔になった。けわしい眼をした残忍の相ではあるが、ともかくも若い顔になったのである。するとまたここへ、かの黒い影がおおつて来て、前のごとくにかれらを暗いなかへ包み去つた。

今はかの黒い影のほかには、この室内になんにも怪しい物はないので、わたしは眼を据えて、じつとそれを見つめてみると、その影の頭にある二つの眼は、毒どくしい蟒蛇の眼のように大きく飛び出して来た。火の玉は不規則に混乱して、あるいは舞いあがり、あるいは舞

いさがり、その光りは窓から流れ込む淡い月の光りにまじりながら狂い騒いでいた。

そのうちに鶏卵たまごの殻からから出るように、火の玉の一つ一つから驚くべき物が爆発して、空中に充満した。それは血のない醜悪な幼虫のたぐいで、わたしには到底とうていなんとも説明のしようがない。一滴の水を顕微鏡でのぞくと、無数の透明な、柔軟な、敏捷な物がたがいに追いまわし、たがいに喰い合っているのが見える。今ここにあらわれた物もまずそんな種類で、肉眼ではほとんど見分け難いものであると思ってももらいたい。その形になんの均一きんいつがあるわけでもなく、その行動になんの規律があるわけでもなく、居どころも定めずに飛びまわって、私のまわりをぐるぐると舞いはじめた。

その集団はだんだんに濃密になつて、その廻転はだんだんに急激になつて、わたしの頭の上にもむらがつて来た。何かの用心に突き出している私の右手の上にも這いあがつて来た。時どきに何かさわるように感じたが、それはかれらの仕業しわざでなく、眼にみえない手が私にさわるのであつた。またある時には、冷たい柔らかい手がわたしの喉のどをなでるように感じたこともあつた。

ここで恐れをいだいて降参すると、わたしのからだに危険があると思つたので、私はかれらに対抗するという一点にわたしの心力を集中して、かの蟒蛇うわばみのような眼——それはだんだんにはつきりと見えて来た——から私の眼をそむけた。わたしの周囲にはもう何物もないのであるが、ここになお一つの「意志」がある。それは力強く、創造的で、かつ活動力に富む

ところの「悪」の意志であつて、その力はよく私を圧伏し得るのであつた。

部屋のなかの青白い空気は、今や近火でもあるように紅くなつて、かの幼虫の群れは火のなかに棲む物のようにきらきらと光つて来た。月のひかりはふるえて動いた。物を撃つような音がまたもや三度きこえたかと思うと、すべての物がかの黒い影に呑まれて、さらにまた大いなる暗黒のうちに隠れてしまつたが、やがてその暗黒が退くと共に、黒い影もまつたく消え失せて、今まで光りを奪われていたテーブルの上の蝋燭の火は再びしずかに明かるくなつた。爐の火も再び燃えはじめた。この室内は再びもとの平穩の姿に立ちかへつた。

二つのドアはなおしまつたままで、Fの部屋へ通ずるドアにも錠をおろしてあつた。壁の隅には、かの犬が追い込まれて、痙攣したように横たわつていたので、わたしは試みに呼んでみたが、犬はなんの答えもなかつた。さらに近寄つてよく観ると、眼の球は飛び出して、口からは舌を吐いて、顎からは泡をふいて、犬はもう死んでいたのであつた。

わたしはかれを抱きあげて火のそばへ連れて来たが、哀れなる愛犬の死について、強い悲哀と強い自責とを感じずにはいられなかつた。私がかれを死地へ連れ込んだのである。最初は恐怖のために死んだのであろうと想像していたが、その頸の骨が実際に碎かれていたのを発見して、わたしはまた驚いた。それが暗になされたとすれば、それは私のような人間の手によつてなされなければなるまい。して見ると、最初から終わりまでこの室内に人間が働いていたのであろうか。それについて何か疑わしい形跡があるであらうか。私はこの以上に

何事をも詳しく語る事が出来ないのであるから、よろしく読者の推断に任せるのほかはない。

もう一つ驚くべきは、さつき不思議に紛失した私の懐中時計がテーブルの上に戻っていた。但し、あたかもそれが紛失した時刻のところ、時計の針は止まっているのである。その後、上手な時計屋へ持って行つて幾度も修繕してもらつたが、いつも数時間の後には針の廻転が妙に不規則になつて、結局は止まつてしまうことになるので、その時計はとうとう廃物になつた。

その後はもう変わったことはなかつた。わたしは夜のあけるまで待つていたが、何事もなかつた。日が出て、世間が昼になつて、わたしがこの家を立ち去るまで、もう何事もなかつたのである。

いよいよここを立ち去る前に、わたしとFとが監禁された部屋、窓のない部屋へ再びはいつてみた。奇異なる事件の機械的作用——もしこんな言葉があるならば——を作り出したこの部屋へ今や白昼に踏み込んで、ゆうべの怖ろしさを再び思い出すと、わたしは一刻もここに立つているに堪えられないので、早そうに階段を降りかかると、またもやわたしのさきに立つてゆく蹻音がきこえた。そうして、表の入り口のドアをあけた時に、うしろでかすかな笑い声がきこえたようにも思われた。

わたしは自分の家へ帰つた。ゆうべ逃亡した雇い人は定めて顔を見せるだろうと思ひのほ

か、Fはどこへ行つてしまつたか、一向にその消息が分からないのであつた。三日の後にリヴァプールからの手紙が来た。

先夜はご覧の通りの始末で、なんとも申しわけがございません。わたくしが本当に回復するにはこれから一年以上もかかるだろうと存じますから、もちろん今後のご奉公は出来ません。わたくしはこれからメルボルンにいる義兄弟のところへ尋ねて行くつもりで、その船は明日出帆いたします。長い航海をつづけているうちには、わたくしも気がしつかりして来るであろうと存じます。なにしろ唯今ただいまのところでは恐怖と戦慄があるばかりで、怖ろしい物が常に自分のうしろに付きまといつているように思われてなりません。それからにはなほだ恐れ入りますが、わたくしの衣類や荷物のたぐいは、ウォルウォースにいるわたくしの母のところへお届けを願います。母の住所はジョンが知っております。――

手紙の終わりには、なおいろいろの弁解が付け加えてあつて、やや辻褄つじつまの合わない点もあるが、筆者はすこぶる注意して書いたらしく、くどくどと列ならべ立ててあつた。本人はかねて濠州ほうしゅうへ行きたい希望があつたので、それをゆうべの事件に結び付けて、こんな拵こしらえ事をしたのではないかと疑われるが、私はそれについてなんにも言わない。むしろ世間には信ずべからざることを信ずる人がたくさんあつて、彼もその一人であろうと思つた。いずれにしても、この事件に対するわたしの信念と推理は動かないのである。

夕方になつて、わたしは貸馬車を雇つて再びかの化け物屋敷へ行つた。そこへ置いて来た

わたしの物と、死んだ犬の亡骸なきがらとを引き取るためであつたが、今度は別になんの邪魔もなかった。ただその階段を昇り降りするときに、例の蹻音を聞いたほかには、わたしの注意にあたいするような出来事もなかった。

そこを出て、さらに家主のJ氏をたずねると、彼はあたかも在宅であつた。わたしは鍵を返した上で、わたしの好奇心は十分に満足したことを話した。そうして、ゆうべの出来事を口早に話しかけると、J氏はそれをさえぎつて、しよせん誰にも解決のつかないような怪談について、自分は最早興味を持たないと丁寧にとわつた。しかし、かの二通の手紙の事と、またそれが不思議に消え失せたことだけは報告しておかなければならないと思つたので、わたしはJ氏にむかつて、かの手紙は、かの家で死んだ老婆に宛てたものであると考えられるが、かの老婆が過去の経歴のうちには手紙にあらわれているような暗い秘密をかくしていると思われる節があるかと質問すると、J氏は驚いたように見えた。彼はしばらく考えたのちに、こう答えた。

「やむぎにお話し申した通り、あの婆さんがわたしのほうの知り合いであるという以外、その若いときの経歴などについては、あまりよく知らないのです。しかしあなたのお話を伺つて、おぼろげな追憶を呼び起こすようにもなりましたから、わたしは更に聞き合わせて、その結果をご報告しましょう。それにしても、ここに一人の犯罪者または犯罪の犠牲者があつて、その靈魂が犯罪の行なわれた場所へ再び立ち戻つて来るといふ、世間一般の迷信を承認する

としても、あの婆さんの死ぬ前からあの家に不思議の物が見えたり、不思議な音が聞こえたりしたのはどういいうわけでしょうか。……あなたは笑っていられるが、それにはどういいうご意見がありますか」

「もし、われわれがこの秘密の底深くまで進んで行ったら、生きている人間の働いていることを発見するだろうと思われます」

「え、なんとおっしゃる。では、あなたはすべてのことが詐欺だと言われるのですか。どうしてそんなことが分かりました」

「いや、詐欺というのとは違います。たとえば、わたしが突然に深い睡眠状態におちいつて——それはあなたが揺り起こすことの出来ないような深い睡眠状態におちいつたとして、その時わたしは眼ざめた後に訴えることの出来ないほど正確に、あなたの問いに答えることが出来ます。すなわちあなたのポケットにはいくら金の金を持つていたりとか、あなたは何を考えているとか……：……そういうたぐいのことは詐欺というべきではなく、むしろ無理にいられた一種の超自然的の作用ともいえるべきものです。わたしは自分の知らないあいだに、遠方からある人間に催眠術をほどこされて、その交感関係に支配されていたのだと思うのです」

「かりに催眠術師が生きた人間に対してそういう感応かんのうをあたえ得るとしても、生きていないもの……すなわち椅子やドアのような物に対して、それを動かしたり、あけたりしめたりすることが出来るでしょうか」

「実際はそうでなくして、そういうふうに思わせるのかもしれませんが。普通に催眠術と称せられるものでは、もちろん、そんなことは出来ませんが、催眠術師のうちにも、一種の血統があるか、あるいはその術の特に優れた者か、それらのうちには昔でいう魔術に似たような不思議の力を持つている者がないとは限りません。その力が果たして生なき物にまで働き得るかどうかは知りませんが、もしそんなことがあつたとしても、あえて不自然とは言われまいかと思われれます。もちろん、それはこの世の中にはなほだ少ないことで、その人は特殊の性質を持って生まれ、特殊の実験を積んで、その術の最高極度に到達したものと見なければなりません。その力が死んだ者の上に……詳しくいえば、死んだ者にもまだ残っているある思想とか、ある記憶とかいうものの上に働くのです。そうして、正しくは靈魂といふべきものではなく、最も地上に近い一種の靈氣がわれわれの感覚にあらわれて来るようになるのです。しかし私はそれをもって、真の超自然的の力とは認めません。それを説明するために、パラセルサス（スイスの医師、博物学者、十六世紀初年の人）の著作『文学上の奇観』の一節を申し上げます。

ここに一つの花があつて、人がそれを焼けば枯れて焼けうせる。その花の元素が何であろうとも、どこかへ消散してしまつて、それを見受けることも出来ず、ふたたび集めることも出来ない。しかし化学的に研究すれば、その花の焼けた灰や埃ごみの中からは、生きているときと同様のスペクトル（分光）を発見することが出来るのである。人間も同じことで、靈魂は花

の本体または元素のごとくに離れ去つても、それにスペクトルが残っている。普通の人はそれを靈魂と信じているけれども、それをまことの靈魂と混同してはならない。それは死人の幻影ともいふべきものである。それであるから、古来の怪談に伝えられるところのものには、まことの靈魂が宿っているのではなく、よく分離したる知識のみだと思えばよい。これらの幽霊ともいふべきものは、多少の目的があつて出現することもあり、またはなんの目的もなくして現われることもある。かれらは稀に口をきくこともあるが、別になんの思想を發表するわけでもない。したがつて、たといその幻影がいかに驚くべきものであつても、哲学の本分としては、超自然的の不思議な物でもないとして拒否すべきである。かれらは人間の死にぎわにその頭脳から他へ運ばれたところの思想に過ぎない。

——まずこんな議論であらうとして、ゆうべの出来事を考えると、テーブルが自然にあるき出したのも、怪物のような形が壁に映つたのも、人間の手ばかりが出て来て、そこにある物を持ち去つたのも、または黒い物があらわれたのも、たといそれがわれわれの血を凍らせるほどの怖ろしい出来事であつたとしても、そこにはある種の仲介者があつて、あたかも電気の線のごとくに、他の頭脳からわたしの頭脳へ流通させたものであると信じられるのです。人間は体質によつて自然に化学的に出来ている者がある、そうした人間は化学的の驚異を現することが出来ます。また、液体的（普通に電気という）の人間は発電の不思議を見せることも出来るのです。

そこで、ゆうべ私が見たり聞いたりしたすべてのことは、人間……私とおなじように生きている人間が、遠方から何かの仕事をしているのであって、本人自身も知らないほどいい効果を生じたのであろうと思われれます。要するに、その人間がある死人の頭脳を利用してあるのであって、頭脳それ自身は単に夢を見ているに過ぎないのです。しかしその力は非常に強大なもので、その物質的の力はわたしの犬を殺したほどです。わたしも恐怖のために屈伏したらば、犬とおなじように殺されたでしょう」

「あなたの犬を殺しましたか。それは怖ろしいことです」と、J氏は言った。「なるほどそう言えばあの人に動物は棲んでいません。猫一匹も見えません。鼠も見たことはありません」
「強烈なる獣性の創造力がそれらの動物を殺すほどの影響をあたえるのですが、人間は他の動物よりも更に強い抵抗力を持っているのです。まずそれはそれとして、あなたは私の理論をご諒解りようかいになりましたか」

「まず大抵は……。失礼ながらお蔭さまで、多少の手がかりを得ました。われわれが子供部屋にいたるときから沁みこんでいる幽霊や化け物に対する概念を、ただそのままに受け入れるよりも、むしろあなたのお説に従うべきでしょう。しかし議論は議論として、わたしの貸家に悪いことのあるのはどうにもなりません。そこで一体いったいあの家をどうしたらいいでしょうか」

「こうしたらどうです。わたしの泊まった寝室のドアと直角になっている、家具のない小き

い部屋が怪しいように思われます。あの部屋があの家たに祟りをなす一種の感動力の出発点か、または置き所だと認められますから、私はぜひあなたにお勧め申して、あすこの壁を取りのけ、あすこの床をはずしたいのです。そうでなければ、あの部屋をみな取りこわ壊してしまふのです。あの部屋は建物の総体から離れて、小さい裏庭の上に作られているのですから、あれを動かしたところで、建物の他の部分にはなんにも差支さしつかえはありませんまい」

「そこで、わたしがその通りにしましたらば……」

「まず電信線を切りはずすのです。それをやってご覧なさい。もしその作業の指揮をわたしに任せて下さるなら、わたしがその工事費の半額を支払います」

「いや、それは私がみな負担します。その余のことは、書面で申し上げましょう」

四

それから十日ほどの後に、わたしはJ氏からの手紙をうけとつた。

その報告によると、彼はわたしが帰つたあとで、かの家へ見廻りに行つた。そうして、かの二通の手紙が再びもとの抽斗ひきだしに戻つてゐるのを発見したので、彼もわたしと同じような疑いをもつて読んだ。それからまた、わたしが推測した通りに、かの手紙の受け取り人であるらしい老婆の身の上を念入りに調べはじめると、手紙の日付けの一年前、すなわち今から三十六年前に彼女は親族の意志にさからつて結婚した。男はアメリカ生まれのすこぶる怪しい人物で、世間からは海賊であると認められていた。彼女は信用の厚い商人の娘で、結婚するまでは乳母に育てられていたほどの身分であつた。また、彼女には男やもめの兄があつて、それはおそらく金持であつたらしく、その当時六歳ぐらいの子供を持つていたのである。彼女が結婚してから一カ月の後、その兄の死骸がテムス河のロンドン橋に近いところで発見されて、死骸の咽喉部には暴力を加えたらしい形跡が見えたが、特に検視を求めるといふほどの有力の証拠にもならず、結局は溺死ということと終わった。

アメリカ人とその妻は死んだ兄の遺言状によつて、その一人の孤児の後見人となつた。そうして、その子供が死んだために、妻がその財産を相続した。但しただ、その子供はわずかに六

カ月の後に死んだので、おそらく後見人夫婦のために冷遇と虐待を受けたせいであろうと想像された。近所の者は夜なかに子供の泣き叫ぶ声を聞いたことがあると証明した。またその死体を検査した医師は、營養欠乏のために死亡したのだといい、しかもその全身にはなまなましい紫斑しはんの痕あとが残っていたと言った。なんでもある冬の夜に、子供はそこを逃げ去ろうとして、裏庭まで這はい出して、塀を登ろうとして、疲れて倒れて、あくる朝になって石の上に死んでいるのを発見されたものであるらしい。しかし、そこに虐待の証拠はいくらか認められなくても、その子供を殺したという証拠はなんにも認められないのである。

彼の叔母とその夫はその残酷の行為に対して、子供が非常に強情であることを矯正するがためであったと弁解した。そうして、彼は半気がいのような片意地者であったと説明した。いずれにしても、この孤児の死によつて、叔母は自分の兄の財産を相続したのであった。

結婚の第一年が過ぎないうちに、かのアメリカ人はにわかにな英国を立ち去つて、それぎり再び帰つて来なかつた。彼はそれから二年の後、大西洋で難破した船に乗り合わせていたのである。

こうして未亡人とはなつたが、彼女は豊かに暮らしていた。しかもいろいろの災厄が彼女の上に落ちかかつて来て、預金の銀行は倒れる、投資の事業は失敗するという始末で、とうとう無産者となつてしまつた。それからいろいろの勤めに出たが、まただんだんに零落して、貸家の監督から更に下女奉公にまで出るようになった。彼女の性質を別に悪いという者もな

いのであるが、どこへ行つてもその奉公が長くつづかなかつた。彼女は沈着で、正直で、ことにその行儀がよいのを認められていながら、どうも彼女を推薦する者がなかつた。そうして、ついに養育院に落ち込んだのを、J氏が引き取つて来て貸家の番人に雇い入れたのである。その貸家は彼女が結婚生活の第一年に、一家の主婦として借り受けた家であつた。

J氏はそのあとへ、こういうことを付け加えて来た。

わたしが打ち毀せと勧めたかの部屋に、J氏はただひとりで一時間を過ごしたが、別になんにも見えるでもなく、聞こえるでもないにもかかわらず、彼は非常の恐怖を感じたので、断然わたしの注意にしたがつて、その壁をめくり、床を剥がすことに決心して、すでにその職人とも約束しておいたから、わたしの指定の日から工事に着手するというのであつた。

そこで時間をとりきめて、わたしはかの化け物屋敷へ行つた。私たちは窓のないがらんだうの部屋へはいつて、建物の幅木を取りのけ、それから床板をめくると、垂木の下に屑をもつておおわれた芻ね上げの戸が発見された。そのかくし鈴は人間が楽にはいられるくらいのお大きさで、鉄の縮金と鋳とで嚴重に釘付けにされていた。それらはずして、下の部屋へ降りてみると、その構造には別に怪しいところもなく、そこには窓も烟出しもあつたが、それらは煉瓦で塗り固められて、すでに多年を経たものであることが明らかに見られた。

蠟燭の火をたよりにそこらを検査すると、おなじ型の家具——三脚の椅子、一脚の櫛の木

の長椅子、一脚のテーブル、それらはほとんど八十年前の形式の物であった。壁にむかつて抽斗ひきだしつきの箱があつて、その箱から八十年前または百年前に、相当の地位を占めていた紳士が着用したのであるうと思われる、男の衣服の附属品の半ば腐朽しているのを発見した。

高価な鋼鉄のボタンや帶留めや、それらは宮中服の附属品であるらしく、ほかに立派な宮中用らしい帯剣とチョッキ、そのチョッキは金の編み糸で華麗に飾られていたらしいが、今はもう黒くなつて湿しめつていた。それから五ギニアの金と少しばかりの銀貨と、象牙の入場券——これはおそらく遠い昔の宴会か何かのときの物であろう——などが現われたが、私たちの主要なる発見は壁に取り付けてある鉄の金庫のようなもので、その錠をあけるのはなかなか困難であつた。

この金庫には三つの棚と二つの抽斗があつて、棚の上には密封したガラス罎びんがたくさんにならんでいた。その罎には無色の揮発性の物を貯わえてあつて、それはなんだかわからない。そのうちに燐とアンモニアの幾分を含んでいるが、別に有毒性の物ではなかつたと言ひ得るだけのことである。そこにはまた、すこぶる珍らしいガラスの管くだと、結晶石の大きい凝塊かたまりと、小さい点のある鉄の綱と、琥珀こはくと、非常に有力な天然磁石とが発見された。

一つの抽斗からは、金ぶちの肖像画があらわれた。密画に描いたもので、おそらく多年ここにあつたと思われるにもかかわらず、その色彩は眼に立つほどの新しさを保っていた。肖像はやや中年にすすんだ、四十七、八歳ぐらいの男であつた。

その男は特徴のある顔——はなはだ強い印象をあたえる顔で、それをくどくどと説明するよりも、ある大きい蟒蛇うわばみが人間に化けた時、すなわちその外形は人間にして蟒蛇のタイプであるといったらば、諸君にも大かた想像がつくであろう。前頭の広さと平ったさ、怖ろしい口の力をかくしているような細さと優しさ、翠玉エメラルドのごとくに青く輝いている長く大きい物凄い眼——更にまた、自己の大なる力を信ずるような、一種の無慈悲な落ちつきかた——。

わたしはその裏をあらためてみようと思つて、機械的にその肖像画を裏がえすと、そこにはペンタクル（五芒星形）が彫刻してあつた。ペンタクルの中央には階子はしごの形があつて、その三段目には一七六五年と記されていた。さらに精密に検査しているうちに、わたしは弾機ばねを発見した。その弾機を押すと、額がくのうしろは蓋ふたのように開いた。その蓋の裏には「マリアナが汝なんじに命ず。生くる時も死せる時も——に忠実なれ」と彫刻してあつた。

誰に忠実なれというのか、その人の名はここにしるさないが、それは私にも心当たりがないではなかつた。わたしは子供のときに老人から聞かされたことがある。かれは人の眼をくらます偽学者にせで、自分の家のなかで自分の妻とその恋がたきとを殺して逃走したために、約一年間もロンドン市中を騒がしたのであつた。しかし、わたしはそれをJ氏に語るのを厭いとうて、そのまま額の裏をとじてしまった。

金庫のうちの第一の抽斗をあけるのは、別にむずかしくもなかつたが、第二の抽斗をあけるには非常に困つた。錠をおろしてあるのではないが、どうしてもあかないので、結局その

隙間へ鑿の刃を挿し込んで、ようようにこじあげると、抽斗のなかには、はなはだ簡単な化学機械が順序正しくならんでいた。

小さな薄い書物——むしろ書板タブレットというべき物の上に、ガラスの皿を置いてあつて、その皿には清らかな液体がみだされていた。液体の上には磁石のような物が浮かんでいて、その磁石の針は急速に廻転するものであつた。しかし普通の磁石が示す方向とはちがつて、天文学者が惑星を指示するものとあまり異つていない七つの奇妙な文字がしるされていた。抽斗は木でしきられていて、それが榛はんの木のためぐいであることを後に知つたが、その抽斗の中から一種特別な、しかも強烈でもなく、また不愉快でもないような匂いが発して来た。

その匂いの原因はなんであるか知らないが、とにかくそれが人間の神経に感じるもので、J氏と私ばかりでなく、この部屋に居あわせた二人の職人も、指のさきから髪の毛の根までがうずくように感じたのであつた。

タブレットの詮議を急ぐので、わたしはその皿を取りのけると、磁石の針は非常の急速力をもつて廻転をはじめて、私は思わずその皿を床の上に取り落としてしまうほどに、全身に一種の衝動ショックを感じた。皿が毀れると、液体も流れ出して、磁石は部屋の隅にころがった。——と思うと、その瞬間に、あたかも巨人の手をもつて揺すぶるように、四方の壁があたりこちらへと揺れ出した。

職人たちはおどろいて、初めにこの部屋へ降りて来たところの階子はしごへ逃げあがつたが、そ

れぎりでも事も起こらないのを見て、安心して再び降りて来た。

やがて私がタブレットをひらくと、それは銀の止め金の付いた普通の赤いなめし皮に巻かれていて、そのなかにはただ一枚の厚い皮紙を入れてあった。皮には二重のペンタクルが書いてあって、そのなかに昔の僧侶が書いたらしい語がしるしてあった。それを翻訳すると、こうである。

——この壁に近づく者は、有情と非情と、生けると死せるとを問わず、この針の動くが如くにわが意思は働く。この家に呪いあれ。ここに住む者は不安なれ——

そのほかにはなんにもなかった。J氏はそのタブレットと呪文を焼き捨て、さらにその秘密の部屋とその上の寝室とをあわせて、土台下からすべて切り取ってしまった。そこでJ氏も勇気が出て、彼自身がこの家に一カ月ほども平気で住んだ。

そうになると、こんな閑静な、居ごこちのいい家はロンドンじゅうにもめつたにないというので、彼は相当に儲けて貸すことになったが、借家人はけっして苦情を言わなかった。

スペードの女王

プーシキン

Alexander S Pushkin

(1799-1837、露)

一七九九年五月二十六日、露国モスクワに生まる。

詩人、小説家、戯曲家、歴史家。

一八三七年一月二十七日、決闘に重傷を負って2日の後に死す。

而もその短生涯における著作はなほ多く、

露国文壇の最高位を占む。

近衛騎兵のナルモヴの部屋で骨牌かるたの会があつた。長い冬の夜はいつか過ぎて、一同が夜食ツツペの食卓に着いた時はもう朝の五時であつた。勝負に勝つた組はうまそうに食べ、負けた連中は気がなきそうに喰い荒らされた皿を見つめていた。しかし、シャンパン酒が出ると、とにかくだんだんに活気づいて来て、勝つた者も負けた者もみんなしゃべり出した。

「で、君はどうだったのだい、スーリン」と、主人公のナルモヴが訊きいた。

「やあ、相変わらず取られたのさ。僕はどうも運が悪いと諦あきらめているよ。なにしろやっていることがミランドール（一種の骨牌戯）だし、いつも冷静にしているから、手違いのしようがないのだが、それでいて、しじゅう負けているのだからね」

「だって君は、一度も赤札に賭けようとしなかつたじゃないか。僕は君の強情にはおどろいてしまつたよ」

「しかし君はヘルマンをどう思う」と、客の一人が若い工兵士官を指さしながら言った。「この先生は生まれてから、かつて一枚の骨牌札も手にしたこともなければ、一度も賭けをしたこともないのに、朝の五時までこうしてここに腰をかけて、われわれの勝負を眺めているのだからな」

「人の勝負を見ているのが僕には大いに愉快なのだ」と、ヘルマンは言った。「だが、僕は自分の生活に不必要な金を犠牲にすることが出来るような身分ではないからな」

「ヘルマンはドイツ人である。それだから彼は経済家である。……それでちゃんと分かっているじゃあないか」と、トムスキイが批評をくだした。「しかし、ここに僕の不可解な人物が一人ある。僕の祖母アンナ・フェドトヴナ伯爵夫人だがね」

「どうしてだ」と、他の客たちがたずねた。

「どうして僕の祖母がプリント（賭け骨牌の一種）をしないかが僕には分からないのだ」と、トムスキイは言いつづけた。

「どうしてといつて……。八十にもなったお婆さんがプリントをしないのを、何も不思議がることはないじゃないか」と、ナルモヴが言った。

「君はなぜ不可解だか、その理由を知るまい」

「むろん、知らないね」

「よし。では聴きたまえ。今から五十年ほど前に、僕の祖母はパリへ行つたことがあるのだ。ところが、祖母は非常に評判となつて、パリの人間はあの『ムスコビートのヴィーナス』のよくな祖母の流し眼の光栄に浴しようというので、争つて、そのあとをつけ廻したそうだ。祖母の話によると、なんでもリチエリユーとかいう男が祖母を口説きにかかったが、祖母に手きびしく撥ねつけられたので、彼はそれを悲観して、ピストルで頭を撃ち抜いて自殺してし

まったそうだ。

そのころの貴婦人間にはファロー（賭け骨牌）をして遊ぶのが流行はやっていた。ところが、宮廷に骨牌会があった時、祖母はオルレアン公のためにさんざん負かされて、莫大の金を取られてしまった。そこで、祖母は家へ帰ると、顔の美人粧パッチと袴フエスの籬骨を取りながら、祖父にその金額をうちあけて、オルレアン公に支払うように命じたのだというのだが、死んだ僕の祖父というのは、僕も知っていたが、まるで祖母の家令のようで、火のごとくに彼女を恐れていたのだ。その祖父が、祖母から負けた賭け金を聞いたときには、ほとんど気が遠くなつたというだろう、なんでもよほどの金高らしかったのだね。で、さすがの祖父も、半年のあいだに祖母が賭けでつかった金が五十万フランにも達していることをかぞえ立てて、自分のモスクワやサラトヴの領地がパリにあるわけではないから、とてもそんな巨額の負債は払えないと断然拒絶したのだ。すると、僕の祖母は祖父の耳のあたりを平手で一つ喰ひらわせた上に、自分が怒っているということを示すために、黙ひつて独りひとで寝てしまった。

さて、そのあくる日になって、祖母はゆうべの夫への懲らしめがうまく利きいてくれればいいかと心に祈りながら、祖父を呼び寄せて口説いたが、祖父はやはり頑きとして肯きかなかつた。祖母は自分には負債に負債があること、しかし貴族と馭ぎよ者しやとは違ちがうのであるから、負債はどこまでも支払わなければならないことを言い聞かせれば、おそろく説得できるものと思つたので、結婚以来初めて祖父に言訳いいわけをしたり、説明を試みたりしたのだが、結局それは無効に

終わって、祖父は依然として聞き容れなかった。そこでこの問題は夫婦間だけでは解決がつかなくなつて来て、祖母はどうしていいか、途方に暮れてしまったのだ。

これより前に、祖母は一人の非常に有名な男と知り合いになつていた。諸君はすでに、幾多の奇怪なる物語を伝えられる、サン・ジェルマン伯のことを聞いて知っているだろう。彼はみずから宿なしのユダヤ人といい、または不老長生薬の発見者といい、その他いろいろのことを言い触らしていたので、ある者は彼を詐欺師として軽蔑していたが、カサノヴァの記録によると、かれは間諜であつたそうだ。いや、そんなことはどうであろうと、彼は非常なる魅力の所有者であるとともに、社交界にはなくてはならぬ人物であつた。現に今日でも、彼のことといえれば僕の祖母は大いに同情して、もし誰かがその悪口でも言おうならば烈火のごとくに怒り出すのだ。

祖母は右のサン・ジェルマン伯が巨額の金でも自由になることを知っていたので、まず彼にすがりつこうと決心して、自分の家へ来てくれるように手紙を出すと、この奇怪なる老人はすぐにたずねて来て、憂いに沈んでいる祖母に対面したのだ。

そこで、祖母は自分の夫の残酷無情を大いに憤激しながら彼に訴えて、ただ一つの道はあなたの友誼と同情に頼むのほかはないという結論に到達すると、サン・ジェルマン伯はへよろしい。あなたがご入用の金額をお立て替え申しませう。しかし、それを私にご返却なさらない間は、あなたもご安心が出来ますまいし、私としてもあなたに新しいご心配をかけるの

は好ましくありません。ところで、ここに一つ、私はその金額のお立て替えをせずに、あなたのご心配を取り除く方法があります。それはあなたがもう一度賭けをなすつて、ご入用だけの金額をお勝ちになることです」と言つたそうだ。へでも伯爵さま。実は、私にはもうすこしの持ち合わせもないのです」と祖母が答えると、へいや、金などはちつとも要らないのです」と、今度はサン・ジェルマン伯がそれを打ち消して答えた。へまあ、私の言うことをお聞きなさい」と、それから彼は、われわれがおたがいによくやるような一つの秘策を祖母に授けたのだ」

若い将校連はだんだんに興味を感じて来て、熱心に耳を傾けていた。トムスキイはパイプをくわえると、うまそうに一服吸つてから、またそのさきを語りつづけた。

「その晩、祖母は女王の遊び（骨牌戲の一種）をするためにヴェルサイユの宮殿へ行つた。オルレアン公が親元おやもとをしていたので、祖母はいかにも尤もつともらしく、まだ負債を返済していないことを手軽に言訳してから、公爵と勝負をはじめた。祖母は三枚の骨牌札を選んで順じゆんにそれを賭けて行つて、とうとうソニカ（一番手つ取り早く勝負のきまる骨牌戲）で三枚とも勝つたので、祖母は前に負けただけの金額を全部回収してしまつたのだ」

「実に僥倖しあわせだな」と、一人の客が言つた。

「作り話さ」と、ヘルマンが批評をくだした。

「たぶん骨牌しるしに印でも付けておいたのではないか」と、三番目に誰かが言つた。

トムスキイは断乎だんこたる口ぶりで答えた。

「僕はそうは考えないね」

「なんだ」と、ナルモヴが言った。「君は三枚ともまぐれ当たりには勝つ方法を知っているお婆あさんが生きているのに、彼女からその秘密を引き出し得なかつたのか」

「むろん、僕もいろいろに抜け目なくやつては見たのだがね」と、トムスキイは答えた。「なにしろ、祖母には四人の息子があつて、そのうちの一人が僕の父だが、四人とも骨牌では玄人くろうとの方であつたし、その秘密を明かしてくれば叔父や父ばかりでなく、僕にだつてまんざら悪いことではないのだが、祖母はどうしてもその秘密を明かそうとはしなかつたのだ。だが、この話は叔父も彼の名譽にかけて、實際の話だと断言していたよ。それに、死んだシャプリツキイね——数百万の資産を蕩尽とうじんして、尾羽おは打ち枯らして死んだ——あの先生が、かつて若いときに三十万ルーブルばかり負けたことがあつたのだ。よくは覚えていないが、たぶん相手はゾリツヒであつたと思うがね。そこで先生、すっかり悲観してしまつていたところを、いつも若い者のでたらめな生活に対しては厳格であつた僕の祖母がひどく同情して、生涯に二度と骨牌をしないと誓言をさせた上で、三枚の切り札の秘密を彼に授けて、順じゆんに賭けるように教えたのだ。そこで、シャプリツキイは前に負けた敵のところへ出かけて行つて、新手的あらた賭けをやつた。初めの札で彼は五万ルーブルを賭けて、ソニカで勝つてしまつたが、その次の札で彼は十萬ルーブルを賭けるとまた勝つた。こうして最後まで同

じ手を打って、とうとう彼が前に負けた金額よりも遙かに多く勝ってしまったのだ……」
「もうそろそろ寝ようではないか。六時十五分過ぎだぜ」

実際すでに夜が明け始めていたので、若い連中はぐつとコップの酒を飲みほして、思い思いに帰って行った。

三人の侍女はA老伯爵夫人を彼女の衣裳部屋の姿見の前に坐らせてから、そのまわりに付き添っていた。第一の侍女は小さな臍脂へびにの器物を、第二の侍女は髮針ヘアピンの小箱を、第三の侍女は光った赤いリボンのついた高い帽子をささげていた。その伯爵夫人は美というものに対して、もはや少しの自惚うぬぼれもなかったが、今もなお彼女の若かりし時代の習慣をそのままに、二十年前の流行を固守した衣裳を身につけると、五十年前と同じように、長い時間をついやして念入りの化粧をした。窓ぎわでは、彼女の付き添い役の一人の若い婦人が刺繍台の前に腰をかけていた。

「お早うごございます、おばあさま」と、一人の青年士官がこの部屋へはいつて来た。

「今日は、リース嬢ボンジュール マドモアゼル・リース おばあさま、ちよつとお頼み申したいことがあるのですが……」

「どんなことですか、ポール」

「ほかでもないのですが、おばあさまに僕の友達をご紹介した上で、この金曜日の舞踏会にその人を招待したいのですが……」

「舞踏会にお呼び申して、その席上でそのおかたを私に紹介したらいいでしょう。それはそうと、きのうおまえはBさんのお家うちにおいででしたか」

「ええ、非常に愉快で、明けがたの五時頃まで踊り抜いてしまいました。そうそう、イエレッツカヤさんが実に美しかったですよ」

「そうですねえ。あの人はそんなに美しいのかねえ。あの人のおばあさまのダリア・ペトロヴナ公爵夫人のように美しいのかい。そういえば、公爵夫人も随分お年を召されたことだらうね」

「なにをおっしゃっているのです、おばあさま」と、トムスキイはなんの気もなしに大きい声で言った。「あの方はもう七年前に亡くなられたではありませんか」

若い婦人はにわか顔をあげて、この若い士官に合図をしたので、彼は老伯爵夫人には彼女の友達の死を絶対に知らせていないことに気がついて、あわてて口をつぐんでしまった。しかしこの老伯爵夫人はそうした秘密を全然知らなかつたので、若い士官がうっかりしゃべったことに耳を立てた。

「亡くなられた……」と、夫人は言った。「わたしはちつとも知らなかつた。私たちは一緒に女官に任命されて、一緒に皇后さまの御前ごぜんに伺候したのに……」

それからこの伯爵夫人は、彼女の孫息子にむかつて、自分の逸話をほとんど百回目で話して聞かせた。

「さあ、ポール」と、その物語が済んだときに夫人は言った。「わたしを起こしておくれ。それからリザンカ、わたしの嗅煙草かきの箱はどこにあります」

こう言つてから、伯爵夫人はお化粧を済ませるために、三人の侍女を連れて屏風びょうぶのうしろへ行つた。トムスキイは若い婦人とあとに残つた。

「あなたが伯爵夫人にお引き合わせなさりたいというお方は、どなたです」と、リザヴェツタ・イヴァノヴナは小声で訊いた。

「ナルモヴだよ。知っているだろう」

「いいえ。そのかたは軍人……。それとも官吏……」

「軍人さ」

「工兵隊のかた……」

「いや、騎馬隊だよ。どういうわけで工兵隊かなどと聞くのだ」

若い婦人はほほえんだだけで、黙つていた。

「ポール」と、屏風のうしろから伯爵夫人が呼びかけた。「私に何か新しい小説を届けさせて下さいな。しかし、今どきの様式スタイルのは御免ですよ」

「とおつしやると、おばあさま……」

「主人公が父や母の首を絞めたり、溺死者が出て来たりしないような小説にして下さい。わたしは水死した人たちのことを見たり聞いたりするのが恐ろしくつてね」

「今日こんにちでは、もうそんな小説はありませんよ。どうです、ロシアの小説は好きでしょうか」

「ロシアの小説などがありますか。では、一冊届けさせて下さい、ポール。きっとですよ」

「ええ。では、さようなら。僕はいそぎますから……。さようなら、リザヴェッタ・イヴァノヴァ。え、おまえはどうしてナルモヴが工兵隊だろうなどと考えたのだ」

こう言い捨てて、トムスキイは祖母の部屋を出て行った。

リザヴェッタは取り残されて一人になると、刺繍の仕事をわきへ押しやって、窓から外を眺め始めた。それから二、三秒も過ぎると、むこう側の角の家のところへ一人の青年士官があらわれた。彼女は両の頬をさつと赤くして、ふたたび仕事を取りあげて、自分のあたまを刺繍台の上にかがめると、伯爵夫人は盛装して出て来た。

「馬車を命じておくれ、リザヴェッタ」と、夫人は言った。「私たちはドライブして来ましよう」

リザヴェッタは刺繍の台から顔をあげて、仕事を片付け始めた。

「どうしたというのです。おまえは聾つんぼかい」と、老夫人は叫んだ。「すぐに出来るように、馬車を支度させておくれ」

「唯ただいま今すぐに申しつきます」と、若い婦人は次の間へ急いで行った。

一人の召使いがはいって来て、ポール・アクレサンドロヴィッチ公からのお使いだといって、二、三冊の書物を伯爵夫人に渡した。

「どうもありがとうと公爵にお伝え申しておくれ」と、夫人は言った。「リザヴェッタ……。リザヴェッタ……。どこへ行ったのだねえ」

「唯今、着物を着換えております」

「そんなに急がなくてもいいよ。おまえ、ここへ掛けて、初めの一冊をあけて、大きい声をして私に読んでお聞かせなさい」

若い婦人は書物を取りあげて二、三行読み始めた。

「もっと大きな声で……」と、夫人は言った。「どうしたというのです、リザヴェッタ……。おまえは声をなくしておしまいかえ。まあ、お待ちなさい。……あの足置き台をわたしにお貸しなさい。……そうして、もっと近くへおいで。……さあ、お始めなさい」

リザヴェッタはまた二ページほど読んだ。

「その本をお伏せなさい」と、夫人は言った。「なんとというくだらない本だろう。ありがとうございまして、ポール公に返しておしまいなさい。……そうそう、馬車はどうしました」

「もう支度が出来ております」と、リザヴェッタは街まちの方をのぞきながら答えた。

「どうしたというのです、まだ着物も着換えないで……。いつでも私はおまえのために待たされなければならぬのですよ。ほんとに焦じれたいことだね、リザヴェッタ」

リザヴェッタは自分の部屋へ急いでゆくと、それから二秒と経たないうちに夫人は力いっぱいベルを鳴らし始めた。三人の侍女が一方の戸口から、また一人の従者がもう一方の戸口からあわてて飛び込んで来た。

「どうしたというのですね。わたしがベルを鳴らしているのが聞こえないのですか」と、夫人は呶鳴^{どな}った。「リザヴェッタ・イヴァノヴナに、わたしが待っているとお願いなさい」

リザヴェッタは帽子と外套を着て戻って来た。

「やつと来たのかい。しかし、どうしてそんなに念入りにお化粧をしたのです。誰かに見せようとでもお思いなのかい。お天気はどうです。風がすこし出て来たようですね」

「いいえ、奥様。静かなお天気でございます」と、従者は答えた。

「おまえはでたらめばかりお言いだからね。窓をあけてごらんなさい。それ、ご覧。風が吹いて、たいへん寒いじゃないか。馬具を解いておしまいなさい。リザヴェッタ、もう出るのはやめにしましょう。……そんなにお粧^{つく}りをするには及ばなかったね」

「わたしの一生はなんとこのだろう」と、リザヴェッタは心のうちで思った。

実際、リザヴェッタ・イヴァノヴナは非常に不幸な女であった。ダンテは「未熟なるもののパンは苦^{にが}く、彼の階梯は急なり」と言っている。しかもこの老貴婦人の憐れな話し相手リザヴェッタが、居候^{いそうろう}と同じような辛い^{つら}い思いをしていることを知っている者は一人もなかった。

A伯爵夫人はけつして腹の悪い婦人ではなかったが、この世の中からちやほやされて来た婦人のように気まぐれで、過去のことばかりを考えて現在のことを少しも考えようとしないう年寄りらしく、いかにも強欲で、我儘^{わがまま}であった。彼女はあらゆる流行社会に頭を突っ込んでい

たので、舞踏会にもしばしば行つた。そうして、彼女は時代おくれの衣裳やお化粧をして、舞踏室になくはならない不格好な飾り物のように、隅の方に席を占めていた。

舞踏室へはいつて来た客は、あたかも一定の儀式でもあるかのようにな彼女に近づいて、みな丁寧にあ挨拶するが、さてそれが済むと、もう誰も彼女の方へは見向きもしなかつた。彼女はまた自分の邸で宴会を催す場合にも、非常に厳格な礼儀を固守していた。そのくせ、彼女はもう人びとの顔などの見分けはつかなかつた。

夫人のたくさんな召使いたちは主人の次の間や自分たちの部屋にいる間にだんだん肥つて、年をとつてゆく代りに、自分たちの仕たい三味さんまいのことをして、その上おたがいに公然と老伯爵夫人から盗みをすることを競争していた。そのなかで不幸なるリザヴェツタは家政の犠牲者であつた。彼女は茶を淹いれると、砂糖を使いすぎたと言つて叱られ、小説を読んで聞かせると、こんなくだらないものと言つて、作者の罪が自分の上に降りかかつて来る。夫人の散歩のお供をして行けば、やれ天気がどうの、舗道がどうのと言つて、やつあたりの小言を喰う。給料は郵便貯金に預けられてしまつて、自分の手にはいるということはほとんどない。ほかの人たちのような着物を買いたいと思つても、それも出来ない。特に彼女は社交界においてには実にみじめな役廻りを演じていた。誰も彼も彼女を知つてはいるが、たれ一人として彼女に注目する者はなかつた。

舞踏会に出ても、彼女はただ誰かに相手がない時だけ引つ張り出されて踊るぐらいなもの

で、貴婦人連も自分たちの衣裳の着くずれを直すために舞踏室から彼女を引っ張り出す時でもなければ、彼女の腕に手をかけるようなことはなかった。したがって、彼女はよく自己を知り、自己の地位をもはつきりと自覚していたので、なんとかして自分を救ってくれるような男をさがしていたのであるが、そわそわと日を送っている青年たちはほとんど彼女を問題にしなかった。しかもリザヴェッタは世間の青年たちが追い廻している、面の皮の厚い、心の冷たい、年頃としごろの娘たちよりは百層倍も可愛らしかった。彼女は燦爛さんらんとして輝いているが、しかも退屈な応接間からそつと忍び出て、小さな惨めみじな自分の部屋へ泣きにゆくこともしばしばあった。その部屋には一つの衝立つたてと箆筒と姿見と、それからペンキ塗りの寝台があつて、あぶら蠟燭が銅製の燭台の上に寂しくともっていた。

ある朝——それはこの物語の初めに述べた、かの士官たちの骨牌会かるたから二日ほどの後で、これからちょうど始まるうとしている事件の一週間前のことであつた。リザヴェッタ・イヴァノヴナは窓の近くで、刺繍台の前に腰をかけていながら、ふと街まちの方を眺めると、彼女は若い工兵隊の士官が自分のいる窓をじつと見上げているのに気がついたが、顔を俯向うつむけてまたすぐに仕事をはじめた。それから五分ばかりのあと、彼女は再び街のほうを見おろすと、その青年士官は依然として同じ場所に立っていた。しかし、往來の士官に色眼などを使ったことのない彼女は、それぎり街のほうをも見ないで、二時間ばかりは首を下げたままで、刺繍をつづけていた。

そのうちに食事の知らせがあつたので、彼女は立つて刺繡の道具を片付けるときに、なんの気もなしにまたもや街のほうをながめると、青年士官はまだそこに立っていた。それは彼女にとつてまったく意外であつた。食後、彼女は気がかりになるので、またもやその窓へ行つてみたが、もうその士官の姿は見えなかつた。——その後、彼女は、その青年士官のことを別に気にもとめていなかった。

それから二日を過ぎて、あたかも伯爵夫人と馬車に乗ろうとしたとき、彼女は再びその士官を見た。彼は毛皮の襟で顔を半分かくして、入り口のすぐ前に立っていたが、その黒い両眼は帽子の下で輝いていた。リザヴェツタはなんとも分からずにはつとして、馬車に乗つてもまだ身内がふるえていた。

散歩から帰ると、彼女は急いで例の窓ぎわへ行つてみると、青年士官はいつもの場所に立つて、いつもの通りに彼女を見あげていた。彼女は思わず身を引いたが、次第に好奇心にかられて、彼女の心はかつて感じたことのない、ある感動に騒がされた。

このとき以来、かの青年士官が一定の時間に、窓の下にあらわれないという日は一日もなかった。彼と彼女のあいだには無言のうちに、ある親しみを感じて来た。いつもの場所で刺繡をしながら、彼女は彼の近づいて来るのをおのずから感じるようになった。そうして顔を上げながら、彼女は一日ごとに彼を長く見つめるようになった。青年士官は彼女に歓迎されるようになったのである。彼女は青春の鋭い眼で、自分たちの眼と眼が合うたびに、男の

蒼白い頬がにわかには紅らむのを見てとつた。それから一週間目ぐらいになると、彼女は男に微笑を送るようにもなつた。

トムスキイが彼の祖母の伯爵夫人に、友達の一人を紹介してもいいかと訊いたとき、この若い娘のこころは烈しくとどろいた。しかしナルモヴが、工兵士官でないと聞いて、彼女は前後の考えもなしに、自分の心の秘密を気軽なトムスキイに洩らしてしまったことを後悔した。

ヘルマンはロシアに帰化したドイツ人の子で、父のわずかな財産を相続していた。かれは独立自尊の必要を固く心に沁み込まされているので、父の遺産の収入には手も触れないで、自分自身の給料で自活していた。したがって彼に、贅沢などは絶対に許されなかつたが、彼は控え目がちで、しかも野心家であつたので、その友人たちのうちには稀には極端な節約家の彼に散財させて、一夕の歡を尽くすようなこともあつた。

彼は強い感情家であるとともに、非常な空想家であつたが、堅忍不拔な性質が彼を若い人間にありがちな墮落におちいらせなかつた。それであるから、肚では賭け事をやりたいと思つても、彼はけつして一枚の骨牌をも手にしなかつた。彼にいわせれば、自分の身分では必要のない金を勝つために、必要な金をなくすことは出来ないと考えていたのである。しかも彼は骨牌のテーブルにつらなつて、夜通しそこに腰をかけて、勝負の代るごとに自分のことのように心配しながら見ているのであつた。

三枚の骨牌の物語は、彼の空想に多大な刺戟しげきをあたえたので、彼はひと晩そのことばかりをかんがえていた。

「もしも……」と、次の朝、彼はセント・ペテルスブルグの街を歩きながら考えた。「もしも老伯爵夫人が彼女の秘密を僕に洩らしてくれたら……。もしも彼女が三枚の必勝の切り札を僕に教えてくれたら……。僕は自分の将来を試さずにはおかないのだが……。僕はまず老伯爵夫人に紹介されて、彼女に可愛がられなければ——彼女の恋人にならなければならぬ……。しかしそれはなかなか手間がかかるぞ。なにしろ相手は八十七歳だから……。ひよつとすると一週間のうちに、いや二日も経たないうちに死んでしまうかもしれない。三枚の骨牌の秘密も彼女とともに、この世から永遠に消えてしまうのだ。いったいあの話はほんとうかしら……。いや、そんな馬鹿らしいことがあるものか。経済、節制、努力、これが僕の三枚の必勝の切り札だ。この切り札で僕は自分の財産を三倍にすることが出来るのだ……。いや、七倍にもふやして、安心と独立を得るのだ」

こんな瞑想にふけていたので、彼はセント・ペテルスブルグの目貫めぬきの街の一つにある古い建物の前に来るまで、どこをどう歩いていたのか気がつかなかった。街は、燦然さんぜんと輝いていて、その建物の玄関の前へ、次から次へとひき出される馬車の行列のたけに通行止めになっていた。その瞬間に、妙齢の婦人のすらりとした小さい足が馬車から舗道へ踏み出されたかと思うと、次の瞬間には騎兵士官の重そうな深靴や、社交界の人びとの絹の靴下や靴があら

われた。毛皮や羅紗の外套が玄関番の大男の前をつづいて通った。

ヘルマンは立ち停まった。

「どなたのお邸やしきです」と、彼は角のところで番人にたずねた。

「A伯爵夫人のお邸です」と、番人は答えた。

ヘルマンは飛び上がるほどにびっくりした。三枚の切り札の不思議な物語がふたたび彼の空想にあらわれて来た。彼はこの邸の前を往きつ戻りつしながら、その女主人公と彼女の奇怪なる秘密について考えた。

彼は遅くなつて自分の質素な下宿へ帰つたが、長いあいだ眠ることが出来なかつた。ようよう少しく眠りかけると、骨牌や賭博台や、小切手の束や、金貨の山の夢ばかり見た。彼は順じゆんに骨牌札に賭けると、果てしもなく勝つてゆくので、その金貨を掻きあつめ、紙幣をポケットに捻ねじ込んだ。

しかも翌あさ遅く眼をさましたとき、彼は空想の富を失つたのにがっかりしながら街へ出ると、いつの間にか伯爵夫人の邸の前へ来た。ある未知みちの力がそこへ彼を引き寄せたともいえるのである。彼は立ち停まって窓を見上げると、一つの窓から房ふさとした黒い髪の頭が見えた。その頭はおそらく書物か刺繍台の上に着むいていたのであろう。と思う間に、その頭はもたげられ、生き生きとした顔と黒い二つのひとみが、ヘルマンの眼にはいった。

彼の運命はこの瞬間に決められてしまった。

三

リザヴェッタ・イヴァノヴナは彼女の帽子と外套をぬぐか脱がないうちに、伯爵夫人は彼女を呼んで、ふたたび馬車の支度をするように命じたので、馬車は玄関の前に牽き出された。そうして、夫人と彼女とはおのおのその席に着こうとした。二人の馭者が夫人を扶けて馬車へ入れようとする時、リザヴェッタはかの工兵士官が馬車の後にびったりと身を寄せて立っているのを見た。——彼は彼女の手を掴んだ。あつと驚いて、リザヴェッタはどぎまぎしている、次の瞬間にはもうその姿は消えて、ただ彼女の指のあいだに手紙が残されてあつたのに気がついたので、彼女は急いでそれを手袋のなかに隠してしまった。

ドライブしていても、彼女にはもう何も見えなかった。聞こえなかった。馬車で散歩に出たときには「今会ったかたはどなただ」とか、「この橋の名はなんとというのだ」とか、「あの掲示板にはなんと書いてある」とか、絶えず訊くのが夫人の習慣になつていたが、なにしろ場合が場合であるので、きょうに限つてリザヴェッタはとかくに辻褄の合わないような返事ばかりするので、夫人はしまいに怒り出した。

「おまえ、どうかしていますね」と、夫人は呶鳴つた。「おまえ、気は確かかえ。どうしたのです。わたしの言うことが聞こえないのですか。それとも分からないでもお言いなのですか。

お蔭さまで、わたしはまだ正氣でいるし、呂律ろれつもちゃんと廻まわつていますのですよ」

リザヴェツタには夫人の言葉がよく聞こえなかった。邸やしきへ帰ると、彼女は自分の部屋へかけ込んで、手袋から彼の手紙を引き出すと、手紙は密封してなかった。読んでみると、それはドイツの小説の一字一句を訳して、そのままに引用した優しい敬虔けいけんな恋の告白であった。しかもリザヴェツタはドイツ語についてはなんにも知らなかったので、非常に嬉しくなってしまうた。

それにもかかわらず、この手紙は彼女に大いなる不安を感じさせて来た。実際、彼女は生まれてから若い男と人目を忍ぶようなことをした経験は一度もなかったのに、彼の大胆には驚かされもした。そこで、彼女は不謹慎な行為をした自分を責めるとともに、このさきどうしていいか分からなくなつて来た。とにかく、もう窓ぎわに坐るのをやめて、彼に対して無関心な態度をとり、自分とこのうえ親しくしようとする男の欲望を断たせるのがよいか。あるいはその手紙を彼に返すか、または冷淡なきつぱりした態度で彼に拒絶の返事を書くべきであるか。彼女はまったく決断に迷つたが、それについて相談するような女の友達も、忠告をあたえてくれるような人もなかった。リザヴェツタはついに彼に返事を書くことに決めた。彼女は自分の小さな机の前に腰をかけると、ペンと紙を取つて、その文句を考えはじめた。そうして、書いては破り、書いては破りしたが、結局彼女が書いた文句は、あまりに男の心をそそり過ぎるか、あるいは素気すげなくあり過ぎるかで、どうも思つたように書けなかった。そ

れでもようようのことで、自分にも満足の出来るような二、三行の短い手紙を書くことが出来た。

——彼女はこう書いた。

「あなたのお手紙が高尚であるのと、あなたが軽率な行為をもつてわたくしをお辱しめなざりたくないとおっしゃることを、わたくしは嬉しく存じます。しかし、わたくしたちの交際はほかの方法で始めなければなりません。わたくしはひとまずあなたのお手紙をお返し申しますが、どうぞ不躰な仕業とお怨み下さりませぬよう、幾重にもお願い申します」

翌日、ヘルマンの姿があらわれるやいなや、刺繍の道具の前に坐っていたリザヴェッタは応接間へ行つて、通風の窓をあけて、青年士官が感づいて拾いあげるに相違ないと思ひながら、街の方へその手紙を投げた。

ヘルマンは飛んで行つて、その手紙を拾い上げて、近所の菓子屋の店へ行つた。密封した封筒を破つてみると、内には自分の手紙とリザヴェッタの返事がいっていった。彼はこんなことだろうと予期していたので、家へ帰ると、さらにその計画について深く考えた。

それから三日の後、一人の晴れやかな眼をした娘が小間物屋から来たといつて、リザヴェッタに一通の手紙をとどけに来た。リザヴェッタは何かの勘定の請求書でもあるのかと、非常に不安な心持ちで開封すると、たちまちヘルマンの手蹟に気がついた。

「間違えているのではありませんか」と、彼女は言った。「この手紙は私へ来たものではない

ません」

「いえ、あなたへでございます」と、娘は抜け目のなさそうな微笑を浮かべながら答えた。「どうぞお読みなすつて下さい」

リザヴェツタはその手紙をちらりと見ると、ヘルマンは会見を申し込んで来たのであった。「まあ、そんなこと……」と、彼女はその厚かましい要求と、気違いのような態度にいよいよ驚かされた。「この手紙は私へではありません」

そう言うのと、彼女はそれを引き裂いてしまった。

「では、あなたへの手紙でないなら、なぜ引き裂いておしまいになったのでございます」と、娘は言った。「わたくしは頼まれたおかたに、そのお手紙をお返し申さなければなりません」「もうこれから二度と再び手紙などを私のところへ持つて来ないがようござんす。それから、あなたに使いを頼んだかたに、恥かしいとお思いなさいと言つて下さい」と、リザヴェツタはその娘からやりこめられて、あわてながら言った。

しかしヘルマンは、そんなことで断念するような男ではなかった。毎日、彼は手を替え品をかえて、いろいろの手紙をリザヴェツタに送った。それからの手紙は、もうドイツ語の翻訳ではなかった。ヘルマンは感情の湧くがままに手紙を書き、彼自身の言葉で話しかけた。そこには彼の剛直な欲望と、おさえがたき空想の乱れとがあふれていた。

リザヴェツタはもうそれらの手紙を彼にかえそうとは思わなくなつたばかりか、だんだん

にその手紙の文句に酔わされて、とうとう返事を書きはじめた。そうして、彼女の返事は少しずつ長く、かつ愛情がこもっていつて、ついには窓から次のような手紙を彼に投げあたえるようにもなった。

「今夕は大使館邸で舞踏会があるはずでございます。伯爵夫人はそれにおいてなさるでしょう。そうして、わたしたちはたぶん二時までそこにおりましょう。今夜こそは二人ぎりでお会いのできる機会でございます。伯爵夫人がお出ましになると、たぶんほかの召使いはみな外出してしまつて、お邸にはスイス人のほかには誰もいなくなると思います。そのスイス人はきまつて自分の部屋へ下がつて寝てしまいます。それですから、十一時半ごろにおいでください。階段をまつすぐに昇つていらつしやい。もし控えの間で誰かにお逢いあしたらば、伯爵夫人がいらつしやるかとおたずねなさい。きつといらつしやらないと言われましようから、その時は仕方がございませんからいつたん外出なすつて下さい。十中の八九までは誰にもお逢いなさらないと存じます。——召使いたちがお邸におりましても、みんな一つ部屋に集まつていると思います。——次の間をおいでになつたらば、左へお曲がりなすつて、伯爵夫人の寢室までまつすぐにおいで下さると、寢室の衝立ついたてのうしろに二つのドアがございます。その右のドアの奥は、伯爵夫人がかつておはいりになつたことのない私室になっておりますが、左のドアをおあけになると廊下がありまして、さらに螺旋形らせんがたの階段をお昇りになると、わたくしの部屋になっております」

ヘルマンは指定された時刻の来るあいだ、虎のようからだを顫ふるわせていた。夜の十時ごろ、彼はすでに伯爵夫人邸の前へ行っていた。天気はひどく悪かった。風は非常に激しく吹いて、雨まじりの雪は大きい花びらを飛ばしていた。街燈は暗く、街は鎮しずまりかえっていた。憐あはれな老馬に牽ひかせてゆく櫛そりの人が、こんな夜に迷っている通行人を怪しむように見返りながら通った。ヘルマンは外套で深く包まれていたので、風も雪も身に沁しみみなかった。

やつとのこと、伯爵夫人の馬車は玄関さきへ牽ひき出された。黒い毛皮の外套に包まれた、腰のまがつた老夫人を、二人の馭お者が抱えるようにして連れ出すと、すぐにそのあとから、温かそうな外套をきて、頭に新しい花の環を頂いたりザヴェツタが付き添って出て来た。馬車のドアがしまつて、車は柔らかな雪の上を静かに馳はせ去ると、門番は玄関のドアをしめて、窓は暗くなった。

ヘルマンは人のいない邸の近くを往きつ戻りつしていたが、とうとう街燈の下に立ちどまつて時計を見ると、十一時を二十分過ぎていた。ちょうど十一時半になったときに、ヘルマンは邸の石段を昇のぼり輝きらんでいる廊下を通ると、そこに番人は見えなかった。彼は急いで階段をあがって控え室のドアをあけると、一人の侍者がランプのそばで、古風な椅子に腰をかけながら眠ねっていたので、ヘルマンは蹙あしおと音を忍しのばせながらそのそばを通り過ぎた。応接間も食堂もまつ暗であつたが、控え室のランプの光りが幽かすかなながらもそこまで洩あれていた。ヘルマンは伯爵夫人の寢室まで来た。古い偶像でいっぱいになっている神龕かみには、金色の

ランプがともつていた。色のあせたふつくらした椅子と柔らかそうなクッションを置いた長椅子が、陰気ではあるがいかにも調和よく、部屋の中に二つずつ並んでいて、壁にはシナの絹が懸かっていた。一方の壁には、パリでルブラン夫人の描いた二つの肖像画の額が懸かっていたが、一枚はどつしりとした赭あから顔の四十ぐらいの男で、派手な緑色の礼服の胸に勲章を一つ下げていた。他の一枚は美しい妙齡の婦人で、鉤鼻かぎばなで、ひたいの髪を巻いて、髪粉をつけた髪には薔薇の花が挿してあった。偶ずみには磁器製の男の牧人と女の牧人や、有名なレフロイの工場製の食堂用時計や、紙匣はりぬきばこや、球転ルレット（一種の賭博）の道具をはじめとして、モンゴルファイエールの軽気球や、メスマルの磁石が世間を騒がせた前世紀の終わりにはやった、婦人の娯楽用の玩具おもちゃがたくさんにならべてあった。

ヘルマンは衝立ついたてのうしろへ忍んで行つた。そのうしろには一つの小さい寝台があり、右の方には私室のドア、左の方には廊下へ出るドアがあった。そこで、彼は左の方のドアをあけると、果たして彼女の部屋へ達している小さい螺旋形の階段が見えた。——しかも彼は、引つ返してまっ暗な私室へはいって行つた。

時はしずかに過ぎた。邸内は寂せきとして鎮まり返つていた。応接間の時計が十二時を打つと、その音が部屋から部屋へと反響して、やがてまた森しんとなつてしまった。ヘルマンは火のないストーブに凭よりながら立つていた。危険ではあるが、避け難き計画を決心した人のように、その心臓は規則正しく動悸どうきを打つて、彼は落ちつき払つていた。

午前一時が鳴った。それから二時を打ったころ、彼は馬車のわだちの音を遠く聞いたので、われにもあらで興奮を覚えた。やがて馬車はだんだんに近づいて停まった。馬車の踏み段をおろす音がきこえた。邸の中がにわかになじめいて、召使いたちが上を下へと走り廻りながら呼びかわす声が入り乱れてきこえたが、そのうちにすべての部屋には明かりがとぼされた。三人の古風な寢室係の女中が寢室へはいつて来ると、間もなく伯爵夫人があらわれて、死んだ者のようにヴォルテル時代の臂掛け椅子に腰を落とした。

ヘルマンは隙間から覗いてみると、リザヴェッタ・イヴァノヴナが彼のすぐそばを通った。彼女が螺旋形の階段を急いで昇つてゆく跽音を聞いた刹那、彼の心臓は良心の苛責といったようなもののためにちくりと刺されるような気もしたが、そんな感動はすぐ消えて、彼の心臓はまたもとのように規則正しく動悸を打っていた。

伯爵夫人は姿見の前で着物をぬぎ始めた。それから、薔薇の花で飾った帽子を取つて、髪粉を塗った仮髪をきちんと刈つてある白髪からはずすと、髪針が彼女の周囲の床にばらばらと散った。銀糸で縫いをしてある黄いろい縞子の着物は、彼女の脾びている足もとへ落ちた。ヘルマンは彼女のお化粧の好ましからぬ秘密を残らず見とどけた。夫人はようように夜の帽子をかぶつて、寝衣を着たが、こうした服装のほうが年相応によく似合うので、彼女はそんなに忌らしくも、醜くもなくなつた。

普通のすべての年寄りのように、夫人は眠られないので困っていた。着物を着替えてから、

彼女は窓ぎわのヴォルテル時代の臂掛け椅子に腰をかけると、召使いを下がらせた。蠟燭を消してしまったので、寝室にはただ一つのランプだけがともっていた。夫人は真つ黄と見えるような顔をして、締まりのない唇をもぐもぐさせながら、体をあちらこちらへ揺すぶっていた。彼女のどんよりした眼は心の空虚をあらわし、また彼女が体を揺すぶっているのは自己の意志で動かしているのではなく、神経作用の結果であることを誰でも考えるであろう。突然この死人のような顔に、なんとも言いようのない表情があらわれて、唇の顫えも止まり、眼も活気づいて来た。夫人の前に一人の見知らぬ男が突つ立っていたからであつた。

「びつくりなさらないで下さい。どうぞ、お驚きなさらないで下さい」と、彼は低いながらもしっかりと声で言った。「わたくしはあなたに危害を加える意志は少しもございません。ただ、あなたにお願いがあつて参りました」

夫人は彼の言葉がまつたく聞こえないかのように、黙つて彼を見詰めていた。ヘルマンはこの女は聾だと思つて、その耳の方へからだをかがめて、もう一度繰り返して言ったが、老夫人はやはり黙つていた。

「あなたは、わたくしの一生の幸福を保証して下さいることがお出来になるのです」と、ヘルマンは言いつづけた。「しかも、あなたには一銭のご損害をお掛け申さないので。わたくしはあなたが勝負に勝つ切り札をご指定なさることがお出来になるということを知つておるのです」

こう言つて、ヘルマンは言葉を切つた。夫人がようやく自分の希望を諒解して、それに答える言葉を考へているように見えたからであつた。

「それは冗談です」と、彼女は答へた。「ほんの冗談に言つたまでのことです」

「いえ、冗談ではありません」と、ヘルマンは言い返した。「シャプリッツキイを覚えていらつしやるでしょう。あなたはあの人に三枚の骨牌かるたの秘密をお教えになつて、勝負にお勝たせになりましたではありませんか」

夫人は明らかに不安になつて来た。彼女の顔には烈はげしい心の動揺があらわれたが、またすぐに消えてしまつた。

「あなたは三枚の必勝骨牌をご指定なされないのですね」と、ヘルマンはまた言つた。

夫人は依然として黙つていたので、ヘルマンは更に言葉をつづけた。

「あなたは、誰にその秘密をお伝えなさるおつもりですか。あなたのお孫さんにですか。あの人たちは別にあなたに秘密を授けてもらわなくとも、有りあまるほどのお金持ちです。それだけに、あの人たちは金の価値を知りません。あなたの秘密は金使いの荒い人には、なんの益するところもありません。父の遺産を保管することの出来ないような人間は、たとい悪魔を手先に使つたにしても、結局はあわれな死に方をしなければならぬのでしよう。わたくしはそんな人間ではございませぬ。わたくしは金の値あたいというものをよく知つております。あなたもわたくしには、三枚の切り札の秘密をお拒こぼみにはならないでしよう。さあ、いかが

ですか」

彼はひと息ついて、ふるえながらに相手の返事を待つていたが、夫人は依然として沈黙を守っているので、ヘルマンはその前にひざまずいた。

「あなたのお心が、いやしくも恋愛の感情を経験していられるならば……」と、彼は言った。「そうして、もしもその法悦をいまだに覚えていられるならば……。かりにもあなたがお産みになったお子さんの初めての声にほえまれた事がありましたらば……。いやしくも人間としてのある感情が、あなたの胸のうちにお湧きになった事がありましたらば、わたくしは妻として、恋人として、母としての愛情におすがり申してお願い申します。どうぞ私のこの嘆願を^{しりぞ}斥けないで下さい。どうぞあなたの秘密をわたくしにお洩らし下さい。あなたにはもうなんのお入り用もないではありませんか。たといどんな恐ろしい罪を受けようとも、永遠の神の救いを失おうとも、悪魔とどんな取り引きをしようとも、わたくしはけつして厭^{いと}いません。……考えて下さい。……あなたはお年を召しておられます。そんなに長くはこの世においでになられないお体^{からだ}です……わたくしはあなたの罪を自分のたましいに引き受ける覚悟でおります。どうぞあなたの秘密をわたくしにお伝え下さい。一人の男の幸福が、あなたのお手に握られているということを思い出してください。いいえ、わたくし一人ではありません、わたくしの子孫までがあなたを祝福し、あなたを聖者として尊敬するでしょう……」

夫人は一言も答えなかつた。ヘルマンは立ち上がった。

「老いぼれの鬼婆め」と、彼は齒ぎしりしながら叫んだ。「よし。否^{いや}応^{おう}なしに返事をさせてやろう」

彼はポケットからピストルを把^とり出した。

それを見ると、夫人は再びその顔に烈^{はげ}しい感動をあらわして、射殺されまいとするかのよう^うに頭を振り、手を上げたかと思うと、うしろへそり返ったままに気を失った。

「さあ、もうこんな子供じみたくだらないことはやめましょう」と、ヘルマンは彼女の手をとりながら言った。「もうお願い申すのもこれが最後です。どうぞわたくしにあなたの三枚の切り札の名を教えて下さい。それとも、お忌^{いや}ですか」

夫人は返事をしなかった。ヘルマンは彼女が死んだのを知った。

四

リザヴェッタ・イヴァノヴナは夜会服を着たままで、自分の部屋に坐つて、深い物思いに沈んでいた。邸へ帰ると、彼女は忌いやながら自分の用をうけたまわりに来た部屋付きの召使いにむかつて、着物はわたし一人で脱ぐからといって、早そうにそこを立ち去らせてしまった。そうして、ヘルマンが来ていることを期待しながら、また一面には来ていてくれないようにと望みながら、胸を躍らせて自分の部屋へ昇つて行つた。ひと目見ると、彼女は彼がないことをさとした。そうして、彼に約束を守らないようにさせてくれた自分の運命に感謝した。彼女は着物も着かえずに腰をかけたままで、ちよつとの間に自分をこんなにも深入りさせてしまった今までの経過を考えた。

彼女が窓から初めて青年士官を見たときから三週間を過ぎなかった。——それにもかかわらず、彼女はすでに彼と文通し、男に夜の会見を許すようになった。彼女は男の手紙の終わりに書いてあったので、初めてその名を知つたぐらいで、まだその男と言葉を交したこともなければ、男の声も——今夜までは、その噂さえも聞いたことはなかった。ところが不思議なことには、今夜の舞踏会の席上で、ポーリン・N公爵の令嬢がいつになく自分と踊らなかつたので、すっかり気を悪くしてしまつたトムスキイが、おまえばかりが女ではないぞといつ

た復讐的態度で、リザヴェッタに相手を申し込んで、始めからしまいまで彼女とマズルカを踊りつづけた。その間、彼は絶えずリザヴェッタが工兵士官ばかりを鼻^{ひいき}にして、をからかった挙げ句、彼女が想像している以上に、自分は深く立ち入って万事を知っているとまことしやかに言った。実際彼女は自分の秘密を彼に知られてしまったのかといくたびか疑ったほどに、彼の冗談のあるものは巧^{うま}くあたった。

「どなたからそんなことをお聞きになりました」と、ほほえみながら彼女は訊^きいた。

「君の親しい人の友達からさ」と、トムスキイは答えた。「ある非常に有名な人からさ」

「では、その有名なかたというのは……」

「その人の名はヘルマンというのだ」

リザヴェッタは黙っていた。彼女の手足はまったく感覚がなくなった。

「そのヘルマンという男はね」と、トムスキイは言葉をつづけた。「ローマンチックの人物だね。ちよつと横顔がナポレオンに似ていて、たましいはメフィストフェレスだね。まあ、僕の信じているところだけでも、彼の良心には三つの罪悪がある……。おい、どうした。ひどく蒼^{あお}い顔をしているじゃないか」

「わたくし、少し頭痛がしますので……。そこで、そのヘルマンとかおっしゃるかたは、どんなことをなさいましたの。お話をして下さいませんか」

「ヘルマンはね、自分のあるお友達に非常な不平をいだいているのだ。彼はいつも、自分がそ

のお友達の地位であつたら、もつと違つたことをすると云つてゐるが……。僕はどうもヘルマン自身が君におぼしめしがあると思うのだ。少なくとも、彼はその友達が君のことを話すときには、眼の色を変えて耳を傾けているからね」

「では、どこでそのかたはわたくしをご覧なすつたのでしょう」

「たぶん教会だろう。それとも觀兵式かな。……さあ、どこで見そめたかは神様よりほかには知るまいな。ひよつとしたら君の部屋で、君がねむっている間かもしれないぞ。とにかく、あの男ときたら……」

ちやうどその時に、三人の婦人が彼のところへ近づいて来て、「お忘れになつて。それとも、覚えていらした……」と、フランス語で問いかけたので、この会話はリザヴェッタをさんざん焦らしたままで、それなりになつてしまつた。

トムスキイが選んだ婦人はポーリン公爵令嬢その人であつた。公爵令嬢はいくたびもトムスキイと踊つてゐるうちに、彼とすつかり仲直りをして、踊りが済んだのちに彼は公爵令嬢を彼女の椅子に連れて行つた。そうして自分の席へ戻ると、彼はもうヘルマンのことも、リザヴェッタのこともまつたく忘れていた。リザヴェッタは中止された会話を再びつづけたと思つたが、マズルカもやがて終わつて、そのうちに老伯爵夫人は帰ることになつた。

トムスキイの言葉は、舞踏中によくあるならいの軽い無駄話に過ぎなかつたが、この若い夢想家のリザヴェッタの心に深く沁み込んだ。トムスキイによつてえがかれた半身像は、彼

女自身の心のうちに描いていたものと一致していたのみならず、このいろいろのでたらめの話のお蔭で、彼女の崇拜者の顔に才能があらわれていることを知ると同時に、彼女の空想をうっとりときせるような特長がさらに加わって来たのであった。彼女は今、露出むきだした腕を組み、花の髪飾りを付けたままの頭を素肌の胸のあたりに垂れて坐っていた。

突然にドアがあいて、ヘルマンが現われたので、彼女ははつとした。

「どこにおいでなさいました」と、彼女はおどおどしながら声を忍ばせて訊いた。

「老伯爵夫人の寝室に……」と、ヘルマンは答えた。「わたしは今、伯爵夫人のところから来たばかりです。夫人は死んでいます」

「え。なんですって……」

「それですから、わたしは伯爵夫人の死の原因となるのを恐れているのです」と、ヘルマンは付け足した。

リザヴェッタは彼をながめていた。そうして、トムスキイの言葉が彼女の心の中でこう反響しているのに気がついた。「この男は少なくとも良心に三つの罪悪を持つているぞ！」

ヘルマンは彼女のそばの窓に腰をかけて、一部始終を物語った。

リザヴェッタは恐ろしさに顫ふるえながら彼の話に耳をかたむけていた。今までの感傷的な手紙、熱烈な愛情、大胆な執拗な愛慾の要求——それらのものはすべて愛ではなかった。金——彼のたましいがあこがれていたのは金であった。貧しい彼女には彼の愛慾を満足させ、

愛する男を幸福にすることは出来なかつた。このあわれな娘は、盗人であり、かつは彼女の老いたる恩人の殺害者である男の盲目的玩具にほかならなかつたのではないか。彼女は後悔のもだえににが苦い涙をながした。

ヘルマンは沈黙のうちに彼女を見つめてみると、彼の心もまたはげしい感動に打たれて来た。しかも、このあわれなる娘の涙も、悲哀のためにいつそう美しく見えてきた彼女の魅力も、彼のひややかなる心情を動かすことは出来なかつた。彼は老伯爵夫人の死についても別に良心の呵責かしやくなどを感じなかつた。ただ彼を悲しませたのは、一攫千金を夢みていた大切な秘密を失つて、取り返しのつかないことをしたという後悔だけであつた。

「あなたは人非人ひとでなしです」と、リザヴェッタはついに叫んだ。

「わたしだつて夫人の死を望んではいなかつた」と、ヘルマンは答えた。「私のピストルには装填たまごめをしていなかつたのですからね」

二人は黙つてしまった。

夜は明けかかつた。リザヴェッタが蠟燭の火を消すと、青白い光りが部屋へさし込んで来た。彼女は泣きはらした眼をふくと、ヘルマンのほうへ向いた。彼は腕組みをしながら、ひたいに残忍ざんじんな八の字をよせて、窓のきわに腰をかけていた。こうしていると、まったく彼はナポレオンに生き写しであつた。リザヴェッタもそれを深く感じた。

「どうしてあなたをお邸やしきからお出し申したらいいでしょう」と、彼女はようように口を開いた。「わたくしはあなたを秘密の階段からお降ろし申そうと思つたのですが、それにはどうしても伯爵夫人の寢室を通らなければならぬので、わたくしには恐ろしくつて……」

「どうすればその秘密の階段へ行けるか、教えて下さい。……わたしは一人で行きます」

リザヴェッタは起たち上がつて、抽斗ひきだしから鍵を取り出してヘルマンにわたして、階段へゆく道を教えた。ヘルマンは彼女の冷たい、力のない手を握りしめると、そのうつむいているひたいに接吻して、部屋を出て行つた。

彼は螺旋形の階段を降りて、ふたたび伯爵夫人の寢室へはいつた。死んでゐる老夫人は化石したように坐つていて、その顔には底知れない静けさがあらわれていた。ヘルマンは彼女の前に立ちどまつて、あたかもこの恐ろしい事実を確かめようとするかのように、長い間じつと彼女を見つめていたが、やがて彼は掛毛氈タペストリーのうしろにあるドアをあけて小さい部屋にはいると、強い感動に胸を躍らせながら真つ暗な階段を降りかかつた。

「たぶん……」と、彼は考えた。「六十年前にも今時分、縫い取りをした上着を着て、ロアザー・ロライテに髪を結つた彼女の若い恋人が、三角帽で胸を押さえつけながら、伯爵夫人の寢室から忍び出て、この秘密の階段を降りて行つたことだろう。もうその恋人はとうの昔に墓のなかに朽ち果ててしまつてゐるのに、あの老夫人は今日になつてようよう息を引き取つたのだ」

その階段を降り切ると、ドアがあつた。ヘルマンは例の鍵でそこをあけて、廻廊を通つて

街へ出た。

五

この不吉な夜から三日後の午前九時に、ヘルマンは——の尼寺に赴いた。そこで伯爵夫人の告別式が挙行されたのである。なんら後悔の情は起こさなかったが、「おまえがこの老夫人の下手人だぞ」という良心の声を、彼はどうしても抑えつけることが出来なかった。

彼は宗教に対して信仰などをいだいていなかったのであるが、今や非常に迷信的になつてきて、死んだ伯爵夫人が自分の生涯に不吉な影響をこうむらせるかもしれないと信じられたので、彼女のおゆるしを願うためにその葬式に列席しようと決心したのであった。

教会には人がいっぱいであつた。ヘルマンはようように人垣を分けて行つた。柩はビロードの天蓋の下の立派な葬龕すずに安置してあつた。そのなかに故伯爵夫人はレースの帽子に純白の繻子の服を着せられ、胸むねに合掌がっしょうして眠つていた。葬龕の周囲には彼女の家族の人たちが立つていた。召使いらは肩に紋章入りのリボンを付けた黒のカフタンを着て、手に蠟燭ろうそくを持っていた。一族——息子たちや、孫たちやそれから曾孫たち——は、みな深い哀かなしみに沈んでいた。

誰も泣いているものはなかった。涙というものは一つの愛情である。しかるに、伯爵夫人はあまりにも年をとり過ぎていたので、彼女の死に心を打たれたものもなく、一族の人たち

もとうから彼女を死んだ者扱いにしていたのである。

ある有名な僧侶が葬式の説教をはじめた。彼は単純で、しかも哀憐あいれんの情を起こさせるような言葉で、長いあいだキリスト教信者としての死を静かに念じていた彼女の平和な永眠を述べた。

「ついに死の女神は、信仰ふかき心をもつてあの世の夫に一身を捧げていた彼女をお迎えなされました」と、彼は言った。

法会ほうえはふかい沈黙のうちに終わつた。一族の人びとは死骸に永別を告げるために進んでゆくと、そのあとから大勢おおぜいの会葬者もつづいて、多年自分たちのふまじめな娯楽の関係者であつた彼女に最後の敬意を表した。彼らのうしろに伯爵夫人の邸やしきの者どもが続いた。その後伯爵夫人と同年輩ぐらいの老婆が行つた。彼女は二人の女に手を取られて、もう老いぼれて地にひざまずくだけの力もないので、ただ二、三滴の涙を流しながら女主人の冷たい手に接吻した。

ヘルマンも柩のある所へ行こうと思つた。彼は冷たい石の上にひざまずいて、しばらくそのままにしていたが、やがて伯爵夫人の死に顔と同じように真まつ蒼さおになつて起たちあがると、葬龕ずしの階段を昇つて死骸の上に身をかがめた――。その途端とたんに、死んでいる夫人が彼をあざけるようにじろりと睨にらむとともに、一つの眼で何か目配せをしたように見えた。ヘルマンは思わず後ずさりするはずみに、足を踏みはずして地に倒れた。二、三人が飛んで来て、彼を

引き起こしてくれたが、それと同時に、失神したりザヴェッタ・イヴァノヴナも教会の玄関へ運ばれて行つた。

この出来事がすこしのあいだ、陰鬱な葬儀の莊嚴をみだした。一般会葬者のあいだからも低い呟き声^{つぶや}が起こつて来た。背丈^{せい}の高い、痩せた男で、亡き人の親戚であるという侍従職がそばに立っている英国人の耳もとで「あの青年士官は伯爵夫人の私生児^{しせいじ}ですよ」とささやくと、その英国人はどうでもいいといった調子で、「へえー」と答えていた。

その日のヘルマンは終日^{しゅうじつ}、不思議に興奮していた。場末の料理屋へ行つて、常になく彼はしたたかに酒をあおつて、内心の動揺をぬぐい去ろうとしたが、酒はただいたずらに彼の空想を刺戟するばかりであつた。家へかえると、かれは着物を着たままで、ベッドの上に身を投げ出して、深い眠りに落ちてしまつた。

彼が眼をさました時は、もう夜になつていたので、月のひかりが部屋のなかへさし込んでいた。時計をみると三時を十五分過ぎていた。もうどうしても寝られないので、彼はベッドに腰をかけて、老伯爵夫人の葬式のことを考え出した。

あたかもそのとき何者かが往来からその部屋の窓を見ていたが、またすぐに通り返ぎた。ヘルマンは別に気にもとめずにいると、それからまた二、三分の後、控えの間のドアのあく音がきこえた。ヘルマンはその伝令下士がいつものように、夜遊びをして酔つ払つて帰つて

来たものと思つたが、どうも聞き慣れない聲音で、誰かスリッパを穿はいて床の上をそつと歩いてゐるようであつた。ドアがあいた。

——と思うと、真つ白な着物をきた女が部屋にはいつて来た。ヘルマンは自分の老いたる乳母と勘違いをして、どうして真夜中に来たのであるかと驚いてゐると、その白い着物の女は部屋を横切つて、彼の前に突つ立つた。——ヘルマンはそれが伯爵夫人であることに気がついた。

「わたしは不本意ながらあなたの所へ来ました」と、彼女はしつかりした声で言った。「わたしはあなたの懇願を容いれてやれと言いつかつたのです。三、七、一の順に続けて賭けたなら、あなたは勝負に勝つでしょう。しかし二十四時間内にたった一回より勝負をしないというのと、生涯に二度と骨牌の賭けをしないとという条件を守らなければなりません。それから、あなたがわたしの付き添い人のリザヴェッタ・イヴァノヴナと結婚して下さいれば、私はあなたに殺されたことを赦ゆるしましょう」

こう言つて、彼女は静かにうしろを向くと、足を引き摺るようにドアの方へ行つて、たちまちに消えてしまった。ヘルマンは表のドアのあけたてする音を耳にしたかと思うと、やがてまた、何者かが窓から覗のぞいてゐるのを見た。

ヘルマンはしばらく我れに復かえることが出来なかつたが、やつとのことで起ち上がつて次の間へ行つてみると、伝令下士は床ゆかの上に横たわつて眠つていたので、さんざん手古摺てこずつた拳

げ句にようやく眼をさまさせて、表のドアの鍵をかけさせた。彼は自分の部屋にもどって、蠟燭をつけて、自分が幻影を見たことを細かに書き留めておいた。

六

精神界において二つの固定した想念アイデアが共存するということは、物質界において二つの物体が同時に同じ場所に存在する事と同じように不可能である。「三、七、一」の秘伝は、すぐにヘルマンの心から死んだ伯爵夫人の思い出を追いのけてしまつて、彼の頭のなかを間断なく駆け廻つては彼の口によつて繰り返されていた。

もし若い娘でも見れば、彼は「よう、なんて美しいんでしよう。まるでハートの三そっくりだ」と言うであろう。また、もし誰かが「いま何時でしようか」と訊きいたら、彼は「七時五分過ぎ」と答えるであろう。それからまた、丈夫そうな人たちに出逢つたときには彼はすぐに一の字を思い出した。「三、七、一」の字は寝ていても彼の脳裏に出没して、あらゆる形となつて現われた。

彼の目の前には三の切り札が爛漫うんまんたる花となつて咲き乱れ、七の切り札はゴシック式の半身像となり、一の切り札は大きい蜘蛛となつて現われた。そうして、ただ一つの考え——こんなにも高価であがなつた以上、この秘密を最も有効に使用しようということばかりが彼の心をいっぱい埋めていた。彼は賜暇しかを利用して外遊して、パリにたくさんある公営の賭博場へ行つて運試しをやらうと考えた。ところが、そんな面倒なことをするまでもなく、彼に

とつていい機会が到来した。

モスクワには、有名なシエカリンスキイが元締もとじめをしている富豪連の賭博の会があつた。このシエカリンスキイはその全生涯を賭博台の前に送りながら何百万の富を築き上げたという人間で、自分が勝てば手形で受け取り、負ければ現金で即座に支払っていた。彼は自分の長いあいだの経験によつて仲間からも信頼せられ、彼のあけつ放しの家と、彼の腕利きの料理人と、それから彼が人をそらさぬ態度とによつて、一般の人びとから尊敬のまとなつていた。その彼がセント・ペテルスブルグにやつて来たので、この首府の若い人びとは舞踏や、女を口説きおとすことなどはそつちのけにして、ファロー（指定の骨牌一組のうちから出て来る順序を当てる一種の賭け骨牌）に耽溺たんできせんがために、みなその部屋に集まつて来た。

かれらは慇懃いんぎんな召使いの大勢立っている立派な部屋を通つて行つた。賭博場は人でいっぱいであつた。將軍や顧問官はウイスト（四人でする一種の賭け骨牌）を試みていた。若い人びとはピロッド張りの長椅子にだらしなく倚よりながら氷菓子アイスクを食べたり、煙草をくゆらしたりしていた。応接間では、賭けをするひと組の連中が取り巻いている長いテーブルの上席にシエカリンスキイが坐つて元締もとじめをしていた。

彼は非常に上品な風采ふうさいの五十がらみの男で、頭髪は銀のように白く、そのむっくりと肥ふとつた血色のいい顔には善良しやうじやうの性があらわれ、その眼は間断なく微笑にまたたいていた。ナルモヴは彼にヘルマンを引き合わせた。シエカリンスキイは十年の知己のごとくにヘルマンの手

を握つて、どうぞご遠慮なくと言つてから、骨牌を配りはじめた。

その勝負はしばらく時間をついやした。テーブルの上には三十枚以上の切り札が置いてあつた。シエカリンスキイは骨牌を一枚ずつ投げては少しく間まを置いて、賭博者に持ち札を揃えたり、負けた金の覚え書きなどをする時間をあたえ、一方には賭博者の要求に対していちいち慇懃いんぎんに耳を傾け、さらに賭博に沈黙を守りながら、賭博者の誰かが何かの拍子に手で曲げてしまった骨牌の角を伸ばしたりしていた。やがて、その勝負は終わった。シエカリンスキイは骨牌を切つて、再び配る準備をした。

「どうぞ私にも一枚くださいませんか」と、ヘルマンは勝負をしている一人の男らしい紳士のうしろから手を差し伸べて言つた。

シエカリンスキイは微笑を浮かべると、承知しましたという合図に静かに頭かしらを下げた。ナルモヴは笑いながら、ヘルマンが長いあいだ守つていた——骨牌を手にしなないという誓いを破つたことを祝つて、彼のために幸先あきさきのいいように望んだ。

「張つた」と、ヘルマンは自分の切り札の裏に白墨チヨークで何か印しるしを書きながら言つた。

「おいくらですか」と、元締が眼を細くしてたずねた。「失礼ですが、わたくしにはよく見えませんので……」

「四万七千ルーブル」と、ヘルマンは答えた。

それを聞くと、部屋じゅうの人びとは一斉に振りむいて、ヘルマンを見つめた。

「こいつ、どうかしているぞ」と、ナルモヴは思った。

「ちよつと申し上げておきたいと存じますが……」と、シエカリンスキイが、例の微笑を浮かべながら言った。「あなたのお賭けなさる金額は多過ぎはいたしませんでしょうか。今までにここでは、一度に二百七十五ルーブルよりお張りになったかたはごさいませんが……」

「そうですか」と、ヘルマンは答えた。「では、あなたはわたくしの切り札をお受けなさるのですか、それともお受けなさらないのですか」

シエカリンスキイは同意のしるしに頭を下げた。

「ただわたくしはこういうことだけを申し上げたいと思うのですが……」と、彼は言った。「むろん、わたくしは自分のお友達のかたがたを十分信用してはおりますが、これは現金で賭けていただきたいのでございます。わたくし自身の立ち場から申しますと、実際あなたのお言葉だけで結構なのでございますが、賭け事の規定から申しましたが、また、計算の便宜上から申ししても、お賭けになる金額をあなたの札の上に置いていただきたいものでござい
ます」

ヘルマンはポケットから小切手を出して、シエカリンスキイに渡した。彼はそれをざつと調べてからヘルマンの切り札の上に置いた。

それから彼は骨牌を配りはじめた。右に九の札が出て、左には三の札が出た。「僕が勝った」と、ヘルマンは自分の切り札を見せながら言った。

驚愕のつぶやきが賭博者たちのあいだから起こった。シエカリンスキイは眉をひそめたが、すぐにまた、その顔には微笑が浮かんできた。

「どうか清算させていただきたいと存じますが……」と、彼はヘルマンに言った。

「どちらでも……」と、ヘルマンは答えた。

シエカリンスキイはポケットからたくさんの小切手を引き出して即座に支払うと、ヘルマンは自分の勝った金を取り上げて、テーブルを退いた。ナルモヴがまだ茫然としている間に、彼はレモネードを一杯飲んで、家へ帰ってしまった。

翌日の晩、ヘルマンは再びシエカリンスキイの家へ出かけた。主人公はあたかも切り札を配っていたところであつたので、ヘルマンはテーブルの方へ進んで行くと、勝負をしていた人たちは直ただちに彼のために場所をあけた。シエカリンスキイは丁寧に挨拶した。

ヘルマンは次の勝負まで待っていて、一枚の切り札を取ると、その上にゆうべ勝った金と、自分の持っていた四万七千ルーブルとを一緒に賭けた。

シエカリンスキイは骨牌を配りはじめた。右にジャックの二が出て、左に七の切り札が出た。

ヘルマンは七の切り札を見せた。

一斉に感嘆の声が湧きあがった。シエカリンスキイは明らかに不愉快な顔をしたが、九万四千ルーブルの金額をかぞえて、ヘルマンの手に渡した。ヘルマンは出来るだけ冷静な態度

で、その金をポケットに入れると、すぐに家へ帰った。

次の日の晩もまた、ヘルマンは賭博台にあらわれた。人びとも彼の来るのを期待していたところであった。將軍や顧問官も実に非凡なヘルマンの賭けを見ようというので、自分たちのウイストの賭けをやめてしまった。青年士官らは長椅子を離れ、召使いたちまでがこの部屋へはいつて来て、みなヘルマンのまわりに押し合っていた。勝負をしていたほかの連中も賭けをやめて、どうなることかと、もどかしそうに見物していた。

ヘルマンはテーブルの前に立って、相変わらず微笑ほほえんではいるが蒼い顔をしているシエカリンスキイと、一騎打ちの勝負をする準備をした。新しい骨牌の封が切られた。シエカリンスキイは札を切った。ヘルマンは一枚の切り札を取ると、小切手の束でそれを掩おほった。二人はさながら決闘のような意気込みであった。深い沈黙が四方を圧した。

シエカリンスキイの骨牌を配り始める手はふるえていた。右に女王が出た。左に一の札が出た。

「一が勝った」と、ヘルマンは自分の札を見せながら叫んだ。

「あなたの女王が負けでございます」と、シエカリンスキイは慇懃に言った。

ヘルマンははつとした。一の札だと思っていたのが、いつの間にかスペードの女王になっているではないか。

彼は自分の眼を信じることも、どうしてこんな間違いをしたかを理解することも出来な

かった。途端とたんに、そのスピードの女王が皮肉な冷笑を浮かべながら、自分の方に眼配せしているように見えた。その顔が彼女に生き写しであるのにぎよつとした。

「老伯爵夫人だ」と、彼は恐ろしさのあまりに思わず叫んだ。

シェカリンスキイは自分の勝った金を掻き集めた。しばらくのあいだ、ヘルマンは身動き一つしなかったが、やがて彼がテーブルを離れると、部屋じゅうが騒然と沸き返った。

「実に見事な勝負だった」と、賭博者たちは称讃した。シェカリンスキイは新しく骨牌を切つて、いつものように勝負を始めた。

ヘルマンは発狂した。そうして今でもなお、オブコフ病院の十七号病室に監禁されている。彼はほかの問いには返事をしないが、絶えず非常な早口で「三、七、一！」「三、七、一！」とささやいているのであった。

リザヴェッタ・イヴァノヴナは、老伯爵夫人の以前の執事の息子で前途有望の青年と結婚した。その男はどこかの県庁に奉職して、かなりの収入を得ているが、リザヴェッタはやはり貧しい女であることに甘んじている。

トムスキイは大尉級に昇進して、ポーリン公爵令嬢の夫となった。

ダムドシング 妖物

アンブローズ・ビヤース

Ambrose Bierce

(1842-1914、米)

一八四二年、米国オハイオ州に生まる。

雑誌記者、小説家。

一九一四年以来ゆくえ不明となりて、その消息を知らず。

粗木あらぎのテーブルの片隅に置かれてあるあぶら蠟燭の光りを頼りに、一人の男が書物に何か書いてあるのを読んでいた。それはひどく摺り切れた古い計算帳で、その男は燈火あかりによく照らして視るために、時どきにそのページを蠟燭の側へ近寄せるので、火をさえぎる書物の影が部屋の半分をおぼろにして、そこにいる幾人かの顔や形を暗くした。書物を読んでいる男のほかにも、そこには八人の男がいるのである。

そのうちの七人は動かさず、物言わず、あられずりの丸太の壁にむかって腰をかけていたが、部屋が狭いので、どの人もテーブルから遠く離れていなかった。かれらが手を伸ばせば八人目の男のからだに触れることが出来るのである。その男というのは、顔を仰向けて、半身を敷布シーツにおおわれて、両腕をからだのそばに伸ばして、テーブルの上に横たわっていた。彼は死んでいたのである。

書物にむかっている男は声を出して読んでいたのではなかった。ほかの者も口をきかなかった。すべての人が来たるべき何事かを待っている様子で、死んだ人ばかりが待つこともなしに眠っているのである。外は真の闇で、窓の代りにあけてある壁の穴から荒野の夜の聞き慣れないひびきが伝わって来た。遠くきこえる狼のなんともいえないように長い尾をひい

て吠える声、木立ちのなかで休みなしに鳴く虫の静かに浪打つようなむせび声、昼の鳥とはまったく違っている夜鳥ナイトバードの怪しい叫び声、めくら滅法界めつぽうかいに飛んでくる大きい甲虫かぶとむしの唸り声、殊ことにこれらの小さい虫の合奏曲コーラスが突然やんで半分しかきこえない時には、なにかの秘密を覺さとらせるようにも思われた。

しかし、ここに集まっている人びとはそんなことを氣にとめる者もなかった。この一団が實際的の必要を認めないことに興味を有していないのは、たつた一つの暗い蠟燭に照らされてい、かれらの粗野なる顔つきをみても明らかであった。かれらは皆この近所の人びと、すなわち農夫や樵夫きこりであった。

書物を読んでいる人だけは少し違っていた。人は彼をさして、世間を広くわたって来た人であると言っているが、それにもかかわらず、その風俗は周囲の人びとと同じ仲間であることを証明していた。彼の上衣うわぎはサンフランシスコでは通用しそうな型で、履き物も町で作られた物ではなく、自分のそばの床に置いてある帽子——この中で帽子をかぶっていないのは彼一人である——は、もしも単にそれを人間の装飾品と考えたらば大間違いになりそうな代物しろものであった。彼の容貌は職権を有する人に適當するように、自然に馴らされたのか、あるいは強しいて粧おまっているのか知らないが、一方に厳正を示すとともに、むしろ人好きのするようなふうであった。なぜというに、彼は検屍官けんしかんである。彼がいま読んでいる書物を取り上げたのもその職権に因よるもので、書物はこの事件を取り調べているうちに死人の小屋の中か

ら発見されたのであった。審問しんもんは今この小屋で開かれている。

検屍官はその書物を読み終わって、それを自分のポケットに入れた。その時に入り口の戸が押しあけられて、一人の青年がはいって来た。彼は明らかにこちらの山家やまがに生まれた者ではなく、ここらに育った者でもなく、町に住んでいる人びとと同じような服装をしていた。しかも遠路を歩いて来たように、その着物は埃ほこりだらけになっていた。実際、彼は審問に応ずるために、馬を飛ばして急いで来たのであった。

それを見て、検屍官は会釈えしやくしたが、ほかの者は誰も挨拶しなかった。

「あなたの見えるのを待っていました」と、検屍官は言った。「今夜のうちにこの事件を片付けてしまわなければなりません」

青年はほほえみながら答えた。

「お待たせ申して相済みません。私は外へ出ていました。……あなたの喚問かんもんを避けるためではなく、その話をするために、たぶん呼び返されるだろうと思われる事件を原稿に書いて、わたしの新聞社へ郵送するために出かけたのです」

検屍官も微笑した。

「あなたが自分の新聞社へ送ったという記事は、おそらくこれから宣誓の上でわれわれに話していたかどうかとは違いまししょう」

「それはご随意に」と、相手はやや熱したように、その顔を紅あかくして言った。「わたしは複写紙

を用いて、新聞社へ送った記事の写しを持って来ました。しかし、それが信用できないような事件であるので、普通の新聞記事のようにには書いてありません、むしろ小説体を書いてあるのですが、宣誓の上でそれを私の証言の一部と認めていただいてよろしいのです」

「しかし、あなたは信用できないというではありませんか」

「いや、それはあなたに係り合^{かか}いのないことで、わたしが本当だといって宣誓すればいいのでしよう」

検屍官はその眼を床^{ゆか}の上に落として、しばらく黙っていると、小屋のなかにいる他の人びとは小声で何か話し始めたが、やはりその眼は死骸の上を離れなかった。検屍官はやがて眼をあげて宣告した。

「それではふたたび審問を開きます」

人びとは脱帽した。証人は宣誓した。

「あなたの名は……」と、検屍官は訊いた。

「ウイリアム・ハーカー」

「年齢は……」

「二十七歳」

「あなたは死人のヒュウ・モルガンを識^しっていますか」

「はい」

「モルガンの死んだ時、あなたも一緒にいましたか」

「そのそばにいました」

「あなたの見ている前でどんなことがありましたか。それをお訊ね申したいのです」

「わたくしは銃猟や魚釣りをするために、ここへモルガンを尋ねて来たのです。もつとも、そればかりでなく、わたくしは彼について、その寂しい山村生活を研究しようと思つたのです。彼は小説の人物としてはいいモデルのように見えました。わたくしは時どきに物語をかくのです」

「わたしも時どきに読みますよ」

「それはありがとうございます」

「いや、一般のストーリーを読むというので……。あなたではありません」

陪審官のある者は笑い出した。陰惨なる背景に対して、ユーモアは非常に明かるい気分をつくるものである。戦闘中の軍人はよく笑い、死人の部屋における一つの冗談はよくおどろきに打ち勝つことがある。

「この人の死の状況を話してください」と、検屍官は言った。「あなたの随意に、筆記帳でも控え帳でもお使いなすつてよろしい」

証人はその意を諒して、胸のポケットから原稿をとり出した。彼はそれを蠟燭の火に近寄せて、自分がこれから読もうとするところを見いだすまで、その幾枚を繰っていた。

——われらがこの家を出たる時、日はいまだ昇らざりき。われらは鶉を獮らんがために、手に手に散弾銃をたずさえて、ただ一頭の犬をひけり。

最もよき場所は畔を越えたる所に在り、とモルガンは指さして教えたれば、われらは低き榎の林をゆき過ぎて、草むらに沿うて行きぬ。路の片側にはやや平らかなる土地ありて、野生の燕麦をもつて深く掩われたり。われらが林を出て、モルガンは五、六ヤードも前進せる時、やや前方に当たれる右側のすこしく隔たりたるところに、獣のたぐいが藪を突き進むがごときひびきを聞けり。その響きは突然に起こりて、草木のはげしく動揺するを見たり。「われらは鹿を狩りいだしぬ。かくと知らば旋条銃を持ち来たるべかりしに……」と、われは言いぬ。

モルガンは歩みを停めて、動揺する林を注意深く窺いたり。彼は何事をも語らざりき。しかも、その銃の打ち金をあげて、何物をか狙うがごとくに身構えせり。焦眉の急がにわか
に迫れる時にも、彼は甚だ冷静なるをもつて知られたるに、今や少しく興奮せる体を見て、われは驚けり。

「や、や」と、われは言いぬ。「鶉撃つ銃をもて鹿を撃つべくもあらず。君はそれをこころみ

んとするか」

彼はなお答えざりき。しかもわがかたへ少しく振り向きたる時、われはその顔色の勵はげしきに甚だしくおびやかされたり。かくてわれは、容易ならざる仕事がわれらの目前に横たわれることを覚さとりぬ。おそらく灰色熊を狩り出したるにあらずやと、われはまず推量して、モルガンのほとりに進み寄り、おなじくわが銃の打ち金をあげたり。

藪のうちは今や鎮しずまりて、物の響きもやみたれど、モルガンは前のごとくにそこを窺のぞいてるなり。

「何事にや。何物にや」と、われは問いぬ。

「妖物？」と、彼は見かえりもせずダムドシングに答えぬ。その声は怪しくうら噎がれて、かれは明らかにおののけり。

彼は更に言わんとする時、近きあたりの燕麦がなんとも言ひ分け難き不思議のありさまにて狂い騒ぐを見たり。それは風の通路にあたりて動揺するがごとく、麦は押し曲げらるるのみならず、押し倒され、押し挫ひしがれて、ふたたび起きも得ざりき。しかも、その風のごとき運動は徐じよじよにわがかたへも延長し来たれるなり。

この見馴れざる不可解の現象ほど、われに奇異の感を懐いだかしめたることはかつてなかりき。しかもわれはなお、それに対して恐怖の念を起こすにいたらざりき。われはかくの如くに記憶す。——たとえば、開かれたる窓より何心なしに表をながめたる時、目前にある小さき立ち

木を遠方にある大木の林の一本と見誤まることあり。それは遠方の大木と同様の大きさに見ゆれど、しかもその量かきにおいても、その局部においても、後者とはまったく一致せざるはずなり。要するに、大気中における遠近錯覚に過ぎざるなれど、一時は人を驚かし、人を恐れしむることあり。われらは最も見馴れたる自然の法則の、最も普通なる運用を信賴し、そのあいだになんらかの疑うべきものあるを見れば、直ただちにそれをもつてわれらの安全をおびやかすか、あるいは不思議なる災厄の予報と認むるを常とす。されば、今や草むらが理由なくして動揺し、その動揺の一線が迷うことなくおもむろに進行し來たるをみれば、たとい恐怖を感じざるまでも、確かに不安を感じざるを得ざるなり。

わが同伴者は実際に恐怖を感じたるがごとく、あわやと見る間に、彼は突然その銃を肩のあたりに押し当てて、ざわめく穀物にむかつて二発を射撃したり。その弾たまけむりの消えやらぬうちに、われは野獸の吼ほゆるがごとき獐どうもう猛なる叫び声を高く聞けり。モルガンはその銃を地上に投げ捨てて、跳おどり上がって現場より走り退のきぬ。それと同時に、われはある物の衝突によつて地上に激しく投げ倒されたり。煙りにさえぎられて確かに見えざりしが、柔らかく、しかも重き物体が大いなる力をもつてわれに衝突したりしと覚ゆ。

われは再び起きあがりて、わが手より取り落としたる銃を拾い上げんとする前に、モルガンが今や最期さいごかとも思わるる苦痛の叫びをあぐるを聞けり。さらにまた、その叫び声にまじりて、鬨うなえる犬の唸うなるがごとき皺しわが枯れたる凄すさまじき声をも聞けり。異常の恐怖に襲われて、

われはあわてて跳ね起きつつモルガンの走り行きたる方角を打ち見やれば、ああ、二度とは見まじき怖ろしの有様なりしよ。三十ヤードとは隔てざる処に、わが友は片膝を突いてありき。その頭は甚だしき角度にまでのけぞりて、その長き髪はかき乱され、その全身は右へ左へ、前へうしろへ、激しく揺られつつあるなり。その右の腕は高く挙げられたれど、わが眼にはその手先はなきように見えたり。左の腕はまったく見えざりき。わが記憶によれば、この時われはその身体の一部を認めたるのみにて、他の部分はさながら暈されたるように見えしと云うのほかなかりき。やがてその位置の移動によりて、すべての姿は再び我が眼に入れり。

かく言えばとて、それらはわずかに数秒時間の出来事に過ぎず。そのあいだにもモルガンはおのれよりも優れたる重量と力量とに圧倒せれんとする、決死の力者のごとき姿勢を保ちつつありき。しかも、彼のほかには何物をも認めず、彼の姿もまた折りおりには定かならざることありき。彼の叫びと呪いの声は絶えず聞こえたれど、その声は人とも獣とも分かんぬ一種の兇暴獯惡の唸り声に圧せられんとしつつあるなり。

われは暫くなんの思案もなかりしが、やがてわが銃をなげ捨てて、わが友の応援に馳せむかいぬ。われはただ漠然と、彼はおそらく逆上せるか、あるいは痙攣を発せるならんと想像せるなり。しかもわが走り着く前に、彼は倒れて動かずなりぬ。すべての物音は鎮まりぬ。しかもこれらの出来事なくとも、われを恐れしむることありき。

われは今や再びかの不可解の運動を見たり。野生の燕麦は風なきに乱れ騒ぎて、眼にみえざる動揺の一線は俯伏^{うつぶ}しに倒れている人を越えて、踏み荒らされたる現場より森のはずれへ、しずかに真つ直ぐにすすみゆくなり。それが森へと行き着くを見おくり果てて、さらにわが同伴者に眼を移せば——彼はすでに死せり。

検屍官はわが席を離れて、死人のそばに立った。彼は敷布シーツのふちを把とつて引きあげると、死人の全身はあらわれた。死体はすべて赤裸で、蠟燭のひかりのもとに粘土色に黄いろく見えた。しかも明らかに打撲傷による出血と認められる青黒い大きい汚点しみが幾力所も残っていた。胸とその周囲は棍棒で殴打されたように見られた。ほかに怖ろしい引つ掻き疵きずもあつて、糸のごとく、または切れ屑のごとくに裂かれていた。

検屍官は更にテーブルのはしへ廻まわつて、死体の頤あごから頭の上にかかつている絹のハンカチーフを取りはずすと、咽喉いんこうがどうなっているかということが露あらわれた。陪審官のある者は好奇心にかられて、それをよく見定めようとして起たちかかったのもあつたが、彼らはたちまちに顔をそむけてしまった。証人のハーカーは窓をあけに行つて、わずらわしげに悩みながら窓台に倚よりかかつていた。死人の頸くびにハンカチーフを置いて、検屍官は部屋の隅へ行つた。彼はそこに積んである着物のきれはしをいちいちに取り上げて検査すると、それはずたずたに引き裂かれて、乾いた血のために固くなつていた。陪審官はそれに興味を持たないらしく、近寄つて綿密に検査しようともしなかつた。彼らは先刻すでにそれを見ているからである。彼らにとつて新しいのは、ハーカーの証言だけであつた。

「皆さん」と、検屍官は言った。「わたくしの考えるところでは、最早ほかに証拠はあるまいと思われます。あなたがたの職責はすでに証明した通りであるから、この上に質問するようなことがなければ、外へ出てこの評決をお考えください」

陪審長が起ちあがった。粗末な服を着た、六十ぐらいの、髻ひげの生えた背丈せいぢの高い男であった。

「検屍官どのに一言おたずね申したいと思ひます」と、彼は言った。「その証人は近ごろどの精神病院から抜け出して来たのですか」

「ハーカー君」と、検屍官は重おもおもしろく、しかもおだやかに言った。「あなたは近ごろどの精神病院を抜け出して来たのですか」

ハーカーは烈火のごとくになつたが、しかしなんにも言わなかつた。もちろん、本気で訊きくつもりでもないのです、七人の陪審官はそのままに列をなして、小屋の外へ出て行つてしまつた。検屍官とハーカーと、死人とがあとに残された。

「あなたは私を侮辱するのですか」と、ハーカーは言った。「私はもう勝手に帰ります」「よろしい」

ハーカーは行こうとして、戸の掛け金に手をかけながら、また立ちどまつた。彼が職業上の習慣は、自己の威厳を保つという心持ちよりも強かつたのである。彼は振り返つて言った。「あなたが持っている書物は、モルガンの日記だと思ひます。あなたはそれに多大の興味を

有していられるようで、わたしが証言を陳述している間にも読んでいられました。わたしにもちよつと見せていただけではないでしょうか。おそらく世間の人びともそれを知りたいと思うでしょうから……」

「いや、この書物にはこの事件に関するなんの形をもとどめていません」と、検屍官はそれを上衣のポケットに滑り込ませた。「これにある記事はみんな本人の死ぬ前に書いたものです」

ハーカーが出て行ったあとへ、陪審官らは再びはいつて来て、テーブルのまわりに立った。そのテーブルの上には、かの掩われたる死体が、敷布の下に行儀よく置かれてあった。陪審長は胸のポケットから鉛筆と紙きれを把り出して、念入りに次の評決文を書く、他の人びともみな念を入れて署名した。

——われわれ陪審官はこの死体はマウンテン・ライオン（豹の一種）の手に因つて殺されたものと認む。但し、われわれのある者は、死者が癩癩あるいは瘰癧のごとき疾病を有するものと思考し、一同も同感なり。

四

ヒュウ・モルガンが残した最後の日記は確かに興味ある記録で、おそらく科学的の暗示を与えるものである。その死体検案の場合に、日記は証拠物として提示されなかった。検屍官はたぶんそんなものを見せることは、陪審官の頭を混乱させるに過ぎないと考えたらしい。日記の第一項の日付けははつきりせず、その紙の上部は引き裂かれていたが、残った分には次のようなことが記しるされている。

——犬はいつでも中心の方へ頭をむけて、半円形に駆けまわる。そうして、ふたたび静かに立って激しく吠える。しまいには出来るだけ早く藪やぶの方へ駆けゆく。はじめはこの犬め、気が違ったのかと思ったが、家うちへ帰つて来ると、おれの罰を恐れている以外に別に変わった様子も見せない。犬は鼻で見ることが出来るのだろうか。物の匂いが脳の中枢に感じて、その匂いを発散する物の形を想像することが出来るのだろうか。

九月二日——ゆうべ星を見ていると、その星がおれの家の東にあたる畔あぜの境の上に出ている時、左から右へとつづいて消えていった。その消えたのはほんの一刹那せつなで、また同時に消える数がわずかだったが、畔の全体の長さに沿うて一列二列の間はぼかさされていた。おれと星との間を何物かが通つたのらしいと思ったが、おれの眼にはなんにも見えない。また、そ

の物の輪郭を限ることの出来ないほどに、星のひかりも曇つてはいないのだ。ああ、こんなことは忌だ……。

(日記の紙が三枚剥ぎ取られていたので、それから数週間の記事は失われている。)

九月二十七日——あいつが再びここへ出て来た。おれは毎日あいつが出現することの証拠を握っているのだ。おれは昨夜もおなじ上掩うわおおいを着て、鹿撃ち弾を二重籠ごめにした鉄砲を持つて、夜のあけるまで見張っていたのだが、朝になって見ると新しい足跡が前の通りに残っているではないか。しかし、おれは誓つて眠らなかつたのだ。確かにひと晩じゅう眠らないはずだ。

どうも怖ろしいことだ。どうにも防ぎようのないことだ。こんな奇怪な経験が本当ならば、おれは氣違ひになるだろう。万一それが空想ならば、おれはもう氣違ひになつてゐるのだ。

十月三日——おれは立ち去らない。あいつにおれを追い出すことが出来るものか。そうだ、そうだ。ここはおれの家だ、ここはおれの土地だ。神さまは卑怯者をお憎みなさるはずだ。

十月五日——おれはもう我慢が出来ない。おれはハーカーをここへ呼んで、幾週間を一緒に過ごしてもらふことにした。ハーカーは氣のおちついた男だ。あの男がおれを氣違ひだと思ふかどうかだが、その様子をみていれば大抵判断ができるはずだ。

十月七日——おれは秘密を解決した。それはゆうべ判つたのだ——一種の示顕じげんを蒙つたように突然に判つたのだ。なんとという単純なことだ——なんとという怖ろしい単純だ！

世の中にはおれたちに聞こえない物音がある。音階の両端には、人間の耳という不完全な機械の鼓膜こまくには震動を感じられないような音符がある。その音はあまりに高いか、またはあまりに低いかであるのだ。おれは木の頂上に鶉つぐみの群れがいつばいに止まっているのを見てみると——一本の木ではない、たくさんの木に止まっているのだ——そうして、みな声を張りあげて歌っているのだ。すると、不意に——一瞬間に——まったく同じ一刹那に——その鳥の群れはみな空中へ舞いあがって飛び去ってしまった。それはなぜだろう。どの木も重なって邪魔になつて、鳥にはおたがい同士が見えないはずだ。また、どこにもその指揮者——みんなから見えるような指揮者の棲んでいる場所がないのだ。してみれば、そこには何か普通のがちやがちやいう以上に、もつと高い、もつと鋭い、通知か指揮かの合図がなければならぬ。ただ、おれの耳にきこえないだけのことだ。

おれはまた、それと同じようにたくさんの鳥が一度に飛び去る例を知っている。鶉の仲間ばかりでなく、たとえば鶉うずらのような鳥が藪のなかに広く分かれている時、さらに遠い岡のむこう側にまで分かれている時、なんの物音もきこえないにもかかわらず、たちまち一度に飛び去ることがあるのだ。

船乗りたちはまた、こんなことを知っている。鯨くじらの群れが大洋の表面に浮かんだり沈んだりしている時、そのあいだに凸形の陸地を有して数マイルを隔てているにもかかわらず、ある時には同じ刹那に泳ぎ出して、一瞬間にすべてその影を見失うことがある。信号が鳴らさ

れた——マストの上にいる水夫やデッキにいるその仲間の耳にはあまりに低いせんどうが、それでも寺院の石がオルガンの低い音響にふるえるように、船のなかではその顛動を感じるのだ。

音響とおなじことで、物の色もやはりそうだ。化学者には太陽のひかりの各端アクトニツク・レイに化学線というものの存在を見いだすことが出来る。その線は種じゆの色をあらわすもので、光線の成分にしたがつて完全な色を見せるのだそうだが、われわれにはそれを区別することが出来ない。人間の眼は耳とおなじように不完全な機械で、その眼のとどく程度はただわずかに染色性の一部に限られているのだ。おれは気が違っているのではない、そこには俺たちの眼にもみえない種じゆの色があるのだ。

そこで、たしかにうそ嘘でない、あの妖物はそんなたぐいの色であった！

クラリモンド

ゴーチェ

Theophile Gautier

(1811-1872、仏)

一八一一年八月三十一日、仏国ダルブに生まる。

詩人、小説家。

一八七二年十月二十三日逝く。

十九世紀中葉における仏国名家の一人なり。

わたしがかつて恋をしたことがあるかとお訊ねになるのですか。あります。わたしの話はよほど変わっていて、しかも怖ろしい話です。わたしは六十六歳になりますが、いまだにその記憶の灰をかき乱したくないのです。

わたしはごく若い少年の頃から、僧侶の務めを自分の天職のように思っていましたので、すべて私の勉強はその方面のことに向けていました。二十四のころまでのわたしの生活は、長い初学者としての生活でした。神学の課程を卒えますと、つづいて種じゆの雑務に従事しましたが、牧師長の人たちはわたしがまだ若いにもかかわらず、わたしを認めてくれました。最後に聖職につくことを許してくれました。そうして、その僧職の授与式は復活祭の週間のうちに行なわれることに決まりました。

わたしはその頃まで、世間に出たことがありませんでした。わたしの世界は、学校の壁と、神学校関係の社会だけに限られていました。それで、わたしは世間でいう女というものには、極めて漠然とした考えしか持っていませんでしたし、また、そんな問題において考えたりすることは決してありませんでしたので、全く無邪気のままに生活していたのでした。私は一年にたった二度、わたしの年老いた虚弱な母に逢いに行くばかりで、私とほかの世間との関

り合いというものは、全くこれだけのことしかなかったのであります。

わたしはこの生活になんの不足もありませんでした。わたしは自分が二度と替えられない終身の職に就いたことに對しては、なんの躊躇ためらいも感じていませんでした。私はただ心の喜びと、胸の躍りおどを感じていました。どんな婚約をした恋人でも、わたしほどの夢中の喜びをもつて、ゆるやかな時刻の過ぎるのをかぞえたことはありませんまい。わたしは寝る時には、聖餐式せいさんしきでわたしが説教する時のことを夢みながら床とこにつくのです。わたしはこの世に、僧侶になるといふほどの喜びは、他に何も無いものだと思っていました。詩人になれても、帝王になれても、わたしはそれを断わりたいほどで、わたしの野心はもうこの僧侶以上に何も思つていませんでした。

とうとう私にとつて大事の日が参りました。私はまるで自分の肩はねに羽はねでも生えているように、浮きうきした心持ちで、教会の方へ軽く歩んでいました。まるで自分を天使エンジェルのように思うくらいでした。そうして、大勢おおぜいの友達のうちには暗いような物思わしげな顔をしている者があるのを、不思議に思うくらいでありました。わたしは祈禱きとうにその一夜を過ごして、まったく法悦ほうえつの状態にあつたのです。慈愛ぶかい司教さまは永遠にいます父——神のごとくに見え、教会の円天井まゐてんじょうのあなたに天国を見ていたのであります。

この儀式をくわしくご存じでしょうが、まず淨祓式べんげしきがおこなわれ、それから、兩種の聖餐コミユニオン拜受式、それから、てのひらに洗礼者の油を塗る抹油式まつゆしき、それが済んでから、司教と声を

そろえて勤める神聖なる献身の式が終わるのであります。

ああ、しかしヨブ（旧約ヨブ記の主人公）が、「眼をもて誓約せざるものは愚かなる人間なり」と言ったのは、よく真理を説いています。わたしがその時まで垂れていた頭を偶然にあげると、わたしの眼の前にまるでさわれるぐらいに近く思われて、実際は自分のところからかなり離れた聖壇の手すりのはしに、非常に美しい若い女が目ざむるばかりの高貴の服装をしているのを見ました。

それはわたしの眼には、世界が変わったように思われました。私はまるで盲目の眼が再びあいたように感じたのです。つい今の瞬間までは栄光に輝いていた司教の姿はたちまちに消え去って、黄金の燭台に燃えていた蝋燭はあかつきの星のように薄らいで、一面の暗闇くらやみがお堂の内に拡がったように思われました。かの愛らしい女はその暗闇を背景にして、天使の出現のようにきわだって浮き出していたのです。彼女は輝いていました。実際、輝いて見えるというだけでなく、光りを放っていました。

わたしは他のことに気を奪とられてはならないと思つて、二度と眼をあくまいと決心してまぶたを伏せました。なぜといて、わたしの煩悶はだんだんに嵩こじてきて、自分はいま何をしているか分からないくらいになつたからでした。それにもかかわらず、次の瞬間にはまたもや眼をあげて、睫毛まつげのあいだから彼女を見ました。すると、誰しも太陽を見つめる時、むらさき色の半陰影が輪を描くように、彼女はすべて虹色にじいろにかがやいていました。

ああ、なんとという美しさであろう。偉大なる画家は、理想の美を天界に求めて、地上に聖女の真像を描きますが、今わたしの眼前にある自然のほんとうの美しさに近い描写はまだ見いだされません。いかなる詩句といえども、画像の絵具面パレットといえども、彼女の美を写してはいませんでした。彼女はやや脊丈せいの高い、女神のような形と態度とを有していました。やわらかい金色こんじきな髪をまん中で二つに分け、それが金の波を打つ二つの河になつて両方の顛顛こめかみに流れているところは、王冠をいただく女王のように見えました。額は透き通つた青みのある白さで、二つのアーチ形をした睫毛の上へのび、おのずからなる快活な輝きを持つ海緑色の瞳ひとみをたくみに際立きわだたしているのです。ただ不思議に見えたのは、その眉がほとんど黒いことでした。それにしても、なんとという眼でしょう。ただ一度のまたたきだけでも、一人の男の運命を決めることのできる眼です。今までわたしが人間に見たことのない、清く澄んだ、熱情のある、うるんだ光りを持つ、生きいきした眼でありました。

二つの眼は矢のように光りを放ちました。それがわたしの心臓に透るのをはつきりと見たのです。わたしはその輝いている眼の火が、天国より来たものか、あるいは地獄から来たものかを知りませんが、いずれかから来ているに相違ありません。彼女は天使エンジェルか、悪魔デモンかでありました。おそらく両方であつたろうと思います。たしかに彼女は普通の女から——すなわちイヴの腹から生まれたものではありませんでした。光沢つやのある真珠の歯は、愛らしい微笑のときに光りました。彼女が少しでも口唇くちびるを動かすときに、小さなえくぼが輝く薔薇色ばらいろの頬に

現われました。優しい整った鼻は、高貴の生まれであることを物語っていました。

半分ほどあらわに出した滑らかな光沢のある二つの肩には、瑪瑙と大きい真珠の首飾りが首すじの色と同じ美しきで光っていて、それが胸の方に垂れていました。時どきに彼女があふれるばかりの笑いを帯びて、驚いた蛇か孔雀のように顔を上げると、それらの宝石をつつんだ銀格子のような高貴な襞襟ひだえりが、それにつれて揺れるのでした。彼女は赤いオレンジ色のビロードのゆるやかな着物をつけていました。貂てんの皮でふちを取った広い袖からは、光りも透き通るほどのあけぼのの女神の指のような、まったく理想的に透明な、限りなく優しい貴族風の手を出していました。

これらの細かいことは、その時わたしが非常に煩悶していたのにかかわらず、何ひとつ逃がさずに、あたかもきのうのこのことのように明白に思い出します。顎あごのところと口唇の隅にあつた極めてわずかな影、額の上のビロードのようなうぶ毛、頬にうつる睫毛のふるえた影、すべてのものが、驚くほどにはつきりと語ることができるのです。

それを見つめていると、わたしは自分のうちに今まで閉じられていた門がひらくのを感じました。長い間さえぎられていた口があいて、すべてのものが明らかにになり、今まで知らなかった内部のものが見えるようになったのです。人生そのものがわたしに対して新奇な局面をひらきました。わたしは新しい別の世界、いつさいが変わっているところに生まれて来たと思つたのです。恐ろしい苦悩が赤く灼けた鉢はさまをもって、わたしの心臓を苦しめ始めました。

絶え間なく続いている時刻がただ一秒のあいだかと思われると、また一世紀のように長くも思われます。

そのうちに儀式は進んでゆく。わたしはその時、山でも根こぎにするほどの強い意志の力を出して、わたしは僧侶などになりたくないと呼び出そうとしましたが、どうしてもそれが言えないのです。わたしは自分の舌が上顎うわちびに釘づけにでもなつたくらいで、いやだといういの字も言うことができなかつたのです。それはちょうど夢におそわれた人が命がけのこのために、なんとかひと声叫ぼうとあせつても、それができ得ないのと同じことで、わたしは現在目ざめていながらも叫ぶことが出来なかつたのです。

彼女はわたしが殉道に身を投じてゆく破目はめになるのを知って、いかにも私に勇気づけるように、力強い頼みがいのある顔を見せました。その眼は詩のように、眼の動きは歌のように思われたのです。

彼女はその眼でわたしに言いました。

「もしあなたがわたしのものになって下さるなら、神が天国にいますよりも、もつと幸福にしてあげます。天使たちがあなたに嫉妬を感じるほどにしてあげます。あなた自身を包もうとしてしている、あの喪服を引っぱがしておしまいなさい。わたしは美しいのです。わたしは若いのです。わたしには命があるのです。わたしのところへ来て下さい。お互いに愛します。エホバの神は何をあなたに上げるのでしょうか。なんにもくれずまい。わたしたちのいのちは、

ただ一度の接吻せつぽんのあいだに夢のように過ぎてしまいます。あの聖餐チャリス盃を投げ出しておしまいなさい。そうして、自由におなりなさい。わたしはあなたを遠い島へお連れ申します。あなたは、銀の屋根の建物の下で、大きい黄金おうごんの寝台の上で、わたしのふところ寝られます。わたしはあなたを愛しております。わたしはあなたを神様より奪ってしまいましたのです。これまでどれだけの尊い人たちが愛の血をそそいだかもしれません、誰も神様のそばにも近寄った者はないのではございませんか」

これらの言葉が、無限の優しいリズムをもつてわたしの耳に流れ込みました。彼女の顔はまったく歌のようで、その眼で物を言っています。そうして、それが本当のくちびるから漏れ出るようにわたしの胸の奥にひびくのでした。

わたしはもう神様にむかって、僧侶となることを断わりたい心持が胸いっぱいでしたが、それでどういうものか、わたしの舌は儀式通りに言ってしまうのです。美しいひとは更にまた、わたしの胸を刺し通す鋭い白刃しらばのような絶望の顔や、歎願するような顔を見せるのです。それは「悲しみの聖母」のどれよりも、もっと強い刃でつらぬくような顔つきでありました。そのうちにすべての儀式はとどこおりなく終わって、わたしは一個の僧侶になったのであります。

この時ほど、彼女の顔に深い苦悶くもんの色が描かれたのを見たことはありませんでした。婚約した愛人の死を目まのあたりで見ている少女も、死んだ子を悲しんで空からの乳母車をのぞき込んで

いる母も、天界の楽園を追われてその門に立つイヴも、吝嗇りんしやくな男が自分の宝と置き換えられた石をながめている時でも、詩人がたましいをこめた、ただひとつの原稿を何かのために火に焚やこうとしている時でも、この時における彼女ほどには、あきらめ切れないような絶望の顔を見せないであろうと思われました。彼女の愛らしい顔にすっかり血の色が失せて、大理石よりも白くなりました。美しい二つの腕は筋肉のゆるんだように、体の両方に力なく垂れてしまいました。柔順すなおな足も今は自由にならなくなつて、彼女は何か力と頼むべき柱をさがしていました。

わたしはといえば、これも死人のような青白い色をして、教会のドアの方へよろめいて行きました。あのクリストの磔刑はりつけの像よりも更に血の汗を浴びて、まるで首を絞しめられている人のように感じました。円天井はわたしの肩の上へひら押しに落ちかかつて来て、わたしの頭だけでこの円天井のすべての重みを支ささえているようでありました。

ちようど、わたしが教会の闘しきいをまたごうとする時でした。突然に一つの手がわたしの手を握ったのです。それは女の手です。わたしはこれまでに女の手などにふれたことはありませんでしたが、その時わたしに感じたのは蛇の肌にあざわったような冷たい感じで、その時の感じはいまだに掌ての上に、熱鉄の烙印やきいんを押したように残っています。それは彼女の手であったのです。

「不幸なかなたね。ほんとうに不幸なかなた……。どうしたということですよ」と、彼女は低い声を

強めて言つて、すぐに人込みのなかに消えて行つてしまいました。

老年の司教がわたしのそばを通りかかりました。彼は何かわたしを冷笑するようなけわしい眼を向けて行きました。わたしはよほど取りみだした顔つきをしていたらしく、顔を赤くしたり、青くしたりして、まぶしい光りが眼の前にきらめくように感じました。そのうちに、一人の友達がわたしに同情して、わたしの腕をとつて連れ出してくれました。わたしはもう誰かに扶けられないでは、学寮へ帰ることが出来ないくらいでした。

町の角で、わたしの若い友達が何かよその方へ氣をとられて振りむいている刹那に、風變わりの服装をした黒人の召仕がわたしに近づいて来て、歩きながらに金色のふちの小さい手帳をそつと渡して、それをかくせという合図をして行きました。わたしはそれを袖のなかに入れて、わたしの居間でただひとりになるまで隠しておきました。

ひとりになつてから、その手帳の止めを外すと、中には一枚の紙がはいつていて、「コンテイニ宮にて、……クラリモンド」と、わずかに書いてありました。

二

わたしはその当時、世間のことはなんにも知りませんでした。名高いクラリモンドのことも、なども知っていません。コンティニ宮がどこにあるかさえも、まったく見当けんとうがつきませんでした。わたしはいろいろに想像をたくましくしてみましたが、実のところ、もう一度逢うことが出来れば、彼女が高貴な女であろうと、または娼婦のたぐいであろうと、わたしはそんなことを気にかけてはいないのでした。

わたしの恋はわずかいつときのあいだに生まれたのですが、もう打ち消すことの出来ないほどに根が深くなつてゆきました。わたしはもう、まったく取りみだしてしまつて、彼女が触れたわたしの手に接吻したり、幾時間ものあいだに繰り返して彼女の名を呼んだりしました。わたしは彼女の姿を目のあたりにはつきりと認めたいがために、眼をとじてみたりしました。

わたしは教会の門のところ、わたしの耳にささやいた彼女の言葉を繰り返しました。「不幸なかな。ほんとうに不幸なかな……どうしたということですか」

——わたしはそうしているうちに、とうとう自分の地位の恐ろしさがわかるようになりました。暗い忌いまわしい束縛——その生活のうちに、自分がはいつていったということがわかる

ようになりました。

僧侶の生活——それは純潔にして身を慎んでいること、恋をしてはならないこと、男女の性別や老若の区別をしてはならないこと、すべて美しいものから眼をそむけること、人間の眼を抜き取ること、一生のあいだ教会や僧房そうぼうの冷たい日影に身をかがめていること、死人の家以外を訪問してはならないこと、見知らない死骸のそばに番をしていること、いつも喪服にひとしい法衣ころもを自分ひとりで着て、最後にはその喪服がその人自身の棺おほの掩おほいになるということであります。

もう一度クラリモンドに逢うには、どうしたらいいかと思いましたが。町には誰も知っていない人がないので、学寮を出る口実がなかったのです。わたしはもうこんな所にいつときもじつとしてはいられないと思いました。そこにいたところが、ただわたしはこれから職に就く新しい任命を待っているばかりです。

窓をあけようと思って、貫木かんみぎに手をかけましたが、それは地面から非常に高い所にありますので、別に梯子はしごを見つけない限りは、この方法で逃げ出すことは無駄であることが分かりました。その上に、どうしても夜でもなければ、そこから降りられそうもないのです。それからまた、あの迷宮のように複雑な街の様子も分かりかねるのであります。これらの困難は、他人にとつてはさほどむずかしいとは思われないうのでしようが、わたしにとつては非常に困難の仕事であつたのです。それというのは、わたしはつい前の日に、生まれて初めて

恋に落ちたばかりの学徒で、経験もなければ金も持たない、衣服も持たない、あわれな身上であつたからです。

わたしは盲目にひとしい自分にむかつて、ひとりごとを言いました。

「ああ、もし自分が僧侶でなかつたなら、毎日でもあの女ひとに逢うことも出来る。そうして、あの女の恋人となり、あの女の夫になつていられるのだが……。こんな陰気な喪服の代りに、絹やビロードの着物を身にまとして、金のくさりや剣をつけて、ほかの若い騎士たちのように美しい羽毛をつけていられるのに……。髪もこんなぶざまな剃髪トシシユアなどにしていないで、襟まで垂れている髪を波のようにちぢらせて、立派に伸びた頤鬚あごひげまでもたくわえて、優雅な風采でいられるのに……」

しかも、かの聖壇の前における一時間、その時のわずかな明晰めいせきな言葉が、永久にわたしをこの世の人のかずから引き離してしまつて、わたしは自分の手で自分の墓の石蓋いしぶたをとじ、自分の手で自分の牢獄の門をとじたのであります。

わたしはまた窓へ行つて見ると、空はうららかに青く晴れて、すべての樹木はみな春のよそおいをして、自然は皮肉な歡樂の行進をつづけています。そこには、多くの人びとが往来して、姿のよい若い紳士や、美しい淑女たちが二人連れで、森や花園の方へそぞろ歩きをしています。元気のいい青年がおもしろそうに酔つて歌っています。すべてが快活、生命、躍動の一幅の絵画で、わたしの悲哀と孤独とくらべると実にひどい対照をなしているのです。

門の階段のところには、若い母が、自分の子供と遊んでいます。母はまだ乳のしずくの残っている可愛らしい薔薇色の口に接吻をしたり、子供を喜ばせるためにいろいろあやしてみたり、母だけしか知らないような種じゆ様ざまな尊い仕料をしています。その子供の父は腕を組んでにこやかに微笑みながら、少し離れたところに立ってその可愛らしい仲間をながめています。

わたしはもうこんな楽しい景色を見るに堪えられなくなつて、手あらく窓をしめきつて、急いで床のなかに飛び込んでしまいました。わたしのころは、はげしい嫉妬と嫌悪でいっぱいになつて、十日も飢えている虎のように、わが指を噛みました。

こうして私はいつまで寝台にいたか、自分でも覚えませんでした。床のなかで発作的に苦しみ悶えている間に、突然この部屋のまんまなかに僧院長のセラピオン師がまっすぐに突つ立って、注意ぶかくわたしを見つめているのに気がつきました。

わたしは非常に恥かしくなつて、おのずと胸の方へ首を垂れて、両手で顔を掩いかくしたのです。セラピオン師はしばらく無言で立っていました。やがて私に言いました。

「ロミューオー君。何か非常に変つたことがあなたの身の上起こっているようですね。あなたの様子はどうも理解できない。あなたはいつも沈着で敬虔な温順な人物であるのに、どうしてそんなに、野獣などのように怒り狂っているのです。気をおつけなさい。悪魔の声に耳を傾けてはならない。恐れてはならない。勇気を失つてはなりませんぞ。そんな誘惑に出

逢った場合には、何よりも確固たる信念と注意とに頼らなくてははいけません。さあ、しつかりしてよくお考えなさい。そうすれば悪魔の霊はきつとあなたから退散してしまいます」

セラピオン師の言葉で、わたしは我れにかえつて、いくぶんか心が落ちついて来ました。彼は更に言いました。

「あなたはCという所の司祭に就くことになったので、それを知らせに来たのです。その僧侶が死んだので、あなたがそこへ就職するように司教さまから命ぜられました。明日すぐに出発できるように用意してもらいたいのです」

彼女に再び逢うことなしに、明日ここを離れて行き、今まで二人のあいだを隔てる障りある上に、さらに二人の仲をさくべき関所を置くことになったら、奇蹟でもない限りは彼女に逢うことは永遠にできなくなるのです。手紙を書いてやることは所詮しよせんできないことです。誰にたのんでその手紙を渡していいか、それさえも分からない。僧職にある身が誰にこんなことを打ち明けていいか、誰を信じていいか。それが私にはまったく堪たえられないほどの苦勞でありました。

翌あさ、セラピオン師はわたしを連れに来たのです。旅行用の貧しい手鞆などを乗せている二匹の騾馬らばが門前に待っていました。セラピオン師は一方の騾馬に乗り、わたしは型のごとくに他の騾馬に乗りました。

町の路みちみちを通るとき、わたしはもしやクラリモンドに逢いはしないかと、家いへの窓や

露台に気をつけて見ました。朝が早かったので、街もまだほとんど起きてはいませんでした。わたしは自分の通りかかった邸宅という邸宅の窓の鎧戸やカーテンを見透すように眼をくばりました。

セラピオン師はわたしの態度を別に疑いもせず、ただ私がそれらの邸宅の建築を珍らしがっているのだと思つて、わたしがなお十分に見ることが出来るように、わざと自分の馬の歩みをゆるやかにしてくれました。わたしたちはついに町の門を過ぎて、前方にある丘をのぼり始めました。その丘の頂上にのぼりつめた時、わたしはクラリモンドの住む町に最後の一瞥を送るために見返りました。

町の上には、大きい雲の影がおおい拡がっておりました。その雲の青い色と赤い屋根との二つの異つた色が一つの色に溶け合つて、新しく立ち昇る巷の煙りが白い泡のように光りながら、あちらこちらにただよっています。ただ眼に見えるものは一つの大きい建物で、周囲の建物を凌いで高くそびえながら、水蒸気に包まれて淡く霞んでいましたが、その塔は高く清らかな日光を浴びて美しく輝いていました。それは三マイル以上も離れているのに、気のせいかな、かなり近くに近く見えるのでした。殊にその建物は、塔といい、歩廊といい、窓の枠飾りといい、つばめの尾の形をした風見にいたるまで、すべていちじるしい特長を示していました。

「あの日に照りかがやいている建物は、なんでございます」

わたしはセラピオン師にたずねました。彼は手をかぎして眼の上をおおいながら、わたしの指さす方を見て答えました。

「あれはコンティニ公が、娼婦のクラリモンドにあたえられた昔の宮殿です。あすこでは恐ろしいことが行なわれているのです」

その瞬間でした。それはわたしの幻想であつたか、それとも事実であつたか分かりませんが、かの建物の敷石の上に、白い人の影のようなものがすべってゆくのを見たような気がしたのです。ほんのいつとき、光るように通り過ぎて、間もなく消えたのですが、それは確かにクラリモンドであつたのです。

ああ、実にそのとき、遠く離れたけわしい道の頂上——もう二度とここからは降りて来ないであろうと思われる所から、落ちつかない興奮した心持ちで彼女の住む宮殿の方へ眼をやりながら、雲のせいかその邸宅が間近く見えて、わたしをその王として住むように差し招いているかとも思う。——その時のわたしの心持ちを彼女は知っていたでしょうか。

彼女は知っていたに違いないと思うのです。それはわたしと彼女とのこころは、僅かの隙もないほどに深く結ばれていて、その清い彼女の愛が——寝巻のままではありましたが——まだ朝露の冷たいなかをあふ敷石の高いところに彼女を立たせたに相違ないのです。

雲の影は宮殿をおおいました。いつさいの景色は家の屋根と破風はふうとの海のように見えて、そのなかに一つの山のような起伏がはつきりと現われていました。

セラピオン師は驟馬を進めました。わたしも同じくらしいの足どりで馬を進めて行くと、そのうちに道の急な曲がり角があつて、とうとうSの町は、もうそこへ帰ることのできない運命とともに、永遠にわたしの眼から見えなくなつてしまいました。

田舎のうす暗い野原ばかりを過ぎて、三日間の倦み疲れた旅行ののち、わたしが預かることになつている、牡鶏おんどりの飾りのついていてる教会の尖塔が樹樹きぎの間から見えました。それから、茅ぶかやぎの家と小さい庭のある曲がりくねつた道を通つたのち、あまり立派でもない教会の玄関の前に着いたのです。

入り口には、いくらかの彫刻が施してあるが、荒彫あらぼりの砂岩石の柱が二、三本と、またその柱と同じ石の控え壁をもつてゐる瓦ぶぎの屋根があるばかり、ただそれだけのことでした。左の方には墓所があつて、雑草がいつぱいに生いしげり、まん中あたりに鉄の十字架が建つてゐます。右の方に司祭館が立つていて、あたかも教会の蔭になつてゐるのです。それがまた極端に単純素朴なもので、囲いのうちにはいつてみると、一、二羽の鶏とりがそこらに散らばつてゐる穀物をついばんでいます。鶏は僧侶の陰気な習慣になれてゐると見えて、わたしたちが出て来ても別に逃げて行こうともしません。どこかで噎かれたような啼なき声こゑがきこえたかと思つと、老いさらばえた一匹の犬が近づいて来るのでした。

それは前の司祭ぜんの犬で、ただれた眼、灰色の毛、これ以上の年をとつた犬はあるまいと思われるほどの衰えを見せていました。わたしは犬を軽くたたいてやりますと、何か満足らし

い様子で、すぐにわたしのそばを通つて行つてしまいました。そのうちに前の司祭の時代からここの留守番であつたというひどい婆さんが出て来ました。老婆はうしろの小さい客間へわたしたちを案内して、今後もやはり自分を置いてもらえるかということを尋ねるので、彼女も、犬も鶏も、前の司祭が残したものはなんでも皆そのままに世話をしてやると答えますと、彼女は非常に喜びました。セラピオン師はこれだけの小さい世帯を保つてゆくために、彼女の望むだけの金をすぐに出してやつたのであります。

さて、それからまる一年のあいだ、わたしは自分の職務について、十分に行き届いた忠実な勤めをいたしました。祈祷と精進はもちろん、病める者はわが身の痩せるような思いをしても救済し、その他の施しなどについても、わたし自身の生計くらしに困るほどまでに尽力しました。しかもわたしは自分のうちに、大きい充たみされぬものがありました。神の恵みは、わたしには与えられないように思われました。この神聖な布教の職にあるものに湧きでるはずの幸福というものが、一向に分からなくなりました。わたしの心は遠い外に行つていたので、クラリモンドの言葉が今もわたしの口唇くちびるに繰り返されていたのです。

ああ、皆さん。このことをよく考えてみて下さい。わたしがただの一度、眼をあげて一人の女人にょにんを見て、その後何年かのあいだ、最もみじめな苦悩をつづけて、わたしの一生の幸福が永遠に破壊されたことを考えてみて下さい。しかし私はこの敗北状態について、また靈的には勝利のごとく見えながら、更におそろしい破滅におちいったことについて、くどくど

と申し上げますまい。それからすぐに事実のお話に移りたいと思います。

三

ある晩のことでした。わたしの司祭館のドアの鈴ベルが長くはげしく鳴りだしたのです。老婆が立つてドアをあけると、一つの男の影が立っていました。その男の顔色はまったく銅色あかがねいろをしておりまして、身には高価な外国の衣服をつけ、帯には短剣を佩おびているのが、老婆のバルバラの提灯で見えました。老婆も一度は驚いて怖れましたが、男は彼女を押し鎮めて、わたしの神聖な仕事についてお願いに來たのであるから、わたしに会わせてもらいたいというのです。

わたしが二階から降りようとした時に、老婆は彼を案内して來ました。この男はわたしに向かつて、非常に高貴な彼の女主人が重病にかかっている、臨終のきわに僧侶に逢いたがっていることを話したので、わたしはすぐに一緒に行くからと答えて、臨終塗油式に必要な聖具をたずさえて、大急ぎで二階を降りて行きました。

夜の暗さと区別わかちがないほどに黒い二頭の馬が門外に待っていました。馬はあせつてあがいていて、鼻から大きい息をすると、白い煙りのような水蒸気が胸のあたりを掩おほっていました。男は鎧あぶみをとつて、わたしをまず馬の上ののせてくれましたが、彼は鞍の上あぶみに手をかけたかと思うと忽たちまちほかの馬に乗り移つて、膝で馬の両腹を押したづなてて手綱をゆるめました。

馬は勇んで、矢のように走り出しました。わたしの馬は、かの男が手綱を持っていてくれましたので、彼の馬と押し並んで駆けました。全くわたしたちはまっしぐらに駆けました。地面はまるで青黒い長い線としか見えないようにうしろへ流れて行き、わたしたちの駆け通る両側の黒い樹樹きぎの影は混乱した軍勢のようにざわめきます。真つ暗な森を駆け抜ける時などは、一種の迷信的の恐怖のために、総身そうみに寒さを覚えました。またある時は馬の鉄蹄てつていが石を蹴つて、そこらに撒まき散らす火花の光りが、あたかも火の路を作ったかと疑われました。誰でも、夜なかのこの時刻に、わたしたちふたりがこんなに疾駆しゅくするのを見たらば、悪魔に騎のつた二つの妖怪と間違えたに相違ありません。時どきにわれわれの行く手には怪しい火がちらちらと飛びめぐり、遠い森には夜の鳥が人をおびやかすように叫び、また折りおりは燐光のような野猫の眼の輝くのを見ました。

馬は鬣たてがみをだんだんにかき乱して、脇腹には汗をしたたらせ、鼻息もひどくあらあらしくなってきました。それでも馬の走りがゆるやかになつたりすると、案内者は一種奇怪な叫び声をあげて、またもや馬を激しく跳おどらせるのでした。

旋風つむじかぜのような疾走がようやく終わると、多くの黒い人の群れがおびただしい灯に照らされながら、たちまち私たちの前に立ち現われて来ました。わたしたちは大きい木の吊り橋を音を立てて渡つたかと思うと、二つの巨大な塔のあいだに黒い大きい口をあいている、円屋根まるまふうのおおいのある門のうちに乗り入れました。わたしたちがはいると、城のなかは急にとど

よめきました。松明たいまつをかかげた家来どもが各方面から出て来まして、その松明の火はあちらこちらに高く低く揺れています。わたしの眼はただこの広大な建物に戸惑とまどいしているばかりであります。幾多の円柱、歩廊、階段の交錯、その莊嚴そうごんなる豪華、その幻想的なる壯麗、すべてお伽噺しげばなしにでもありそうな造りでした。

そのうち黒ん坊の召仕べいじ、いつかクラリモンドからの手紙をわたしに渡した召仕が眼に入りました。彼はわたしを馬から降ろそうとして近寄ると、頸くびに金のくさりをかけた黒いピロイドの衣服をつけた執事らしい男が、象牙ぞうげの杖について私に挨拶するために出て来ました。見ると、涙が眼から頬を流れて、彼の白い髻ひげをしめらせています。彼は行儀かじりよく頭をふりながら、悲しそうに叫びました。

「遅すぎました、神父さま。遅すぎましてございます。あなたが遅うございましたので、あなたに靈魂のお救いを願うことは出来ませんでした。せめてはあのお気の毒な御遺骸にお通夜を願います」

かの老人はわたしの腕をとって、死骸の置いてある室へやへ案内しました。わたしは彼より烈しく泣きました。死人というのは余人よじんでなく、わたしがこれほどに深く、また烈しく恋していたクラリモンドであつたからです。

寝台の下に祈祷台が設けられてありました。銅製の燭台に輝いている青白い火焰ほのおは、あるかなきかの薄い光りを暗い室内に投げて、その光りはあちらこちらに家具や蛇腹じゃばらの壁などを

見せていました。

机の上にある彫刻した壺の中には、あせた白薔薇がただ一枚の葉を残しているだけで、花も葉もすべて香りのある涙のように花瓶の下に散っています。毀れた黒い仮面や扇、それいろいろな変わった仮装服が腕椅子の上に置いたままになつて見ると、死がなんの知らせもなしに、突然にこの豪華な住宅に入り込んで来たことを思わせました。

わたしは寝台の上に眼をあげる勇氣もなく、ひざまずいて亡き人の冥福を熱心に祈り始めました。神が彼女の霊と私とのあいだに墳墓を置いて、この後わたしの祈祷のときに、死によつて永遠に聖められた彼女の名を自由に呼ぶことが出来るようにして下されたことについて、わたしはあつく感謝しました。

しかし私のこの熱情はだんだんに弱くなつて来て、いつの間にか空想に墜ちていました。この室には、すこしも死人の室とは思われなかつたところがあつたのです。私はこれまでに死人の通夜にしばしば出向きまして、その時にはいつも氣が滅入るような匂いに慣れていたものですが、この室では——実はわたしは女の媚めかしい香りというものを知らないのですが——なんとなくなま温かい、東洋ふうな、だらけたような香りが柔らかくただよつています。それにあの青白い灯の光りは、もちろん歡樂のために点けられていたのですが、死骸のかたわらに置かれる通夜の黄いろい蠟燭の代りをなしているだけに、そこには黄昏と思わせるような光りを投げているのです。

クラリモンドが死んで、永遠にわたしから離れる間際まぎわになつて、わたしが再び彼女に逢うことが出来たという不思議な運命について、わたしは考えました。そうして、苦しく愛惜の溜め息をつきました。すると、誰かわたしの後うしろの方で、同じように溜め息をついているのを感じたのです。驚いて振り返つて見ましたが、誰もいません。自分の溜め息の聲が、そう思わせるように反響したのでした。わたしは見まいとして、その時までには心を押さえていたのですが、とうとう死の床の上に眼を落としてしまいました。縁ふちに大きい花模様があつて、金糸銀糸の総かさを垂れている真つ紅な緞子どんすの窓掛けをかがけて私は美しい死人をうかがうと、彼女は手を胸の上に組み合わせ、十分からだを伸ばして寝ていました。

彼女はきらきら光る白い麻布あさぬのでおおわれていましたが、それが壁掛けの濃い紫色とまことにいい対照をなして、その白麻は彼女の優美なからだの形をちつとも隠さずに見せている綺麗な地質の物でありました。彼女のからだのゆるやかな線は白鳥の首のようで、実に死といえどもその美を奪うことは出来ないのです。彼女の寝ている姿は、巧みな彫刻家が女王の墓の上に置くために彫りあげた雪花石膏の像のようでもあり、または静かに降る雪に隈なくおおわれながら睡いっている少女のようでもありました。

わたしはもう祈祷いのりをささげに来た人としての謹慎の態度を持ちつづけていられなくなりました。床のあいだにある薔薇は半ばしぼんでいるのですが、その強烈な匂いはわたしの頭に沁み透つて酔つたような心持ちになつたので、何分なにぶんじつとしていられなくなつて、室内をあ

ちらこちらと歩きはじめました。そうして、行きかえりに寝台の前に立ちどまって、その屍衣しがいを透して見える美しい死骸のことを考えているうちに、途方とほうもない空想が私の頭のなかに浮かんで来ました。

——彼女はほんとうに死んだのではないかもしれない。あるいは自分をこの城内に連れ出して、恋を打ち明ける目的のために、わざと死んだふりをしているのではないかとも思いました。またある時は、あの白い掩おほいの下で彼女が足を動かして、波打った長い敷布シーツのひだを幽かすかに崩したようにさえ思われました。

わたしは自分自身に訊きいたのです。

「これはほんとうにクラリモンドであろうか。これが彼女だという証拠はどこにある。あの黒ん坊の召仕ペーヅは、あの時ほかの婦人の使いで通つたのではなかったか。実際、自分はひとりぎめで、こんな気違いじみた苦しみをしているのではあるまいか」

それでも、わたしの胸は烈しい動悸をもつて答えるのです。

「いや、これはやつぱり彼女だ。彼女に相違ない」

わたしは再び寝台に近づいて、疑問の死骸に注意ぶかい眼をそそぎました。ああ、こうなったら正直に申さなければなりませんまい。彼女の実によく整ったからだの形、それは死の影によって更に浄きよめられ、さらに神聖になつていたとはいえ、世に在りし時よりも更に肉感的になつて、誰が見てもただ睡ねっているとしたか思われませんでした。わたしはもう、葬式の

ためにここへ来たことを忘れてしまつて、あたかも花婿が花嫁の室にはいつて来て、花嫁は羞かしさのために顔をかくし、さらに自分全体を包み隠してくれる紗ペールをさがしているというような場面を想像しました。

わたしは悲歎に暮れていたとはいえ、なお一つの希望にかられて、悲しさと嬉しさとにふるえながら、彼女の上に身をかがめて、掩いのはしをそつとつかんで、彼女に眼を醒まさせないように息をつめてその掩いをはがしました。わたしは烈しい動悸を感じ、こめかみに血のぼるのを覚え、重い大理石の板をもたげた時のように、ひたいに汗の流れるのを知りました。

そこに横たわっているのは、まさしくクラリモンドでした。わたしが前にわたしの僧職授与式の日教会で見た時と少しも違わない、愛すべき彼女でありました。死によつて、彼女はさらに最後の魅力を示していました。青白い彼女の頬、やや光沢つやのあせた肉色のくちびる、下に垂れた長いまつげ、白い皮膚にきわだつて見えるふさふさした金色の髪、それは静かな純潔と、精神の苦難とを示して、なんともいえない蠱惑こわくの一面を現わしています。彼女はたけ長い解けた髪に小さい青白い花をさして、それを光りある枕の代りとし、豊かな捲まき毛はさらに露あらわなる肩を包んでいます。彼女の美しい二つの手は天使エンジェルの手よりも透き通つて、敬虔けいけんな休息と静肅な祈りの姿を示していましたが、その手にはまだ真珠の腕環がそのままに残つていて、象牙のようななめらかな肌や、その美しい形の丸みは、死の後までも一種の妖

艶をとどめていました。

わたしはそれから言葉に尽くせない長い思案に耽ふけりましたが、彼女の姿を見守っていればいるほど、どうしても彼女はこの美しいからだを永久に捨てたとは思えないのでした。見つめてみると、それは気のせいか、それともランプの光りのせいかわかりませんが、血の氣のない顔の色に血がめぐり始めたように思われました。わたしはそつと軽く彼女の腕に手をあてますと、冷たくは感じましたが、いつか教会の門でわたしの手にふれた時ほどには冷たかないような気がしました。わたしは再び元の位置にかえつて、彼女の上に身をかがめました。が、わたしの熱い涙は彼女の頬をぬらしました。

ああ、なんとという絶望と無力の悲しさであります。なんとも言いようのない苦しみを続けながら、わたしはいつまでも彼女を見つめていたことでしょう。わたしは自分の全生涯の生命をあつめて彼女にあたえたい。わたしの全身に燃えている火焰ほのおを彼女の冷たい亡骸なきがらにそそぎ入りたいと、無駄な願いを起こしたりしました。

夜は更ふけてゆきました。いよいよ彼女と永遠のわかれが近づいたと思つた時、わたしはただひとりの恋人であつた彼女に、最後の悲しい心をこめた、たった一度の接吻せつぶんをしないではいられませんでした――。

おお、奇蹟です。熱烈に押しつけた私のくちびるに、わたしの息とまじつて、かすかな息がクラリモンドの口から感じられたのです。彼女の眼があいて来ました。それは以前のよう

な光りを持つていました。それから深い溜め息をついて、二つの腕をのぼして、なんともいられない喜びの顔色をみせながら私の頸を抱いたのです。

「ああ、あなたはロミューサーさま……」

彼女は豎琴の音の消えるような優しい声で、ゆるやかにささやきました。

「どこかお悪かったのですか。わたしは長い間お待ち申していたのですが、あなたが来て下さらないので死にました。でも、もう今は結婚のお約束をしました。わたしはあなたに逢うことも出来ます。お訪ね申すことも出来ます。さようなら、ロミューサーさま、さようなら。私はあなたを愛しています。わたしが申し上げたかったのは、ただこれだけです。わたしは今あなたが接吻をして下さったからだを生かして、あなたにお戻し申します。わたしはすぐにまたお逢い申すことが出来ましょう」

彼女の頭はうしろに倒れましたが、その腕はまだわたしを引き止めるかのように巻きついていました。突然に烈しい旋風が窓のあたりに起こって、室のなかへ吹き込んで来ました。

白薔薇に残っていた、ただ一枚の葉はちつとの間、枝のさきで蝶のようにふるえていました。だが、やがてその葉は枝から離れて、クラリモンドの霊を乗せて、窓から飛んで行っていました。ランプの灯は消えました。私はおぼえず死骸の胸の上に俯伏しました。

四

わたしがわれに返った時、わたしは司祭館の小さな部屋のなかに寝ていました。前の司祭の時から飼つてあるかの犬が、掛け蒲団の外に垂れているわたしの手をなめていました。あとなつて知つたのですが、わたしはそのまま三日も寝つづけていたので、その間に少しの呼吸もせず、生きている様子はちつともなかつたそうです。老婆のバルバラの話によると、わたしが司祭館を出発した晩にたずねて来たかの銅色の男が、翌あさ無言でわたしを担いで来て、すぐに帰つて行つたということです。しかし私がクラリモンドを再び見たかの城のことについて、この近所では誰もその話を知っている者はありませんでした。

ある朝、セラピオン師はわたしの部屋へたずねて来ました。彼はわたしの健康のことを偽善的な優しい声で訊きながら、しきりに獅子ライオンのような大きい黄いろい眼を据えて、測量鉛のように私のこころのうちへ探りを入れていました。突然に澄んだはつきりした声で話しました。それはわたしの耳には最後の審判の日の喇叭ラッパのようにひびいたのです。

「かの有名な娼婦のクラリモンドが、二、三日前に八日八夜もつづいた酒宴の果てに死にました。それは魔界ともいふべき大饗宴で、バルタザールやクレオパトラの饗宴をそのままの乱行が再びそこに繰り返されたのです。ああ、われわれはなんとこの時世に生まれ合わせたの

でしょう。言葉は何を言っているのか分からないような黒ん坊の奴隷が客の給仕をしました。が、どうしても私にはこの世の悪魔としか見えませんでした。そのうちのある人びとの着ている晴れ衣ぎなどは、帝王の晴れ衣にも間に合いそうな立派なものでした。かのクラリモンドについては、いろいろの不思議な話が伝えられています。その愛人はみな怖ろしい悲惨な終わりを遂げているようです。世間ではあの女のことを発塚鬼グールだとか、女の吸血鬼ヴァンパイヤだとか言っているようですが、わたしはやはり悪魔であると思っています」

セラピオン師はここで話をやめて、その話が私にどういう効果をあたえたかということ、以前よりもいつそう深く注意し始めました。わたしはクラリモンドの名を聞いて、驚かすにはいられません。それは彼女が死んだという知らせの上に、さらに私を苦しめたのは、その事件がさきの夜に私が見た光景と寸分たがわない偶然の暗合であります。わたしはその煩悶はんもんや恐怖を出来るだけ平気に粧よそおおうとしましたが、どうしても顔には現われずにはいまませんでした。セラピオン師は不安らしい嶮けわしい眼をして私を見つけていましたが、また、こう言いました。

「わたしはあなたに警告しますが、あなたは今や奈落ならくのふちに足をのせて立っているのです。悪魔の爪は長い。そうして、かれらの墓はほんとうの墓ではない場合があります。クラリモンドの墓石は三重にも蓋ふたをしておかなければなりません。なぜというに、もし世間の話が本当であるとすれば、彼女が死んだのは今度が初めてでないのです。ロミュオー君、どうかあ

なたの上に神様のお守りがあるように祈ります」

こう言つて、セラピオン師は静かに戸口の方へ出て行きました。間もなく彼はSの町へ帰りましたが、わたしはそれを見送りもしませんでした。

わたしはそののち健康を回復して、型のごとくに職務を始めました。クラリモンドの記憶と、セラピオン師の言葉とは絶えず私の心に残っていたのですが、セラピオン師の言つた不吉な予言が真実として現われるような、特別の事件も別に知らなかつたのでした。そこでわたしは、セラピオン師やわたしの恐怖にはやはり誇張があつたのだと思うようになりました。ところがある夜、不思議な夢を見たのです。

わたしはその夜まだ本当に寝入らないとき、寢室のカーテンのあく音を聞きました。わたしはその環がカーテンの横棒の上を烈しくすべつたのに気がついて、急いで肘ひじで起き上がると、わたしの前に一人の女がまつすぐに立っているのを見たのです。

彼女はその手に、墓場でよく見る小さいランプを持っていましたが、その指は薔薇色に透き通つていて、指さきから腕にかけてだんだんに暗くほの白く見えているのです。彼女の身につけているものは、ただ一つ、死の床に横たわっている時におおわれていた白い麻布でありました。彼女はそんな貧しいふうをしているのが恥かしそうに、胸のあたりを掩おうとしました。彼女の手には充分にそれが出来ませんでした。ランプの青白い灯に照らされて、彼女のからだの色も、身にまといつているものも、すべて一つの真つ白な色に見えていました

が、一つの色に包まれているだけに、彼女のからだのすべての輪郭はよくあらわれて、生きている人というよりは、浴^{ゆあ}みしている昔の美女の大理石像を思わせました。

死生を問わず、彫像であろうと、生きた女であろうと、彼女の美には変わりはありませんが、ただ多少その緑の眼に光りがないのと、かつては真紅^{しんく}の色をなしていた口が、頬の色と同じように弱い薔薇色をしているだけの相違でありました。彼女はその髪に小さい青い花をさしていましたが、ほとんどその葉を振るい落として花も枯れしぼんでいました。しかし、それは少しも彼女の優しさをさまたげず、こんな冒険をあえてして、不思議な身装^{みなり}でこの部屋にはいつて来ても、ちつとも私を恐れさせないほどの美しい魅力をそなえているのでした。彼女はランプを机の上に置いて、わたしの寝台の下に坐って私の方へ頭^{かしら}を下げました。そうして、ほかの女からはまだ一度も聞いたことのないような愛らしい柔らかな、しかし時には銀のような冴えた声で言いました。

「ロミューオーさま。わたしは長い間あなたをお待ち申しておりました。あなたのほうでは、わたしがあなたをお忘れ申していたとでも、思っていらっしゃるに相違ないと思います。それでもわたしは、遠い、たいへんに遠い、誰も二度とは帰って来られないような処^{ところ}から参ったのです。そこには太陽もなければ、月もないのです。そこにはただ空間と影とがあるばかりで、通り路もなく、地面もなく、羽で飛ぶ空気もない処です。それでも私は来たのでございます。愛は死よりも強いもので、しまいには死をも征服しなければならぬものですから

……。ああ、ここまで参るのにどんなに悲しい顔や、怖ろしいものに出逢ったか知りません。わたしの靈魂が、ただ意志の力だけでこの地上に帰って来て、わたしの元のからだを探し求めて、そのなかに帰るまでにはどんなに難儀をしたでしょう。わたしは自分の上に掩いかぶさっている重い石の蓋を引き上げるには、恐ろしいほどの努力を要しました。わたしの掌を見て下さい。こんなに傷だらけになってしまったのです。この上に接吻をして下さい。これが癒りますように……」

彼女は冷たい手を交るがわるに私の口へあてたのです。わたしは全くいくたびも接吻しました。彼女はその間に、なんとも言われない愛情をもってわたしを見ていました。

恥かしいことですが、わたしはセラピオン師の忠告も、また、わたしの神聖なる職業に任ぜられていることも、全く忘れていました。わたしは彼女が最初の来襲に対してなんの拒絶もなしに服従し、その誘惑をしりぞけるために僅かの努力さえもしませんでした。クラリモンドの皮膚の冷たさが沁み透って、わたしの全身はぞつとするように顫えました。憐れなことには、わたしはその後にもいろいろのことを見ているにもかかわらず、いまだに彼女を悪魔だと信じることができせん。すくなくとも彼女は悪魔らしい様子を持っていないばかりでなく、悪魔がそれほど巧妙にその爪や角を隠すことが出来るはずがないと思っていたからです。

彼女はうしろの方に身を引くと、いかにも倦だるそうな魅惑を見せながら長椅子のはしに腰を

おろしました。彼女はそれからだんだんに私の髪の毛なかへ小さい手を差し入れて、髪の毛をくねらしたりして、新しい型が私の顔に似合うかどうかを試みたりしました。

わたしはこの罪深い歓楽に酔って彼女のなすがままに委まかせていましたが、その間も彼女は何かと優しい子供らしい無駄話などをしていたのです。何より不思議なのは、こんな普通でないことをしていて、わたし自身が少しも驚かなかったことです。それはあたかも夢をみているとき、非常に幻想的な事柄がおこっても、それは当たり前のこととして別に不思議に思わないようなもので、今のすべての場合もわたし自身には全く自然なことのように思われたのです。

「ロミューオーさま。わたしはあなたをお見かけ申した前から愛していました。そうして、あなたを捜していたのです。あなたは私の夢にえがいていたかたです。教会のなかで、しかもあの運命的な瀬戸ぎわにあなたを初めてお見かけ申したのです。わたしはその時すぐに「あなたの方だ」と自分に言いました。わたしは今までに持つていたすべての愛、あなたのために持つ未来のすべての愛、それは司教の運命も変え、帝王もわたしの足もとにひざまずかせるほどの愛をこめてあなたを見つめたのです。それをあなたは、わたしには来て下さらないで、神様をお選びになったのです……。ああ、わたしは神様がねたましい。あなたは私よりも神様を愛していらつしやるのです。考えると詰まりません、わたしは不幸な女です。わたしはあなたの心をわたし一人のものにすることが出来ないのです。あなたは一度の接吻でわたし

をこの世によみがえらせて下さいました。この死んだクラリモンドを……。そのクラリモンドは今あなたのために墓の戸を打ち開いて来たのです。わたしはあなたに生の喜びを捧げた、あなたを幸福にしてあげたいと思つて来たのです」

それらの熱情的の愛の言葉は、わたしの感情や理性を眩惑させました。わたしは彼女を慰めるために、平気で彼女にむかつて「神を愛するほどに愛する」などと、恐るべき不敬なことを言つてしまいました。

彼女の眼はふたたび燃えはじめて、緑玉のように光りました。

「本当でございませうか。神様を愛するほどにわたしを愛して下さいの」と、彼女は美しい手を私に巻きつけながら叫びました。「そんなら、わたしと来て下さるでしよう。わたしの行きたい所へ来て下さるでしよう。もう忌な陰気な商売はやめておしまいなさい。あなたを騎士のうちでもいちばん偉い、みんなの羨望の的になるような人にしてあげます。あなたは私の恋びとです。クラリモンドの気に入った恋びと——ローマ法王さえ撥ねつけたほどの私の恋びと——それなら男の誇りになるはずです。ああ、わたしの人……。わたしたちはなんともいえないほどに幸福です。これから美しい黄金生活を共にしましょう。わたしたちはいつ出発しましょうか」

「あした、あした……」と、わたしは夢中になつて叫びました。

「あした……。では、そうしましょう。その間にわたしはお化粧する暇があります。このま

まではあまりお粗末で、旅行するには困ります。わたしはすぐにこれから行って、わたしが死んだと思つて大変に悲しんでいるお友達に知らせてやります。お金も、着物も、馬車も、何もかも用意して、今夜とおなじ時間にまいります。さようなら」

彼女は軽く私のひたいに接吻しました。それから彼女の持つランプが行つてしまうと、カーテンは元の通りにとじられて、あたりは真つ暗になりました。わたしは熟睡して、翌朝まで何も覚えませんでした。

五

わたしはいつもより遅く起きましたが、この不思議な出来事が思い出されて、わたしは終日悩みました。わたしは結局、ゆうべの出来事は自分の熱心なる想像から湧き出した空想に過ぎないと思ったのです。それにもかかわらず、そのときの感激があまりに生まなましいので、ゆうべのことがどうも空事そらごとではないようにも思われ、今度また何か起こつて来るのではないかという予感を除くことが出来ないのです、わたしは悪魔的の考えをいつさい追い出して下さることを神に祈つて、寢床についたのであります。

わたしはすぐに深い眠りに落ちました。するとまた、かの夢がつづきました。カーテンがふたたび開くと、クラリモンドが以前とは違つて、屍衣しがいに包まれて青白い色をしていたり、頬に死のむらさき色を現わしていたりすることなく、華やかな陽気な、快活な顔色をしてはいつて来ました。彼女は金色こんじきのふちを取つて絹の下袴の見えるほどに括くくつてある緑色のビロードの旅行服を着ていました。金色こんじきの髪はひろい黒色のフェルト帽の下に深ぶかとした房ふきをみせ、その帽子の上には白い羽が物好きのよういろいろな形に取り付けてありました。彼女は片手に金の笛をつけた小さい馬の鞭むちを持つていましたが、その笛で軽くわたしを叩いて言いました。

「まあ、お寝坊さんね。これがあなたのご用意なのですか。もう起きて、着物をきていらつしやると思っていましたのに……。早く起きて頂戴よ。もう時間がありませんわ」

わたしはすぐ寝台から飛びあがりました。

「さあ、ご自分で着物をお着なさい。行きましようよ」と、彼女は自分が持つて来た小さい荷造りを見せながら言いました。「ぐずぐずしているから馬がじれて、戸をぼりぼりと噛みはじめましたわ。もう今までに三十マイルも遠く行けましたのに……」

わたしは急いで服をつけにかかりますと、彼女は一つ一つに服を渡して、わたしの不器用な手つきを見ては笑いこけたり、わたしが間違うと、その着方を教えてくれたりしました。彼女はさらに私の髪を急いでととのえてくれて、ふところからふちに金銀線の細工がしてある、ヴェニスふうの小さい水晶の鏡を出して、芝居気たつぶりに、「お気に召しましたでしょうか。あなたの侍女こしもとにして下さりませ」などと訊いたりしました。

わたしはもう以前と同じ人間ではなく、自分ではないくらいに変わり果てました。立派に出来あがった石像とただの石ころほどに変わってしまいました。わたしはまったく美男子になり済まして、なんだかくすぐ揠くすぐつたいような心持ちになりました。上品な服装、贅沢にふちを取った胸着は、まるでわたしを違った人間にしてしまい、縞柄のついた二、三ヤードの布でこしらえただけのものが、こんなにも人の姿を変えるものかと驚きました。衣服が変わると、わたしの皮膚の色まで変わって、わずか十分というあいだに相当の伊達者だてしやのようになったの

です。

わたしはこの新しい服を着馴らすために室内を歩き廻りました。クラリモンドは母のような喜びをもって私をながめて、自分の仕事に満足したように見えました。

「さあ、このくらいにして出かけましょうよ。遠い所へ行かなければなりませんから……。さもないと時間通りに行き着きませんわ」

彼女はわたしの手を取って出ました。すべてのドアは、彼女が手を触れると開きました。

わたしたちは犬のそばを眼を醒まさせないで通りぬけたのです。門のところにマルグリト・ヌが待っていました。さきに私を迎えに来た浅黒い男です。彼は三頭の馬の手綱をとっていました。馬はいずれもさきに城中へ行つた時と同じ黒馬で、一頭はわたし、一頭は彼、他の

一頭はクラリモンドが乗るためでした。それらの馬は西風によつて牝馬めすうまから生まれたスペインの麝香猫じゃこうねこにちがいないと思うくらいに、風のように疾はやく走りました。出発の時にちょうど昇つたばかりの月はわれわれのゆく手を照らして、戦車の片輪が車を離れた時のように大空をころがって行きました。われわれの右にはクラリモンドが飛ぶように馬を走らせ、わたしたちにおくれまいとして息が切れるほどに努力しているのを見ました。間もなくわれわれは平坦な野原に出ましたが、その立ち木の深いところに、四頭の大きい馬をつけた一台の馬車
がわれわれを待っていました。

わたしたちはその馬車に乗ると、馭者は馬を励まして狂奔させるのでした。わたしは一方

の腕をクラリモンドの胸に廻しましたが、彼女もまた一方の腕をわたしに廻して、その頭をわたしの肩にもたせかけました。わたしは彼女の半ばあらわな胸が軽くわたしの腕を押し付けているのを感じました。わたしはこんな熱烈な幸福を覚えたことはありませんでした。わたしは一切のことを忘れしました。母の胎内にいた時のことを忘れたように、自分が僧侶の身であることを忘れて、まったく悪魔に魅^みられるほどの恍惚たる心持ちになったのでした。

その夜からわたしの性質はなんだか半分半分になったようで、わたしの内におたがい知らない同士のの二人の人間がいるように思われました。ある時は、自分は僧侶で紳士になつてゐる夢を見ているようにも思われ、またある時は、自分は紳士で僧侶になつてゐるような気もしたのです。わたしはもはや現実と夢との境を判別することが出来ず、どこからが事実で、どこで夢が終わつたのか分からなくなつて、高貴な若い貴族や放蕩者は僧侶を罵^{のの}り、僧侶は若い貴族の放埒な生活を忌^いみ嫌^いいました。

こういうわけで、わたしはこの二つの異つた生活を認めていながら、あくまでも強烈にそれを持續していました。ただ自分にわからない不合理なことは、一つの同じ人間の意識が性格の相反した二つの人間のうちに存在していることでありました。わたしは小さいCの村の司祭であるか、またはクラリモンドの肩書つきの愛人口ミュオー君であるか、この変則がどうしても分かりませんでした。

それはどうでもいいとして、とにかくに私はヴェニスで暮らしてました。少なくとも私

はそう信じていました。わたしのこの幻想的な旅行は、どれだけが現実の世界で、どれだけが幻影であるか、確かには分かりかねますが、わたしたちふたりはカナレイオ河岸の大邸宅に住んでいました。邸内は壁画や彫像をもって満たされ、大家の名作のうちにはティチアーノ（十五世紀より十六世紀にわたるヴェニス画家）の二つの作品もクラリモンドの室へやに掛けてありました。そこは全く王宮とひとしき所でありました。ふたりともに、めいめいゴンドラをそなえていて、家風の定服を着た船頭が付いており、さらに音楽室もあり、特別にお抱えの詩人もありました。

クラリモンドはいつも豪華な生活をして自然にクレオパトラの風ふうがあり、わたしはまた公爵の子息を小姓にして、あたかも十二使徒のうちの一族であり、あるいはこの静かな共和国（ヴェニス）の四人の布教師の家族であるかのごとくに尊敬され、ヴェニスの総督といえども道を避よけるくらいでありました。実に悪魔サタンがこの世に降くだって以来、わたしほど傲慢無礼の動物はありますまい。わたしは更にリドへ行つて賭博を試みましたが、そこは全く阿修羅あしゅらの巷ちまたともいうべきものでした。わたしはあらゆる階級——零落した旧家の子弟、劇場の女たち、狡猾な悪漢、幫間、威張り散らす乱暴者のたぐいを招いて遊びました。

こんな放蕩生活をしているにも拘かからず、わたしはクラリモンドに対しては忠実であり、また熱烈に彼女を愛していました。クラリモンドも大いに満足して愛のかわることはありませんでした。クラリモンドを持つてゐることは、二十人の女、否いな、すべての女を持つてゐるよ

うなものでした。彼女は実に感じ易い性質といろいろの変わった風貌と、新しい生きいきとした魅力とをすべて身に備えて、かのカメレオンのごとき女でありました。人がもしほかの女の美に酔うて淫蕩の心を起こした場合には、彼女は直ちにその美女の性格や魅力や容姿を完全に身にまとい、その人に同じ淫蕩の念を起こさせる女でありました。

彼女はわたしの愛を百倍にして返してくれたのです。この地の若い貴公子や十法官からも華ばなしい結婚の申し込みがありました、それはみな失敗に終わりました。フォスカリ家（ヴェニス総督たりしフォスカリ・フランセソの一家）の人からも申し込みがありました、彼女はそれを拒絶しました。金は十分に持っている、彼女は愛のほかには何物をも望んでいませんでした。ただこの愛——青春の愛、純真の愛、それは自分のここから燃え出した愛、そうして、それが最初であり、また最後であるところの熱情のほかには、なんにも望んでいなかったのです。わたしは全く幸福であるといえたかもしれません。しかし唯ひとつの苦しみは、毎夜呪わしい夢魔におそわれることで、貧しい村の司祭として終日自分の乱行を懺悔し、また滅罪の苦行をしている有様を夢みるのでした。

いつも彼女と一緒にいるために安心して、わたしはクラリモンドの変わった様子について別に考えもしませんでした、セラピオン師が彼女について語った言葉は時どきにわたしの記憶を喚び起こして、不安な心持ちを去るといふわけにはゆきませんでした。

どうかすると、クラリモンドの健康が以前のようによくないことがありました。彼女の皮

膚は日に日に蒼あおざめて、呼ばれて来た医者たちにもその病症がわからず、どうにも療治のしようがないことがありました。医者たちはみな訳わけのわからない薬をくれましたが、どれも無効で二度と呼ばれた者はありませんでした。彼女の色の蒼さは眼に見えるほどにいや増して、からだはだんだんに冷たく、さきの夜、かの見知らぬ城の中にあつたように、白く死んでゆくのでした。わたしはその枯れ死んでゆく姿を見て、言うに言われない苦悶を感じました。彼女はわたしの苦しみに感動して、死ななければならぬ人間の感ずるような、運命的な微笑を美しく、また悲しそうに浮かべていました。

ある朝のことでした。わたしは彼女の寝台のそばの小さい食卓で朝食をすませた後、わずかの間も離れてはならないと彼女のそばに腰をかけていました。その時に果物の皮をむいていると、誤まって自分の指に深く切り込んだのです。小さい紫色の血がすぐにほとぼしり出て、いくらかクラリモンドにもかかったかと思うと、その顔色は急に変わって、今までの彼女にかつて見たことのない野蛮な、残忍な喜びの表情を帯びて来ました。彼女は動物のような身軽さ——あたかも猿か猫のように軽く飛び降りて、わたしの傷口に飛びついて、いかにも嬉しそうな様子でその血を吸い始めたのです。

彼女は小さい口いっぱい——あたかも酒好きの人間がクセレスかシラクサの酒を味わっているように、ゆつくりと注意ぶかく飲むのです。その瞳ひとみはだんだんに半ばとじられて、緑色の眼の円い瞳孔ひとみが楕円形にかわって来ました。彼女は時どきにわたしの手に接物するた

めに、血を吸うことをやめました。さらに赤い血のにじみ出るのを待つて、傷に口唇くちびるを持つていくのでした。血がもう出ないのを知ると、彼女の眼は瑞みずみずしく輝いて、五月の夜明けよりも薔薇色になって起たち上がりました。顔の色も生きいきとして、手にも温かいようなみが出て、今までよりもさらに美しく、まったく健康体のようになっているのです。

「わたしは死なないわ、死なないわ」と、彼女は半気がいのようになって、わたしの頸くびにかじりついて叫びました。

「わたしはまだ長い間あなたを愛することが出来るわ。わたしの生命いのちはあなたのものです。わたしのからだはすべてあなたから貰ったのです。あなたの尊い、高価な、この世界にあるどの霊薬よりも優れて高価な血のいく滴が、わたしの生命を元の通りにくれたのですわ」

この光景は永く私をおびやかして、クラリモンドについては不思議な疑問を起こさせました。その夜、わたしが寢床にはいると、睡眠は私を誘い出して、むかしの司祭館に連れ戻しました。わたしはセラピオン師が今までよりもいつそう厳肅な不安らしい顔をしているのを見ました。彼は私をじつと見つめていましたが、やがて悲しそうに叫びました。

「あなたは魂を失うばかりではない、今はその身をも失おうとしている。墮落した若い人は、実に恐ろしいことになっている」

その言葉の調子は私を強く動かししました。しかしその時の印象がまざまざとじていたにも

かかわらず、それもすぐに私から消えていって、ほかのさまざまなかえも皆わたしの心から去ってしまいました。

六

とうとうある晩のことでした。わたしが鏡を見ていると、その鏡に彼女の姿が映っていることを覚きこらずに、クラリモンドはいつも二人の食卓のあとで使うことにしている、薬味やくみを入れた葡萄酒の盃のなかに、何かの粉を入れているのです。それが鏡に映ったので、わたしは盃を手にとつて、口のところに持つてゆく真似をして、そばにある器物の上に置きました。彼女がうしろを向いたときに、私はその盃のものをテーブルの下にそつとこぼして、それから自分の部屋に帰つて寢床についたのですが、今夜はけつして睡るまい、そうして、このすべて不思議なことについて何かの発見をしようと決心しました。

間もなくクラリモンドは夜の服を着てはいつて来ましたが、服をぬぐとわたしの寢台に這い上がつて来て、私のそばに横になりました。彼女はわたしが寝ていることを確かめると、やがてわたしの腕をまくりました。そうして、髪から黄金のピンを抜き取ると、低い声で言いました。

「一滴……ほんの一滴よ。この針のさきへ紅玉ルビーほど……あなたがまだ愛して下さるなら、わたしは死んではならないわ。……ああ、悲しい恋……。あなたの美しい、紫色の輝いた血をわたしは飲まなければならぬ。お寝やすみなさい、わたしの貴い宝……。お寝みなさい、わた

しの神様、わたしの坊ちゃん……。わたしはあなたに悪いことをするのではないのよ。わたしは永久に失くならないように、あなたの生命を吸わなければならぬのよ。わたしはあなたをたいへんに愛していたので、ほかの恋びとの血を吸うことに決めていたの。しかし、あなたを知ってからは、ほかの人たちは忌になつたわ……。ああ、綺麗な腕……。なんとという円い、なんとという白い腕でしょう。どうしたらこんな綺麗な青い血管が刺せるでしょう」

彼女は独りごとを言いながらさめざめと泣くのです。わたしはその涙がわたしの腕を濡らすのを覚え、彼女がその手でしがみつくのを感じました。そのうちに彼女はとうとう決心して、ピンでわたしの腕を軽く刺して、そこから滲み出る血を吸いはじめました。二、三滴しか飲まないのに、彼女はもうわたしが眼を醒ますのを怖れて、傷口をこすって膏薬を貼つて、注意深くわたしの腕に小さい繃帯を巻きつけたので、その痛みはすぐに去りました。

もう疑う余地はなくなりました。セラピオンの言葉は間違つてはいませんでした。この明らかかな事実を知つたにもかかわらず、わたしはまだクラリモンドを愛さずにはいられませんでした。私はみずから進んで、彼女の不自然な健康を保持させるために、欲しがらだけ生き血をあたええました。そうしてまた、彼女を恐れてもいませんでした。彼女も自分を吸血鬼ヴァンパイアと思つてくれるなど歎願するようでした。わたしも今まで見聞したところによつて、さらにそれを疑いませんでしたので、一滴ずつの血をそれほど惜しくも思いませんでした。私はむしろ自分から腕の血管をひらいて、「さあ、飲むがいい。わたしの愛がわたしの血と一

緒におまえの血に沁み込んでゆけば何よりだ」と言ったのです。それでも私は、彼女に麻醉するほど飲ませたり、またはピンを刺させたりすることは、常に注意して避けていたので、二人はまったく調和した生活を保っていたのです。

それでも僧侶として、わたしの良心の呵責かじやくは今まで以上にわたしを苦しめ始めました。わたしはいかなる方法で自分の肉体を抑制し、浄化することが出来るかについて、まったく途方とほうに暮れたのです。かの多くの幻覚が無意識の間に起こったにもせよ、直接に私がそれを行なわなかつたにもせよ、それが夢であるにせよ、事実であるにせよ、かくのごとき淫蕩よびに汚れた心と汚れたる手をもって、クリストの身に触れることは出来ませんでした。

わたしはこの不快な幻覚に誘われない手段として、睡眠におちいらぬことに努めました。わたしは指で自分の眼瞼まぶたをおさえ、壁にまっすぐに倚よりかかつて何時間も立ちつづけ、出来る限り睡気ねむけと闘いました。しかし睡気は相変わらずわたしの眼を襲つて来て我慢がつかず、絶望的な不快のうちに両腕はおのずとおろされて、睡りの波は再びわたしを不誠実の岸へ運んでゆくのでした。

セラピオン師は最もはげしい訓告をあたえて、わたしの柔弱と、熱意の不足をきびしく責めました。ついにある日、わたしが例よりも更に悩んでいる時に、彼は言いました。

「あなたがこの絶えざる苦悩から逃がれ得るただひとつの道は、非常手段によらなければなりません。大いなる病苦おほは大いなる療治を要する。わたしはクラリモンドが埋められている

場所を知っている。わたしたちは彼女の亡骸なきがらを発掘して見る必要がある。そうして、あなたの愛人がどんな憐れな姿をしているかをご覧なさい。さすれば、あの虫ぼんだ不浄の死体——土になるばかりになっていく死体のために、あなたの魂を失うようなことはありませんまい。かならずあなたを元へ引き戻すに相違ないと思います」

わたしとしても、たとい一時は満足したとはいえ、二重の生活にはもうあきました。自分は空想の犠牲になっている紳士であるか、または僧侶であるか、ということをはっきり確かめたいと思いました。わたしは自分のうちにあるこの二人に対して、どちらかを殺して他を生かすか、あるいは両方ともに殺すか、とても現在の恐ろしい状態には長く堪えられないと決心したのであります。

セラピオン師は鶴嘴つるはしと槌てこと、提灯とを用意して来ました。そうして夜なかに、わたしたちは——墓道を進みました。その付近や墓場の勝手を僧院長はよく心得ていました。たくさん墓の碑銘をほの暗い提灯に照らし見た末に、二人は長い雑草にかくされて、苔こけがむして、寄生植物の生えている石板のあるところに行き着きました。碑銘の前文を判読すると、こうありました。

ここにクラリモンド埋めらる

在りし日に

最も美しき女として聞こえありし。

「ここに相違ない」と、セラピオン師はつぶやきながら提灯を地面におろしました。

彼は梃を石板の端から下へ押し入れて、それをもたげ始めました。石があげられると、さらに鶴嘴で掘りました。夜よりも暗い沈黙のうちに、わたしは彼のなすがままに眺めていると、彼は暗い仕事の上に身をかがめて、汗を流して掘っています。彼は死に瀕した人のように、絶えだえの呼吸いそぎをはずませています。実に怪しい物すごい光景で、もし人にこれを見せたらば、確かに神に仕うる僧侶とは思われず、何か流けがれたる悪漢わるものか、屍衣しいの盗人ぬすびとと、思い違えられたであろうと察せられました。

熱心なセラピオン師の嚴峻と乱暴とは、使徒とか天使とかいうよりも、むしろ一種の悪魔のふうがありました。その驚のような顔を始めとして、すべて嚴酷な相貌そうぼうが灯のひかりにいつそう強められて、この場合における不愉快な想像力をいよいよ高めました。わたしの額には氷のような汗が大きいしずくとなつて流れ、髪の毛は怖ろしさに逆立ちました。苛酷なセラピオン師は実に悪にくむべき流神とくしんの行為を働いているように感じられ、われわれの上に重く渦巻いている黒雲のうちから雷火がひらめき来たつて、彼を灰にしてしまえと、わたしは心ひそかに祈りました。

糸杉サイプレスの梢に巢をくむ梟ふくろうは灯の光りにおどろいて飛び立ち、灰色のつばさを提灯のガラスに打ち当てながら悲しく叫びます。野狐も闇のなかに遠く啼ないています。そのほかにも数知れない無気味な音がこの沈黙しじまのうちに響いて来ました。最後にセラピオン師の鶴嘴が棺を撃つ

と、棺は激しい音を立てました。彼はそれをねじ廻して、蓋ふたを引きのけました。さてかのクラリモンドは——と見ると、彼女は大理石像のような青白い姿で、両手を組みあわせ、頭から足へかけて白い屍衣しい一枚をかけてあるだけでした。彼女の色もない口の片はしに、小さい真つ紅な一滴が露のように光っていました。セラピオン師はそれを見ると、大いに怒りを発しました。

「おお、悪魔がここにいる。汚けがれたる娼婦！ 血と黄金こがねを吸うやつ！」

それから彼は死骸と棺の上に聖水をふりかけて、その上に聖水の刷毛はけをもつて十字を切りました。哀れなるクラリモンド——彼女は聖水のしぶきが振りかかるやいなや、美しい五体は土となつて、ただの灰と、なかば石灰に化した骨と、ほとんど形もないような塊かたまりになつてしまいました。

冷静なセラピオン師は、いたましい死灰を指さして叫びました。

「ロミューオー卿、あなたの情人をご覧なさい。こうなつても、あなたはまだこの美人とともに、リドの河畔やフジナを散歩しますか」

わたしは両手で顔をおおつて、大いなる破滅の感に打たれました。わたしは司祭館に帰りました。

クラリモンドの愛人として身分の高いロミューオー卿は、長いあいだ不思議な道連れであつた僧侶の身から離れてしまったのです。しかもただ一度、それは前の墓ほり事件の翌晩でし

だが、わたしはクラリモンドの姿を見ました。彼女は初めて教会の入り口でわたしに言ったと同じことを言いました。

「不幸なかと、ほんとうに不幸なかと……。どうしてあなたは、あんな馬鹿な坊さんの言うことを肯ききなすつたのです。あなたは不幸でありませんか。わたしのみじめな墓を侮辱されたり、うつろな物をさらけ出されたりするような悪いことを、わたしはあなたに仕向けたでしょう。あなたとわたしとの間の靈魂や肉体の交通は、もう永遠に破壊されてしまいました。さようなら。あなたはきつと私のことを後悔なさるでしょう」

彼女は煙りのように消えて、二度とその姿を見せませんでした。

ああ、彼女の言葉は真実となりました。わたしは彼女のことをいくたび歎なげいたか分かりません。いまだに彼女のことを後悔しています。わたしの心はそのご落ちついて来ましたが、神様の愛も彼女の愛に換えるほどに大きくはありませんでした。

皆さん。これはわたしの若い時の話です。けっして女を見るものではありません。戸外そとを歩く時は、いつでも地の上に眼をしつかりと据えて歩かなければなりません。どんなに清く注意ぶかく自分を保つていても、一瞬間のあやまちが永遠に取りかえしのつかないことになつてしまうものです。

信号手

ディッケンズ

Charles Dickens

(1812-1870、英)

一八一二年二月七日、英国ポートシに生まる。

十九世紀における英国第一の小説家。

晩年ステープルハーストにおける鉄道事故のために負傷し、

爾来いちじるしく健康を害し、

それより5年後の一八七〇年六月九日逝く。

死ぬるの日までペンを措かざりしと伝えられる。

「おうい、下にいる人！」

わたしがこう呼んだ声を聞いたとき、信号手は短い棒に巻いた旗を持ったままで、あたかも信号所の小屋の前に立っていた。この土地の勝手を知っていれば、この声のきこえた方角を聞き誤まりそうにも思えないのであるが、彼は自分の頭のすぐ上の嶮しい断崖の上に立っている私を見あげもせずに、あたりを見まわして更に線路の上を見おろしていた。

その振り向いた様子が、どういう訳であるか知らないが少しく変わっていた。実をいうと、わたしは高いところから烈しい夕日にむかって、手をかざしながら彼を見ていたので、深い溝に影を落としている信号手の姿はよく分からなかったのであるが、ともかくも彼の振り向いた様子は確かにおかしく思われたのである。

「おうい、下にいる人！」

彼は線路の方角から振り向いて、ふたたびあたりを見まわして、初めて頭の上の高いところにいる私のすがたを見た。

「どこか降りる所はありませんかね。君のところへ行って話したいのだが……」

彼は返事もせずにただ見上げているのである。わたしも執拗く二度とは聞きもせずに見おろしていると、あたかもその時である。最初は漠然とした大地と空気との動揺が、やがて激しい震動に変わってきた。わたしは思わず引き倒されそうになって、あわてて後ずしりをす

ると、急速力の列車があたかも私の高さに蒸気をふいて、遠い景色のなかへ消えて行つた。ふたたび見おろすと、かの信号手は列車通過の際に揚げていた信号旗を再び巻いているのが見えた。わたしは重ねて訊いてみると、彼はしばらく私をじつと見つめていたが、やがて巻いてしまつた旗をかざして、わたしの立つている高い所から二、三百ヤードの遠い方角を指し示した。

「ありがとう」

私はそう言つて、示された方角にむかつて周囲を見廻すと、そこには高低のはげしい小径があつたので、まずそこを降りて行つた。断崖はかなりに高いので、ややもすれば真つ逆さまに落ちそうである。その上に湿りがちの岩石ばかりで、踏みしめるたびに水が滲み出して滑りそうになる。そんなわけで、わたしは彼の教えてくれた道をたどるのがまつたく忌になつてしまつた。

私がこの難儀な小径を降りて、低い所に来た時には、信号手はいま列車が通過したばかりの軌道の間に立ちどまつて、私が出てくるのを待つていらしかつた。

信号手は腕を組むような格好をして、左の手で顎を支え、その脇を右の手の上に休めていたが、その態度はなにか期待しているような、また深く注意しているようなふうにみえたので、わたしも怪訝に思つてちよつと立ちどまつた。

わたしは再びくだつて、ようやく線路とおなじ低さの場所までたどり着いて、はじめて彼

に近づいた。見ると、彼は薄黒い髭ひげを生やして、睫毛まつげの深い陰鬱な青白い顔の男であつた。その上に、ここは私が前に見たよりも荒涼陰惨というべき場所で、両側には峨峨ががたる湿しめつぽい岩石ばかりがあらゆる景色をさえぎつて、わずかに大空を仰ぎ観るのである。一方に見えるのは、大いなる牢獄としか思われない曲がりくねつた岩道の延長があるのみで、他の一方は暗い赤い灯のあるところで限られた、そこには暗黒なトンネルのいつそう暗い入り口がある。その重苦しいような畳み石は、なんとなく粗野そやで、しかも人を圧するような、堪たえられない感じがする上に、日光はほとんどここへ映さし込まず、土臭い有毒らしい匂いがそこらにただよつて、どこからともなしに吹いて来る冷たい風が身に沁みわたつた。私はこの世にいるような気がしなくなつた。

彼が身動きをする前に、私はそのからだに触ふれるほどに近づいたが、彼はやはり私を見つめている眼を離さないで、わずかにひと足あとずさりをして、挨拶の手を挙げたばかりであつた。前にもいう通り、ここはまったく寂しい場所で、それが向こうから見たときにも私の注意をひいたのである。おそらくたずねて来る人は稀であるらしく、また稀に来る人をあまり歓迎もしないらしく見えた。

わたしから観ると、彼は私が長い間どこかの狭い限られた所にとじこめられていて、それが初めて自由の身となつて、鉄道事業といったような重大なる仕事に対して、新たに眼ざめたる興味を感じて来た人間であると思つてゐるらしい。私もそういうつもりで彼に話しかけ

たのであるが、実際はそんなこととは大違いになって、むしろ彼と会話を開かない方が仕合わせであったどころか、更に何か私をおびやかすようなものがあつた。

彼はトンネルの入り口の赤い灯の方を不思議そうに見つめて、何か見失つたかのように周囲を見まわしていたが、やがて私の方へ向き直つた。あの灯は彼が仕事の一部であるらしく思われた。

「あなたはご存じありませんか」と、彼は低い声で言つた。

その動かない二つの眼と、その幽暗な顔つきを見た時に、彼は人間ではなく、あるいは幽霊ではないかという怪しい考えが私の胸に浮かんできたので、私はそのご絶えず彼のこころに感受性を持つかどうかを注意するようになった。

私はひと足さがつた。そうして、彼がひそかに私を恐れている眼色を探り出した。これで彼を怪しむ考えもおのずと消えたのである。

「君はなんだか私を怖こわそうに眺めていますね」と、私はしいて微笑ほほえみながら言つた。

「どうもあなたを以前に見たことがあるようですが……」と、彼は答えた。

「どこで……」

彼はさきに見つめていた赤い灯を指さした。

「あそこで……？」と、わたしは訊いた。

彼は非常に注意ぶかく私を打ちまもりながら、音もないほどの低い声で「はい」と答えた。

「冗談じゃあない。私がどうしてあんなところに行っているものですか。かりに行くことがあるとしても、今はけつしてあすこにいなかつたのです。そんなはずはありませんよ」

「わたしもそう思います。はい、確かにおいでにならないとは思いますが……」

彼の態度は、わたしと同じようにはつきりしていた。彼は私の問いに対して正確に答え、よく考えてものを言っているのである。彼はここでどのくらいの仕事をしているかといえば、彼は大いに責任のある仕事をしているといわなければならない。まず第一に、正確であること、注意ぶかくあることが、何よりも必要であり、また実務的の仕事という点からみても、彼に及ぶものはないのである。信号を変えるのも、燈火あかりを照らすのも、転轍てんでつのハンドルをまわすのも、みな彼自身の頭脳の働きによらなければならない。

こんなことをして、彼はここに長い寂しい時間を送っているように見えるが、彼としては自分の生活の習慣が自然にそういう形式をつくつて、いつのまにかそれに慣れてしまったというのほかはあるまい。こんな谷のようところで、彼は自分の言葉を習つたのである。単にもものを見ただけで、それを粗雑ながらも言葉に移したのであるから、習つたといえはいえないこともないかも知れない。そのほかに分数や小数を習い、代数も少し習つたが、その文字などは子供が書いたように拙ますいものである。

いかに職務であるとはいえ、こんな谷間の湿しめっぽい所にいつでも残っていないければならぬのか。そうして、この高い石壁のあいだから日光を仰ぎに出ることは出来ないものか。そ

これは時間と事情が許さないのである。ある場合には、線路の上にいるよりも他の場所にいることもないではなかったが、夜と昼とのうちで、ある時間だけはやはり働かなければならぬのである。天気の良い日に、ある機会をみて少しく高い所へ登ろうと企てることもあるが、いつも電気ベルに呼ばれて、幾倍の心配をもつてそれに耳を傾けなければならぬことになる。そんなわけで、彼が救われる時間は私の想像以上に少ないのであった。

彼は私を自分の小屋へ誘つていった。そこには火もあり、机の上には何か記入しなければならぬ職務上の帳簿や指針盤しんばんの付いている電信機や、それから彼がさきに話した小さい電気ベルがあつた。わたしの観るところによれば、彼は相当の教育を受けた人であるらしい。少なくとも彼の地位以上の教育を受けた人物であると思われるが、彼は多数のなかにたまたま少しく伶俐りしやうな者がいても、そんな人間は必要でないと言つた。そういうことは工場の中にも、警察官の中にも、軍人の中にもしばしば聞くことで、どこの鉄道局のなかにも多少は免まぬかれないことであると、彼はまた言つた。

彼は若いころ、学生として自然哲学を勉強して、その講義にも出席しているが、中途から乱暴を始めて、世に出る機会をうしなつて、次第に零落して、ついにふたたび頭をもたげることが出来なくなつた。ただし、彼はそれについて不満があるでもなかつた。すべてが自業自得じしやうじとくで、これから方向を転換するには、時すでに遅しというわけであつた。

かいつまんで言えばこれだけのことを、彼はその深い眼で私と火とを見くらべながら静か

に話した。彼は会話のあいだに時どきに貴下サという敬語を用いた。殊モトに自分の青年時代を語るときに多く用いていたのは、わたしが想像していた通り、彼が相当の教育を受けた男であることを思わせたのである。

こうして話している間にも、彼はしばしば小さいベルの鳴るのに妨げられた。彼は通信を讀んだり、返信を送ったりしていた。またある時はドアの外へ出て、列車が通過の際に信号旗を示し、あるいは機関手にむかつて何か口で通報していた。彼が職務を執るときは非常に正確で注意ぶかく、たとい談話の最中でもはつきりと区切りをつけ、その目前の仕事を終わるまではけつして口をきかないというふうであった。

ひと口にいえば、彼はこういう仕事をする人としては、その資格において十分に安心のできる人物であるが、ただ不思議に感じられたのはある場合に——それは彼が私と話している最中であつたが、彼は二度も会話を中止して、鳴りもしないベルの方に向き直つて、顔の色を変えていたことであつた。彼はそのとき、戸外のしめった空気を防ぐためにとじてあるドアをあけて、トンネルの入り口に近い、かの赤い灯を眺めていた。この二つの出来事ののち、彼はなんとも説明し難い顔つきをして、火のほとりに戻つて来たが、そのあいだに別に変わったこともないらしかつた。

彼に別れて起たち上がるときに、私は言った。

「君はすこぶる満足のように見うけられますね」

「そうだとはい信じていますが……」と、彼は今までにないような低い声で付け加えた。「しかし私は困っているのです。実際、困っているのです」

「なんで……。何を困っているのです」

「それがなかなか説明できないのです。それが実に……。実にお話しのしようがないので……。またおいでになった時にでもお話し申しましょう」

「わたしも、また来てもいいのですが……。いつごろがいいのです」

「わたしは朝早くここを立ち去ります。そうして、あしたの晩の十時には、またここにいます」

「では十一時ごろに来ましょう」

「どうぞ……」と、彼は私と一緒に外へ出た。そうして、極めて低い声で言った。

「路みちのわかるまで私の白い燈火あかりを見せましょう。路がわかって、声を出さないで下さい。上へ行き着いた時にも呼ばないで下さい」

その様子がいよいよ私を薄気味わるく思わせたが、私は別になんにも言わずに、ただ、はいはいと答えておいた。

「あしたの晩おいでの時にも呼ばないで下さい。それから少しおたずね申しますが、どうしてあなたは今夜おいでの時に「おうい、下にいる人！」と、お呼びになったのです」

「え。私がそんなようなことを言ったかな」

「そんなようなことじゃありません。あの声は私がよく聞くのです」

「私がそう言ったとしたら、それは君が下の方にいたからですよ」

「ほかに理由はないのですな」

「ほかに理由があるものですか」

「なにか、超自然的の力が、あなたにそう言わせたようにお思いにはなりませんか」

「いいえ」

彼は「さようなら」という代りに、持っている白い燈火をかかげた。

私はあとから列車が追いかけて来るような不安な心持ちで、下り列車の線路のわきを通つて自分の路を見つけた。その路はさきに下つて来たときよりも容易に登ることが出来たので、さしたる冒険もなしに私の宿へ帰つた。

約束の時間を正確に守つて、わたしは次の夜、ふたたびかの高低のひどい坂路に足をむけた。遠い所では、時計が十一時を打つていた。彼は白い燈火を掲げながら、例の低い場所に立つて私を待つていた。わたしは彼のそばへ寄つた時に訊きいた。

「わたしは呼ばなかったが……。もう話してもいいのですか」

「よろしいですとも……。今晚は……」と、彼はその手をさし出した。

「今晚は……」と、わたしも手をさし出して挨拶した。それから二人はいつもの小屋へはいつ

てドアをしめて、火のほとりに腰をおろした。

椅子に着くやいなや、彼はからだを前にかがめて、ささやくような低い声で言った。

「わたしが困っているということについて、あなたが重ねておいでになろうとは思っていませんでした。実は昨晩は、あなたをほかの者だと思っていたのですが……。それが私を困らせるのです」

「それは思い違いですよ」

「もちろん、あなたではない。そのある者が私を困らせるので……」

「それは誰です」

「知りません」

「わたしに似ているのですか」

「わかりません。私はまだその顔を見たことはないのです、左の腕を顔にあてて、右の手を振って……。激しく振って……。こんなふうには……」

わたしは彼の動作を見つめていると、それは激しい感情を苛立たせているような腕の働き方で、彼は「どうぞ退いてくれ」と叫ぶように言った。そうして、また話し出した。

「月の明かるい、ある晩のことでした。私がここに腰をかけているとへおうい、下にいる人！とつぶ声を聞いたのです。私はすぐに起つて、そのドアの口から見ると、トンネルの入り口の赤い灯のそばに立って、今お目にかけてたように手を振っている者がある。その声は叫ぶよ

うな唸るうなような声で「見ろ、見ろ」という。つづいてまた「おうい、下にいる人！ 見ろ、見ろ」という。わたしは自分のランプを赤に直して、その者の呼ぶ方角へ駈けて行って「どうかしましたか、何か出来しゅつたしましたか。いったいどこです」とたずねると、その者はトンネルの暗やみのすぐ前に立っているのです。私はさらに近寄ってみると、不思議なことには、その者は袖を自分の眼の前にあてている。私はまっすぐに進んで行って、その袖を引きのけてやろうと手をのばすと、もうその形は見えなくなってしまったのです」

「トンネルの中へでもはいったかな」と、わたしは言った。

「そうではありません。私はトンネルの中へ五百ヤードも駈け込んで、わたしの頭の上にランプをさしあげると、前に見えたその者の影がまた同じ距離に見えるのです。そうして、トンネルの壁をぬらしている雫しずくが上からぽたぽたと落ちていきます。わたしは職務という觀念があるので、初めよりも更にはや速い速度でそこを駈け出して、自分の赤ランプでトンネルの入り口の赤い灯のまわりを見まわしたのち、その赤い灯の鉄梯子をつたって、頂上の展望台に登りました。それからまた降りて来て、そこまで駈けて戻りましたが、どうも気になるので、上り線と下り線とに電信を打って「警戒の報知が来た。何か事故が起こったのか」と問い合わせると、どちらからも同じ返事が来て「故障なし」……」

この話を聞かされて、なんだか背骨がぞつとするような心持ちになったが、私はそれを堪こらえながら、そんなあやしい人影などはなにかの視覚のあやまりである。あらぬものの影を見

たりするのは神経作用から起こるもので、病人などにはしばしばその例を見ることがあると話して聞かせた。また、そんな人びとのうちには、そういう苦悩を自覚し、それを自分で実験している人さえあるということをも話した。

「その叫び声というのも……」と、わたしは言った。「まあ、すこしのあいだ聴いていてご覧なさい。こんな不自然な谷間のような場所では、われわれが小さい声で話している時に、電信線が風にうなるのを聞くと、まるで豎琴たてこじを乱暴に鳴らしているように響きますからね」

彼はそれに逆さからわなかつた。二人はしばらく耳をかたむけていると、風と電線との音が実際に怪しくきこえるのであつた。彼も幾年のあいだ、ここに長い冬の夜を過ごして、ただひとりで寂しくそれを聴いていたのである。しかも彼は、自分の話はまだそれだけではないと言つた。

わたしは中途で口をいれたのを謝して、更にそのあとを聴こうとすると、彼は私の腕に手をかけながら、またしずかに話し出した。

「その影があらわれてから六時間ののちに、この線路の上に怖ろしい事件が起こつたのです。そうして十時間ののちには、死人と重症者がトンネルの中から運ばれて、ちょうどその影のあらわれた場所へ来たのです」

わたしは不気味な戦慄を感じたが、つとめてそれを押しこらえた。この出来事はさすがに嘘うそであるとはいえない。まったく驚くべき暗合あんごうで、彼のこころに強い印象を残したのも無理

はない。しかも、かくのごとき驚くべき暗合がつづいて起こるといふのは、必ずしも疑うべきことではなく、こういう場合も往々おうおうにあり得るといふことを勘定のうちに入れておかなければならない。もちろん、世間多数の常識論者は、とかく人生の上に生ずる暗合を信じないものではあるが――

彼の話は、まだそれだけではないというのである。私はその談話をさまたげたことを再び詫びた。

「これは一年前のことですが……」と、彼は私の腕に手をかけて、うつろな眼で自分の肩を見おろしながら言った。「それから六、七カ月を過ぎて、私はもう以前の驚きや怖ろしさを忘れた時分でした。ある朝……夜の明けかかるころに、わたしがドアの口に立って、赤い灯の方をなに心なく眺めると、またあの怪しい物が見えたのです」

ここまで話すと、彼は句を切って、私をじつと見つめた。

「それがなんとか呼びましたか」

「いえ、黙っていました」

「手を振りませんでしたか」

「振りません。燈火あかりの柱よに倚りかかって、こんなふうあかりに両手を顔に当てているのです」

わたしは重ねて彼の仕科しぐさを見たが、それは私がかつて墓場で見た石像の姿をそのままであつた。

「そこへ行つて見ましたか」

「いえ、私は内へはいつて、腰をおろして、自分の気を落ちつけようと思ひました。それがために私はいくらか弱つてしまつたからです。それから再び外へ出てみると、もう日光が映さしていて、幽霊はどこへか消え失せてしまいました」

「それから何事も起こりませんでしたか」

彼は指のさきで私の腕を二、三度押した。その都度つどに、彼は怖ろしうなずいたのである。

「その日に、列車がトンネルから出て来たとき、私の立っている側の列車の窓で、人の頭や手がごつちやに出て、何かしきりに、振つてゐるように見えたので、わたしは早速さつそくに機関手にむかつて、停止ストップの信号をしました。機関手は運転を停とめてブレーキをかけました。列車は五百ヤードほど行き過ぎたのです。私がすぐに駈けてゆくと、そのあいだに怖ろしい叫び声を聞きました。美しい若い女が列車の貸切室のなかで突然に死んだのです。その女はこの小屋へ運び込まれて、ちようどあなたと私とが向かい合つてゐる、ここところの処へ寝かしました」

彼がそう言つて指さした場所を見おろしたとき、わたしは思はず自分の椅子をうしろへ押しやつた。

「ほんとうです。まつたくです。私が今お話をした通りです」

私はなんとも言えなくなつた。私の口は乾き切つてしまつた。外ではこの物語に誘われて、

風や電線が長い悲しい唸り声を立てていた。

「まあ、聴いてください」と、彼はつづけた。「そうして、私がどんなに困っているか、お察しください。その幽霊が一週間前にまた出て来ました。それからつづいて、気まぐれのように時どきに現われるのです」

「あの灯のところは……？」

「あの危険信号燈のところなんです」

「どうしているように見えますか」

彼は激しい恐怖と戦慄を増したような風情で「どうか退どいてくれ！」と言うらしい仕しぐさ科かをして見せた。そうして、さらに話しつづけた。

「私はもうそれがために平和も安息も得られないのです。あの幽霊はなんだか苦しそうなふうをして、何分間もつづけて私を呼ぶのです。……〈下したにいる人！ 見ろ、見ろ〉……そうして、私を差し招くのです。そうして、その小さいベルを鳴らすのです」

私はそれを引き取って言った。

「では、私がゆうべ来ていたときに、そのベルが鳴ったのですか。君はそれがために戸のところへ出て行ったのですか」

「そうです。二度も鳴ったのです」

「どうもおかしいな」と、私は言った。「その想像は間違っているようですね。あのとき私の

眼はベルの方を見ていて、私の耳はベルの方に向いていたのだから、私のからだに異状がない限りは、あのときにベルは一度も鳴らないと思いますよ。あのとき以外にも鳴りませんでした。もつとも、君が停車場と通信をしていたときは別だが……」

彼はかしらをふった。

「わたしは今までベルを聞き誤ったことは一度もありません。わたしは幽霊が鳴らすベルと、人間が鳴らすベルとを混同したことはありません。幽霊の鳴らすベルは、なんともいえない一種異様のひびきで、そのベルは人の眼にみえるように動くのではないのです。それがあなたの耳には聞こえなかったかも知れませんが、私には聞こえたのです」

「では、あのときに外を見たら、怪しい物がいたようでしたか」

「あすこにいました」

「二度ながら……?」

「二度ながら……」と、彼ははつきりと言いつつ切った。

「では、これから一緒に出て行って見ようじゃありませんか」

彼は下くちびるを噛みしめて、あまり行きたくない様子であったが、それでも故障なしに立ちあがった。私はドアをあけて階段に立つと、彼は入り口に立った。そこには危険信号燈が見える。暗いトンネルの入り口がみえる。ぬれた岩の高い断崖がみえる。その上にはいくつかの星がかがやいていた。

「見えますか」と、私は彼の顔に特別の注意を払いながら訊いた。

彼の眼は大きく——それはおそらくそこを見渡したときの私の眼ほどではなかったかもしれないが——緊張したように輝いていた。

「いえ、いません」

「わたしにも見えない」

二人は再びうちにはいつて、ドアをしめて椅子にかかった。私はいまこの機会をいかによく利用しようかということを考えていたのである。たとい何か彼を呼ぶものがあるとしても、ほとんど真面目に論議するにも足らないような事実を楯にとつて、彼がそれを当然のことのように主張する場合には、なんと行ってそれを説き導いてよかろうか。そうになると、わたしははなはだ困難な立場にあると思つたからである。

「これで、私がどんなに困っているかということが、あなたにもよくお分かりになつたらうと思ひますが、いつたいなんであの幽霊が出るのでしょうか」

私は彼に対して、自分はまだ十分に理解したとは言いかねると答えると、彼はその眼を爐の火に落として、時どきに私の方をみかえりながら、沈みがちに言った。

「なんの知らせでしょうか。どんな変事が起こるのでしょうか。その変事はどこに起こるのでしょうか。線路の上のどこかに危険がひそんでいて、おそるべき禍わざわいが起こるのでしょう。いままでのことを考えると、今度は三度目です。しかし、これはたしかに私を残酷に苦しめ

るといふものです。どうしたらいいでしょうか」

彼はハンカチーフを取り出して、その熱いひたいからしたたる汗を拭いた。そうして、さらに手のひらを拭きながら言った。

「わたしが上下線の一方か、または両方へ危険信号を発するとしても、さてその理由をいふことが出来ないのです。私はいよいよ困るばかりで、碌ろくなことにはなりません。みんなは私が気でも狂ったと思うでしょう。まずこんなことになります。……私が〈危険、警戒ヲ要ス〉という信号をすると、〈イカナル危険ナリヤ、場所ハイズコナリヤ〉という返事が来ます。それにたいして、私が〈ソレハ不明、ゼヒトモ警戒ヲ要ス〉と答えるとしたら、どうなるでしょう。結局わたしは免職になるのほかはありませんまい」

彼の悩みは見るにたえないほどであった。こんな不可解の責任のために、その生活をもくつがえすといふことは、実直な人間にとつて精神的苦痛に相違なかつた。彼は黒い髪をうしろへ押しやつて、極度の苦悩にこめかみをこすりながら言いつづけた。

「その怪しい影が初めて危険信号燈の下に立った時に、どこに事件が起こるかといふことを、なぜ私に教えてくれないのでしょうか。それがどうしても起こるのなら……。そうしてまた、それが避けられるものならば、どうしたらそれを避けられるかといふことを、なぜ私に話してくれないのでしょうか。二度目に来た時には顔を隠していましたが、なぜその代りにへ女が死ぬ、外へ出すな」と言わないのでしょうか。前の二度の場合は、その予報が事実となつて現

われることを示して、私に三度目の用意をしろと言うにとどまるならば、なぜもつとはつきりと私に説明してくれないのでしょうか。悲しいかな、私はこの寂寥せきりょうたるステーションにある一個の哀れなる信号手に過ぎないのです。彼はなぜ私以上に信用もあり実力もある人のところへ行かないのでしょうか」

このありさまを見た時に、私はこの気の毒な男のために、また二つには公衆の安全のために、自分としてはこの場合、つとめて彼の心を取り鎮めるように仕向けなければならぬと思つた。そこで私は、それが事実であるかないかというような問題を別にして、誰でもその義務をまつとうするほどの人は、せいぜいその仕事をよくしなければならぬということ説きすすめると、彼は怪しい影の出現について依然その疑いを解かないまでも、自己の職責をまつとうするということについて一種の慰藉いしやを感じたらしく、この努力は彼が信じている怪談を理屈で説明してやるよりも遙かに好結果を奏したのであつた。

彼は落ちついてきた。夜の更ふけるにしたがつて、彼は自分の持ち場に偶然おこるべき事故に對して、いつそその注意を払うようになった。私は午前二時ごろに彼に別れて歸つた。朝まで一緒にとどまっていようと云つたのであるが、彼はそれには及ばないと断つたのである。

わたしは坂路を登るときに、いくたびか、あの赤い灯をふり返つて見た。その灯はどうも心持ちがよくなかつた。もしあの下にわたしの寢床があつたとしたら、私はおそらく眠られ

ないであろう。まったくそうである。私はまた、鉄道事故と死んだ女との二つの事件についても、いい心持ちがしない。どちらもまったくそうである。しかもそれらのことよりも最も私の気にかかるのは、この打ち明け話を聴いた私の立ち場として、これをどうしたらいいかということであった。

かの信号手は相当に教育のある、注意ぶかい、丹念な確かな人間であるには相違ないが、ああいう心持ちでいた日には、それがいつまで続くやら分らない。彼の地位は低いけれども、最も重要な仕事を受け持っているのである。私もまた彼があくまでも、かの事件の探究を続けるという場合に、いつまでも一緒になって自分の暇をつぶしてはられないのである。わたしは彼が所属の会社の上役に書面をおくって、彼から聴いた顛末てんまつを通告しようかと思つたが、彼になんらの相談もしないで仲介の地位いちぢに立つことは、なんだか彼を裏切るような感じが強かつたので、私は最後に決心して、この方面で知名の熟練の医師のところへ彼を同伴して、一応いちおうその医師の意見を聴くことにした。彼の話によると、信号手の交代時間は次の日の夜に廻つて来るので、彼は日の出後一、二時間で帰つてしまつて、日没後から再び職務に就くことになつていてというので、私もひとまず帰ることにした。

次の夜は心持ちのいい晩で、わたしは遊びながら早く出た。例の断崖の頂上に近い畑路を横ぎるころには、夕日がまだまったく沈んでいなかったもので、もう一時間ばかり散歩しよ

うと私は思った。半時間行つて、半時間戻れば、信号手の小屋へ行くにはちよいどいい刻限になるのであつた。

そこで、このそぞろ歩きをつづける前に、わたしは崖のふちへ行つて、先夜初めて信号手を見た地点から何ごころなく見おろすと、私はなんとも言ひようがないようにぞつとした。トンネルの入り口に近いところで、ひとりの男が左の袖を眼そでにあてながら、熱狂的にその右の手を振つてゐるのである。

わたしを圧迫したその言い知れない恐怖は、一瞬間にして消え失せた。次の瞬間には、その男がほんとうの人間であることが分かつたのである。それから少し離れたところには、いくらかの人がむらがつていて、かの男はその群れにむかつて何かの手真似をしているのであつた。危険信号燈にはまだ灯がはいつていなかった。私はこのとき初めて見たのであるが、信号燈の柱のむこうに小さい低い小屋があつた。それは木材と脂布あぶらぬのとで作られて、やつと寝台を入れるくらいの大きさであつた。

何か変事が出来しゅつたいしたのではないか。私が信号手ひとりをそこに残して帰つたがために、何か致命的ちめいてきの災厄が起こつたのではあるまいか。だれも彼のすることを見てゐる者もなく、またそれを注意する者もなかつたがために、何かの変事が出来たのではあるまいか。

——こういう自責の念に駆かられながら、私は出来るだけ急いで坂路を降りて行つた。「何事が起こつたのです」と、私はそこらにいる人たちに訊いた。

「信号手が、けさ殺されたのです」

「この信号所の人ですか」

「そうです」

「では、わたしの知っている人ではないかしら」

「ご存じならば、お分かりになりましょう」と、一人の男が他に代つて、丁寧に脱帽して答えた。そうして、脂布のはしをあげて、「まだ顔はちつとも変わっていません」

「おお。どうしたのです、どうしてこんなことになったのです」

小屋が再びしめられると、私は人びとを交るがわるに見まわしながら訊いた。

「機関車に轢かれたのです。英国じゅうでもこの男ほど自分の仕事をよく知っている者はなかつたのですが、あるいは外線のことについていくらか暗いところがあつたと見えます。時は真つ昼間で、この男は信号燈をおろして、手にランプをさげていたのです。機関車がトンネルから出て来たときに、この男は機関車の方へ背中をむけていたものですから、たちまちに轢かれてしまいました。あの男が機関手で、今そのときの話をしているところです。おい、トム。このかたに話してあげるがいい」

粗末な黒い服を着ている男が、さきに立っていたトンネルの入り口に戻つて来て話した。

「トンネルの曲線^{カーブ}まで来たときに、そのはずれの方にあの男が立っている姿が遠眼鏡をのぞくように見えたのですが、もう速力をとめる暇^{ひま}がありません。また、あの男もよく気がつい

ていることだろうと思つていたので。ところが、あの男は汽笛をまるで聞かないらしいので、私は汽笛をやめて、精いっぱい大きい声で呼びましたが、もうその時にはあの男を轢き倒しているのです」

「なんと叫んで呼んだのです」

「下にいる人！ 見ろ、見ろ。どうぞ退どいてくれ。……と、言いました」

私はぎよつとした。

「実にどうも忌いやでしたよ。私はつづけて呼びました。もう見ているのがたまらないので、私は自分の片腕を眼にあてて、片手を最後まで振つていたのですが、やっぱり駄だ目めでした」

この物語の不思議な事情を詳細に説明するのはさておいて、終わりに臨んで私が指摘したのは、不幸なる信号手が自分をおびやかすものとして、私に話して聞かせた言葉ばかりでなく、わたし自身が「下にいる人！」と彼を呼んだ言葉や、彼が真似てみせた手振りや、それらがすべて、かの機関手の警告の言葉と動作とに暗合しているということである。

ヴィーランド夫人の 亡霊

デフォー

Daniel Defoe

(1660-1731、英)

一六五九年、英国ロンドンに生まる。

肉屋の子であるともいい、牛殺しの子であるともいう。

英国著名の作家、

その作「ロビンソン漂流記」は最も世に知らる。

一七三一年四月二十六日逝く。

この物語は事実であるとともに、理性に富んだ人たちにも、なるほどと思われるような出来事が伴っている。この物語はケント州のメイドストーン治安判事を勤めている非常に聡明な一紳士から、ここに書かれてある通りに、ロンドンにいる彼の一友人のところへ知らせたよこしたもので、しかもカンタベリーで、この物語に現われて来るバーグレーヴ夫人の二、三軒さきに住んでいる上記の判事の親戚で、冷静な理解力のある一婦人もまたこの事実を確証している。

したがって、治安判事は自分の親戚の婦人も確かに亡霊の存在を認めているものと信じ、また彼の友達にも極力この物語の全部はほんとうの事実だと断言している。そうして、その亡霊を見たというバーグレーヴ夫人自身の口から、この物語を聞いたままを治安判事に伝えたその婦人は、正直で、善良で、敬虔けいけんな一個の女性としてのバーグレーヴ夫人が、この事実談を一つの荒唐無稽こうとうむけいな物語に粉飾こなするような婦人でないことを信じているのである。

私がこの事実談をここに引用したのは、この世の私たちの人生には更にまた一つの生活があつて、そこに平等なる神は私たちが生きている間の行為にしたがつて、それに審判をなされるのであるから、私たちは自分が現世でなして来たところの過去を反省しなければならぬ。また、私たちの現世の生命は短くて、いつ死ぬか分からないが、もし不信仰の罰をまぬかれて、信仰の酬むくいとして来世における永遠の生命を把握はあくしようとするならば、今後すみや

かに悔い改めて神に帰依し、努めて悪をなさず、善をおこなおうと心がけなければならない。幸いに神が私たちに目をかけて下されて、神の御前で楽しく暮らせるような来世のために、現世において信仰の生活を導いて下さるならば、ただちに神を求めなければならぬということ、お互いに考えんがためである。

この物語は、こうした種類の出来事のうちでも非常に珍らしく、實際をいうと、私が今まで書物の上で読んだり、人から聞いたりしたことなどは、この事実談ほどに私のこころを惹かなかつた。したがって、これは好奇心に富んだ、まじめな詮索家を満足させるに十分であると思う。バーグレーヴ夫人は現在生きている人で、死んだヴィール夫人の亡霊が彼女のところに見られたのであつた。

バーグレーヴ夫人は私の親しい友達で、私が知ってから最近の十五、六年のあいだ、彼女は世間の評判のよい夫人であつたこと、また私が初めて近づきになった時でも、彼女は若い時そのままの純潔な性格の所有者であつたことを確言し得る。それにもかかわらず、この物語以来、彼女はヴィール夫人の弟の友達などから誹謗されてゐる。その人たちはこの物語を氣遣い沙汰だと思つて、極力彼女の名声を挫こうとするともに、一方には狼狽してその物語を一笑にふしてしまおうと努めている。しかも、こうした誹謗をこうむつてゐる上に、さらに不行跡な夫からは虐待されてゐるにもかかわらず、快活な性格の彼女は少しも失望の色

をみせず、また、こういう境遇の婦人にしばしば見るような、始終なにかぶつぶつ言っているような鬱症うつしやうにおちいったということもかつて聞かず、夫の蛮的行為のまっ最中でも常に快活であったということは、私をはじめ他の多数の名望ある人びとも証人に立っているのである。

さてあなたに、ヴィール夫人は三十歳ぐらゐの中年増ちゆうどしまのわりに、娘のような温和な婦人であつたが、数年前に人と談話をしているうちに突然発病して、それから瘵けいれん變的の発作に苦しめられるようになったということを知つておいてもらわなければならぬ。彼女はドーバーうちに家を持つていた、たつた一人の弟の厄介になつていた。彼女は非常に信心の厚い婦人であつた。その弟は見たところ実に落ち着いた男であつたが、今では彼はこの物語を極力打ち消している。ヴィール夫人とバーグレーヴ夫人とは子供のときからの親友であつた。

子供時分のヴィール夫人は貧しかった。彼女の父親はその日の生活に追われて、子供の面倒まで見ていられなかつた。その当時のバーグレーヴ夫人もまた同じように不親切な父親を持つていたが、ヴィール夫人のように衣食には事を欠かなかつたのである。

ヴィール夫人はよくバーグレーヴ夫人にむかつて、「あなたはいちばんいいお友達で、そうして世界にたつた一人しかなくお友達だから、どんな事があつても永久に私はあなたとの友情を失いません」と言つていた。

彼女らはしばしばお互いの不運を歎きあい、ドレリンコート（十七世紀におけるフランスの神学

者)の「死」に関する著書や、その他の書物を一緒に読み、そうしてまた、二人のキリスト教徒の友達のように、彼女らは自分たちの悲しみを慰めあっていた。

その後、彼女はヴィールという男と結婚した。ヴィールの友達は彼を周旋しゅうせんしてドーバーの税関に勤めるようにしたので、ヴィール夫人とバーグレーヴ夫人との交通は自然だんだんに疎遠になった。といつて、別に二人の間が気まづくなつたというわけではなかつたが、とにかくにその心持ちが追いおいに離れていつて、ついにバーグレーヴ夫人は二年半も彼女に逢わなかつた。もつとも、バーグレーヴ夫人はその間の十二カ月以上もドーバーにはいなかった。また最近の半年のうちで、ほとんど二カ月間カンタベリーにある自分の実家に住んでいたのであつた。

この実家で、一七〇五年九月八日の午前に、バーグレーヴ夫人はひとりで坐りながら、自分の不運な生涯を考えていた。そうして、自分のこうした逆境もみな持つて生まれた運命であると諦めあきらなければならぬと、自分で自分に言い聞かせていた。そうして彼女はこう言つた。

「私はもう前から覚悟をしているのであるから、運命にまかせて落ち着いていさえすればいいのだ。そうして、その不幸も終わるべき時には終わるであろうから、自分はそれで満足していればいいのだ」

そこで、彼女は自分の針仕事を取りあげたが、しばらくは仕事を始めようとしなかった。すると、ドアをたたく音がしたので、出て見ると、乗馬服を着けたヴィール夫人がそこに立っていた。ちようどその時に、時計は正午の十二時を打っていた。

「あら、あなた……」と、バーグレーヴ夫人は言った。「ずいぶん長くお目にかからなかったの、あなたにお逢いすることが出来ようとは、ほんとうに思いも寄りませんでした」

それからバーグレーヴ夫人は彼女に逢えたことの喜びを述べて、挨拶の接吻を申し込むと、ヴィール夫人も承諾したようで、ほとんどお互いの口唇くちびると口唇とが触れ合うまでになつたが、手で眼をこすりながら「わたしは病氣ですから」と言つて接吻をこぼんだ。彼女は旅行中であつたが、何よりもバーグレーヴ夫人に逢いたくてたまらなかつたので尋ねて来たと言つた。「まあ、あなたはどうして独り旅なぞにおいでになつたのです。あなたには優しい弟さんがおありではありませんか」

「おおー」とヴィール夫人が答えた。「わたしは弟に内証で家を飛び出して来ました。わたしは旅へ立つ前に、ぜひあなたに一度お目にかかりたかつたからです」

バーグレーヴ夫人は彼女と一緒に家うちへはいつて、一階の部屋へ案内した。

ヴィール夫人は今までバーグレーヴ夫人が掛けていた安楽椅子に腰をおろして、「ねえ、あなた。私は再び昔の友情をつづけていただきたいと思ひます。それで今までのご無沙汰ぶさたのお詫わびながらに伺つたのです。ねえ、ゆるして下さいな。やつぱりあなたは私のいちばん好き

なお友達なのですから」と、口をひらいた。

「あら、そんなことを気になさらなくつてもいいではありませんか。私はなんとも思つてはいませんから、すぐに忘れてしまいます」と、バーグレーヴ夫人は答えた。

「あなたは私をどう思つていらつしやつて……」と、ヴィール夫人は言った。

「別にどうといつて……。世間の人と同じように、あなたも幸福に暮らしていらつしやるので、私たちのことを忘れているのだらうと思つていました」と、バーグレーヴ夫人は答えた。

それからヴィール夫人はバーグレーヴ夫人にいろいろの昔話をはじめ、その当時の友情や、逆境当時に毎日まいにち取りかわしていた会話のかずかずや、たがいに読み合つた書物、特におもしろかつた「死」に関するドレリンコートの著書——彼女はこうした主題の書物では、これがいちばんいいものであると言つていた——のことなどを思い出させた。それからまた、彼女はドクトル・シャロツク（英国著名の宗教家）のことや、英訳された「死」に関するオランダの著書などについて語つた。

「しかし、ドレリンコートほど死と未来ということを明確に書いた人はありません」と言つて、彼女はバーグレーヴ夫人に何かドレリンコートの著書を持っていないかと訊きいた。

持つているとバーグレーヴ夫人が答えると、それでは持つて来てくれと彼女は言つた。

バーグレーヴ夫人はすぐに二階からそれを持つて来ると、ヴィール夫人はすぐに話し始めた。

「ねえ、バーグレーヴさん。もしも私たちの信仰の眼が肉眼のように開いていたら、私たちを守っているたくさんの天使エンジェルが見えるでしょうに……。この書物でドレリンコートも言っているように、天国というものはこの世にもあるのです。それですから、あなたも自分の不運を不運と思わずに、全能の神様が特にあなたに目をお掛け下さっているのですから、不運が自分の役目だけを済ませてしまえば、きつとあなたから去ってしまうものと信じていらつしやい。そうして、どうぞ私の言葉をも信じて下さい。あなたの今までの苦労などは、これからさきの幸福の一瞬間で永遠に酬むくわれます。神様がこんな不運な境遇にあなたの一生を終わらせるなどということは、私にはどうしても信じられません。もう今までの不運もあなたから去ってしまうか、さもなければ、あなたのほうでそれを去らせてしまうであろうと、私は確信しているのです」

こう言いながら彼女はだんだんに熱して来て、手のひらで自分の膝を叩いた。そのときの彼女の態度は純真で、ほとんど神のように尊くみえたので、バーグレーヴ夫人はしばしば涙を流したほどに深く感動した。

それからヴィール夫人はドクトル・ケンリックの「禁欲生活」の終わりに書いてある初期のキリスト信者の話をして、かれらの生活を学ぶことを勧めた。かれらキリスト信者の会話は現代人の会話と全然ちがっていたこと、すなわち現代人の会話は実に浮薄で無意味で、古代のかれらとは全然かけ離れている。かれらの言葉は教訓的であり、信仰的であったが、現代

人にはそうしたところは少しもない。私たちはかれらのしてきたようにしなければならぬ。また、かれらの間には心からの友情があったが、現代人には果たしてそれがあるかというようなことを説いた。

「ほんとうに今の世の中では、心からの友達を求めるのはむずかしいことですね」と、バーグレーヴ夫人も言った。

「ノーリスさんが円満なる友情と題する詩の美しい写本を持っていられましたが、ほんとうに立派なものだと思います。あなたはあの本をご覧になりましたか」

「いいえ。しかし私は自分で写したのを持っています」

「お持ちですか」と、ヴィール夫人は言った。「では、持っていていらつしやいな」

バーグレーヴ夫人は再び二階から持つて来て、それを読んでくれとヴィール夫人に差し出しましたが、彼女はそれを拒^{こぼ}んで、あまり俯^{うつむ}向^むいていたので頭痛がして来たから、あなたに読んでもらいたいと言うので、バーグレーヴ夫人が読んだ。こうして、この二人の夫人がその詩に歌われたる友情をたたえていた時、ヴィール夫人は「ねえ、バーグレーヴさん。私はあなたをいつまでもいつまでも愛します」と言った。その詩のうちには極楽という言葉^{ほつき}を二度も使つてあつた。

「ああ、詩人たちは天国にいろいろの名をつけていますのね」と、ヴィール夫人は言った。

そうして、彼女は時どきに眼をこすりながら言った。「あなたは私が持病^{ほつき}の発作^{ほつき}のために、

どんなにひどく体をこわしているかをご存じないでしょう」

「いいえ。私には、やっぱり以前のあなたのように見えます」と、バーグレーヴ夫人は答えた。すべてそれらの会話は、バーグレーヴ夫人がとてもその通りに思い出して言い現わすことが出来ないほど、非常にあざやかな言葉でヴィール夫人の亡霊によつて進行したのであった。(一時間と四十五分をついやした長い会話を全部おぼえていられるはずもなく、また、その長い会話の大部分はヴィール夫人の亡霊が語っているのである。)

ヴィール夫人は更にバーグレーヴ夫人にむかつて、自分の弟のところへ手紙を出して、自分の指輪は誰だれに贈つてくれ、二カ所の広い土地は彼女の従兄弟いとこのワトソンに与えてくれ、金貨の財布は彼女の私室キヤビネットにあるということを書き送つてくれと言つた。

話がだんだんに怪しくなつてきたので、バーグレーヴ夫人はヴィール夫人が例の発作におそわれているのであろうと思つた。ひよつとして椅子から床へ倒れ落ちては大変だと考えたので、彼女の膝の前にある椅子に腰をかけた。こうして、前の方を防いでいれば、安樂椅子の両側からは落ちる気づかいはないと思つたからであつた。それから彼女はヴィール夫人を慰めるつもりで、二、三度その上着の袖を持つてそれを褒めると、ヴィール夫人はこれは練絹ねりぎぬで、新調したものであると話した。しかも、こうした間にもヴィール夫人は手紙のことを繰り返して、バーグレーヴ夫人に自分の要求を拒まこぼないでくれと懇願するのみならず、機会があつたら今日の二人の会話を自分の弟に話してやつてくれとも言つた。

「ヴィールさん、私にはあまり差し出がましくて、承諾していいか悪いか分かりません。それに、私たちの会話は若い殿方とのがたの感情をどんなに害するでしょう」と、バーグレーヴ夫人は渋るように言つて、「なぜあなたご自身でおつしやらないのです。私はそのほうがずっといいと思います」と付けたした。

「いいえ」と、ヴィール夫人は答えた。「今のあなたには差し出がましいようにお思ひになるでしょうが、あとであなたにもわかる時があります」

そこで、バーグレーヴ夫人は彼女の懇願を容いれるために、ペンと紙とを取りに行こうとすると、ヴィール夫人は、「今でなくてもよろしいのです。私が帰つたあとで書いてください、きつと書いて下さい」と言つた。別れる時には彼女はなお念を押したので、バーグレーヴ夫人は彼女に固く約束したのであつた。

彼女はバーグレーヴ夫人の娘のことを尋たずねたので、娘は留守であると言つた。「しかし、もし逢つてやつて下さるならば、呼んで来ましょう」と答えると、「そうして下さい」と言うので、バーグレーヴ夫人は彼女を残しておいて、隣りの家へ娘を探しに行つた。帰つて来ると、ヴィール夫人は玄関のドアの外に立っていた。きょうは土曜日で市の開いける日であつたので、彼女はその家畜市のほうを眺めて、もう帰ろうとしているのであつた。

バーグレーヴ夫人は彼女にむかつて、なぜそんなに急ぐのかと訊たずねると、彼女はたぶん月曜日までは旅行に出られないかもしれないが、ともかくも帰らなければならぬと答えた。

そうして、旅行する前にもう一度、従兄弟いとこのワトソンの家でバーグレーヴ夫人に逢いたいと言った。それから彼女はもうお暇いとまをしますと別れを告げて歩き出したが、町の角を曲がつてその姿は見えなくなつた。それはあたかも午後一時四十五分過ぎであつた。

九月七日の正午十二時に、ヴィール夫人は持病ほつきの発作のために死んだ。その死ぬ前の四時間以上はほとんど意識がなかつた。臨床塗油式サクラメントはその間におこなわれた。

ヴィール夫人が現のどわれた次の日の日曜日に、バーグレーヴ夫人は悪感さむけがして非常に気分が悪かつた上に、喉が痛んだので、その日は終日外出することが出来なかつた。しかし、月曜の朝、彼女は船長のワトソンの家へ女中をやつて、ヴィール夫人がいるかどうかを尋ねさせると、その家の人たちはその問い合あひに驚かされて、彼女は来ていない、また来るはずにもなつていないという返事をよこした。その返事を聞いても、バーグレーヴ夫人は信じなかつた。彼女はその女中にむかつて、たぶんおまえが名前を言い違えたのか、何かの間違あやひをしたのであろうと言つた。

それから気分ずきんの悪いのを押して、彼女は頭巾をかぶつて、自分と一面識のない船長ワトソンの家へ行つて、ヴィール夫人がいるかどうかをまた尋ねた。その人たちは彼女の再度の問い合あひにいよいよ驚いて、「ヴィール夫人はこの町には来ていない、もし来ていれば、きつと自分たちの家へ来なければならぬ」と答えると、「それでも私は土曜日に二時間ほど

ヴィール夫人と一緒におりましたのですが……」と彼女は言った。

いや、そんなはずはない。もしそうだとすれば、第一自分たちがヴィール夫人に逢つていなければならぬと、たがいに押し問答をしている間に、船長のワトソンがはいつて来て、おおかた彼女が死んだので、お知らせがあつたのだらうと言つた。その言葉がバーグレーヴ夫人には妙に気がかりになつたので、早速にヴィール夫人一家の面倒を見てやつていた人のところへ手紙で聞き合わせて、初めて彼女が死んだことを知つた。

そこで、バーグレーヴ夫人はワトソンの家族の人たちに、今までの一部始終から、彼女の着ていた着物の縞柄や、しかもその着物は練絹であるといつたことまでを打ち明けて話した。すると、ワトソン夫人は「あなたがヴィールさんをご覧になつたとおっしゃるのは本当です。あの人の着物が練絹だということを知っている者は、あの人と私だけですから」と叫んだ。ワトソン夫人はバーグレーヴ夫人が彼女の着物について言つたことは、何から何まで本当であると首肯して、「私が手伝つてあの着物を縫つて上げたのです」と言つた。

そうして、ワトソン夫人は町じゅうにそのことを言いひろめながら、バーグレーヴ夫人がヴィール夫人の亡霊を見たのは事実であると、証明したので、その夫のワトソンの紹介によつて、二人の紳士がバーグレーヴ夫人の家へたずねて来て、彼女自身の口から亡霊の話を聞いて行つた。

この話がたちまち拡まると、あらゆる国の紳士、学者、分別のある人、無神論者などという

人びとが彼女の門前に市をなすように押しかけて来たので、しまいには邪魔をされないように防禦するのが彼女の仕事になってしまった。というのは、かれらはたいてい幽霊の存在ということに非常な興味を持つていた上に、バーグレーヴ夫人が全然鬱症になど罹^{かか}つていないのを目撃し、また彼女がいつも愉快そうな顔をしているので、すべての人たちから好意をむけられ、かつ尊敬されているのを見聞して、大勢の見物人は彼女自身の口からその話を聞くことが出来れば、大いなる記念にもなると思うようになったからであった。

私は前に、ヴィール夫人がバーグレーヴ夫人にむかつて、自分の妹とその夫がロンドンから自分に逢いに来ていと言つていたことを、あなたに話しておかなければならなかつた。その時にも、バーグレーヴ夫人が「なぜ今が今、そんなにいろいろのことを整理しなければならぬのですか」と訊^きくと、「でも、そうしなければならぬのですもの」と、ヴィール夫人は答えている。

果たして彼女の妹夫婦は彼女に逢いに来て、ちょうど彼女が息を引き取ろうというときに、ドーバーの町へ着いたのであった。

話はまた前に戻るが、バーグレーヴ夫人はヴィール夫人にお茶を飲むかと訊くと、彼女は「飲んででもいいのですが、あの気違い（バーグレーヴ夫人の夫をいう）が、あなたの道具をこわしてしまつたでしょうね」と言つた。そこで、バーグレーヴ夫人は「私はまだお茶を飲むぐらいの道具はあります」と答えたが、彼女はやはりそれを辞退して、「お茶などはどうでもい

いではありませんか。打っちゃっておいてください」と言ったので、そのままになつてしまつた。

私がバーグレーヴ夫人と数時間むかい合つて坐っている間、彼女はヴィール夫人の言つたうちで今までに思い出せなかつた言葉はないかと、一生懸命に考えていた結果、ただ一つ重要なことを思い出した。それはブレトン老人がヴィール夫人に毎年十ポンドずつを給与してしてくれたという秘密で、彼女自身もヴィール夫人に言われるまでは全然知らなかつた。

バーグレーヴ夫人はこの物語に手加減を加えるようなことは絶対にしなかつたが、彼女からこの物語を聞くと、亡霊の实在性を疑っている人間や、少なくとも幽霊などと馬鹿にしている連中も迷つてしまつた。ヴィール夫人が彼女の家へ訪ねて来たとき、隣りの家の召仕めしつかいはバーグレーヴ夫人が誰かと話しているのを庭越しに聞いていた。そうして、彼女はヴィール夫人と別れると、すぐに一軒置いて隣りの家へ行つて、昔の友達と夢中になつて話していたと言つて、その会話の内容までを詳しく語つて聞かせた。それから不思議なことには、この事件が起こる前に、バーグレーヴ夫人は死に関するドレリンコートの著書をちようどに買つておいた。それからまた、こういうことに注目しなければならぬ。すなわちバーグレーヴ夫人は心身ともに非常に疲れているにもかかわらず、それを我慢してこの亡霊の話をいちいちみんなに語つて聴かせても、けつして一銭も受け取ろうとはしないばかりか、彼女の娘にも人から何ひとつ貰わせないようにしていたので、この物語をしたところで彼女には

何の利益もあるはずはないのである。

しかも、亡霊の弟のヴィール氏は、極力この事件を隠蔽いんぺいしようとした。一度バーグレーヴ夫人に親しく逢つてみたいと言つていたが、彼は姉のヴィール夫人が死んだのち、船長のワトソンの家までは行つていながら、ついにバーグレーヴ夫人をおとずれなかつた。彼の友達らはバーグレーヴ夫人のことを嘘つきだと言ひ、彼女は前からブレトン氏が毎年十ポンドずつ送つて来ることを知つていたのだと言つてゐるが、私の知つてゐる名望家の間では、かえつてそんなふうに言い触らしているご本尊のほうが大嘘つきだという評判が立つてゐる。ヴィール氏はさすがに紳士であるだけに、彼女は嘘を言つてゐるとは言わないが、バーグレーヴ夫人は悪い夫のために氣違ひにされたのだと言つてゐる。しかし彼女がただ一度でも彼に逢いさえすれば、彼の口実を何よりも有効るんぼくに論駁ろんぱくするであらう。

ヴィール氏は姉が臨終の間ぎわに何か遺言することはないかと訊たずねると、ヴィール夫人は無いと言つたそうである。なるほど、ヴィール夫人の亡霊の遺言はきわめてつまらないことで、それらを処理するために別に裁判を仰ぐというほどの事件でもなさそうである。それから考えてみると、彼女がそんな遺言めいたことを言つたのは、要するにバーグレーヴ夫人をして自分が亡霊となつて現われたという事実を明白に説明させるためと、彼女が見聞した事実談を世間の人たちに疑わせないためと、もう一つには理性の勝かつた、分別のある人たちの間にバーグレーヴ夫人の評判を悪くさせまいための心遣いであつたように思われるのである。

それからまた、ヴィール氏は金貨の財布もあつたことを承認しているが、しかし、それは夫人の私室キャビネットではなくて、櫛箱の中にあつたと言っている。それはどうも信じ難い気がする。なぜなれば、ワトソン夫人の説明によると、ヴィール夫人は自分の私室の鍵については非常に用心ぶかい人であつたから、おそらくその鍵を誰にも預けはしないであろうといふのである。もしそうであるとすれば、彼女は確かに自分の私室から金貨を他へ移すようなことはしなかつたであろう。

ヴィール夫人がその手でいくたびか両方の眼をこすつたことと、自分の持病の発作が顔容かおかたちを変えはしないかと訊ねたことは、わざとバーグレーヴ夫人に自分の発作のことを思い出させるためと、彼女が弟のところへ指環や金貨の分配方を書いて送るように頼んだことを、臨終の人の要求のように思わせずに、発作の結果だと思わせるためであつたように考えられる。それであるから、バーグレーヴ夫人も確かにヴィール夫人の持病が起こつて来たものと思ひ違ひをしたのである。同時にバーグレーヴ夫人を驚かせまいとしたことは、いかに彼女を愛し、彼女に対して注意を払つていたかという実例の一つであろう。その心遣ひはヴィール夫人の亡霊の態度に始終一貫して現われていて、特に白昼彼女のところに現われたことや、挨拶の接吻を拒んだことや、独りひとになつた時や、更にまたその別れる時の態度、すなわち彼女に挨拶の接吻をまた繰り返させまいとしたことなどが皆それであつた。

さて、なぜにヴィール氏がこの物語を気違い沙汰であると考へて、極力その事実を隠蔽し

ようとしているのか、私には想像がつかない。世間ではヴィール夫人を善良の亡霊と認め、彼女の会話は実に神のごときものであったと信じているのではないか。彼女の二つの大いなる使命は、逆境にあるバーグレーヴ夫人を慰藉いしやするとともに、信仰の話で彼女を力づけようとした事と、疎遠になつていた詫びを言いに来た事とであつた。また仮りに、何か複雑の事情とか利益問題とかいうことを抜きにして、バーグレーヴ夫人がヴィール夫人の死を早く知つて、金曜の昼から土曜の昼までにこんな筋書を作りあげたものと想像してご覧なさい。そんな真似をするような彼女であつたらば、もつと機智があつて、もつと生活が豊かで、しかも他人が認めているよりも、もつと陰險な女でなければならぬはずである。

私はいくたびかバーグレーヴ夫人にむかつて、確かに亡霊の上着に触れたかどうかを糺ただしてみたが、いつも彼女は謙遜して、「もしも私の感覚に間違いがないならば、私は確かにその上着に触れたと思います」と答えるのであつた。それからまた、亡霊がその手で膝をたたいた時に、確かにその音を聞いたかと訊ねると、彼女は聞いたかどうかはつきりとは記憶していないが、その亡霊の肉体は自分とまったく同じものであつたと言つた。

「それですから、私見たのはあの人ではなくて、あの人亡霊であつたと言われれば、いま私と話しているあなたも、私には亡霊かと思われます。あの時の私には、怖ろしいなどという感じはちつともいたしませんで、どこまでもお友達のつもりで家へ入れて、お友達のつもりで別れたのでございます」

また、彼女は「私は別にこの話を他人に信じてもらおうと思つて、一銭の金も使つた覚えもございませんし、また、この話で自分が利益を得ようとも思つていません。むしろ自分では、長い間よけいな面倒が殖ふえただけだと思つています。ふとしたことで、この話が世間へ知れるようにならなかつたら、こんなに拡まらずに済みましたのに……」と言つていた。

しかし今では、彼女もこの物語を利用して、出来るだけ世の人びとのためになるように尽くそうと、ひそかに考えてきたと言つてゐる。そうして、その以来、彼女はその考えを実行した。彼女の話によると、ある時は三十マイルも離れた所からこの物語を聞きに来た紳士もあり、またある時は一時いちじに部屋いっぱい集まつて来た人びとにむかつて、この物語を話して聞かせたこともあつたそうである。とにかくに、ある特殊な紳士たちはバーグレーヴ夫人の口からみな直接にこの物語を聞いたのであつた。

このことは私を非常に感動させたとともに、私はこの正確なる根底のある事実について大いに満足を感じている。そうして、私たち人間というものは、確実な見解を持つことが出来ないくせに、なぜに事実を論争しあつてゐるのか、私には不思議でならない。ただ、バーグレーヴ夫人の証明と誠実とだけは、いかなる場合にも疑うことの出来ないものであろう。

ラッパチーニの娘

アウペパンの作から

ホーソーン

Nathaniel Hawthorne

(1804-1864、米)

一八〇四年七月四日、米国マサチューセッツ州に生まる。

著名の小説家。

一八六四年五月十九日逝く。

遠い以前のことである。ジョヴァンニ・グアスコンティという一人の青年が、パドウアの大学で学問の研究をつづけようとして、イタリアのずっと南部の地方から遙はるばると出て来た。財囊のはなはだ乏しいジョヴァンニは、ある古い屋敷の上の方の陰気な部屋に下宿を取ることにした。これはあるパドウアの貴族の邸宅でもあつたらしく、その入り口の上には今はすっかり古ぼけてしまったある一家の紋章が表われているのが見られた。自国イタリアの有名な偉大な詩を知っていた旅の青年は、この屋敷の家族の祖先の一人、おそらくその所有者たる人は、ダンテの筆によつて、かのインフェルノの煉獄えいごうの同伴者として描き出されたものであることを、想いおこされるのであつた。これらの回想や連想が、はじめて故郷を去つた若者にはきわめてありがちの断腸の思いと結び付いて、ジョヴァンニは思はず溜め息をついた。そうして、物さびしい粗末な部屋の中をあちらこちらと見まわした。

「おや、あなた」と、リザベッタ老婦人は、この青年の人柄のひどく立派なのに打たれて、この部屋を住み心地のよいように見せようと努めながら声をかけた。

「お若いのかたの胸から溜め息などが出るとは、これはどうしたことでございましょう。あなたは、どうぞその窓から首

を出してご覧下さい。ナポリと同じようにきらきらした日の光りが^{おが}拝まれますよ」

ジョヴァンニは、老婦人の言うがままにただ機械的に窓から首を突き出して見たが、パドウアの日光が南イタリーの日光のように陽気だとは思われなかった。とはいえ、日光は窓の下の庭を照らして、さまざまの植物に恵みある光りを浴びせていた。その植物はまたひとかたならぬ注意をもつて育てられたもののように見えた。

「この庭は、お家^{うち}のものですか」と、ジョヴァンニは訊^きいた。

「ほんとうに、あなた。あんな植物などはどうか出来ないで、それよりもつとよい野菜でも出来ましたらば……」と、老いたるリザベツタ婦人は答えた。「いいえ、そうではございません。あの庭はジャコモ・ラツパチーニさまが、ご自身の手で作つておいでになります。あの先生は名高いお医者さんで、きつと遠いナポリのほうまでもお名前がひびいていることとされています。先生はあの植物をたいそうつよい魅力を持った薬に蒸溜なさるとかいふ噂で、折りに先生が働いていらつしやるのが見えます。またどうかすると、お嬢さままでが庭に生えている珍しい花を集めているのが見えますよ」

老婦人は、この部屋の様子について、もう何もかも言い尽くしてしまつたので、青年の幸福を祈りながら出て行つた。

ジョヴァンニはなんの所在もないので、窓の下の庭園をいつまでも見おろしていた。その庭の様子で、このパドウアの植物園は、イタリーはおろか、世界のいづこよりも早く作られ

たものの一つであると判断した。もしそうでないとすると、もつとも、これはあまり当てにはならないが、かつて富豪の一族の娯楽場か何かであったかもしれない。

庭園の中央には稀に見るほどの巧みな彫刻を施した大理石の噴水の跡がある。それも今はめちやくちやにこわれてしまつて、その残骸はほとんど原形をとどめぬほどになっているが、その水だけは今も相変わらず噴き出して、日光にきらきらと輝いていた。その水のさらさらと流れ落ちる小さいひびきは、上にいる青年の部屋の窓までも聞こえてくる。この噴水が永遠不滅の靈魂であつて、その周囲の有為転変ういてんぺんにはいささかも氣をとめずに絶えず歌つているもののように思われるのであつた。すなわち、ある時代には大理石をもつて泉を造り、またある時はそれを毀こぼつて地上に投げ出してしまふような、有為転變の姿も知らぬように――。

水の落ちてゆく池プールの周囲に、いろいろな植物が生い繁つているのを見ると、大きい木の葉や、美しい花の營養には、十分なる水分の供給が大切であるように思われた。池の中央にある大理石の花瓶のうちに、特にきわだつて眼につく一本の灌木かんぼくがあつた。その木には無数の紫の花が咲いて、花はみな宝石のような光沢と華麗とをそなえていた。こういう花が一団となつて目ざましい壯觀を現出し、たとい日光がここに至らずとも、十分に庭を明かるく照らすにたるかのものであつた。

土のあるところには、すべて草木が植えられてある。それらはその豊麗なることにおいて、かの灌木にやや劣つているとしても、なおひとかたならざる丹精の跡がありありと見られた。

また、それらの草木は皆それぞれに特徴を有ゆうして、それがその培養者たる科学者にはよく知られているらしく、あるものは多くの古風な彫刻を施した壺のうちに置かれ、また、あるものは普通の植木鉢のうちに植えられていた。それらのあるものは蛇のように地上を這いまわり、あるいは心のままに高く這いあがっていた。また、あるものはバーナムナスの像のまわりを花環のように取り巻いて、布きれのように垂れさがった枝はその像をすつかりおお掩つていた。それらはまこと立派に配列されていて、彫刻家にとってはこの上もないよい研究材料であろうと思われた。

ジョヴァンニが窓の側に立っていると、木の葉の茂みのうしろから物の摺れるような音が聞こえたので、彼は誰か庭のうちで働いているのに気がついた。間もなくその姿が現われたが、それは普通の労働者ではなく、黒の学者服を身にまとった、脊丈せいの高い、痩せた、土気色をした、弱よわしそうに見える男であった。彼は中年を過ぎていて、髪は半白で、やはり半白の薄い髻ひげを生やしていたが、その顔には知識と教養のあとがいちじるしく目立っていた。但し、その青春時代にも、温かな人情味などはけつして表わさなかつたであろうと思われるような人物であった。

なにものも及ばぬほどの熱心をもって、この科学者の庭造り師は、順じゅんにすべての灌木を試験していった。彼はそれらの植物のうちにひそんでいる性質をしらべ、その創造的原素の観察をおこない、何ゆえにこの葉はこういう形をしているか、かの葉はああいう形をし

ているか、また、そのためにそれらの花がたがいに色彩や香気を異にしているのである、というようなことを発見しようとしているらしい。しかも彼自身は、植物についてこれほどの深い造詣ぞうけいがあるにもかかわらず、彼とその植物との間には、少しの親しみもないらしく、むしろ反対に、彼は植物に触れることも、その匂いを吸うことも、まったく避けるように注意を払っていた。それがジョヴァンニに甚はなはだ不快な印象を与えたのであった。

科学者の庭造り師の態度は、たとえば猛獣とか、毒蛇とか、悪魔とかいうもののような、少しでも気を許したらば恐ろしい災害を与えるような、有害な影響を及ぼすものうちを歩いている人のものであった。庭造りというようなのは、人間の労働のうちでも最も単純な無邪気なものであり、また人類のまだ純潔であった時代の祖先らの労働きえつと喜びとであったのであるから、今この庭を造る人のいかにも不安らしい様子を見ていると、青年はなんとはなしに一種の怪しい恐怖をおぼえた。それでも、この庭園を現世のエデンの園であるというのであろうか。その害毒を知りながら自ら培養しているこの人は、果たしてアダムであらうか。この疑うべき庭造り師は灌木かんぼくの枯葉を除き、生い繁れる葉の手入れをするのに、厚い手袋をはめて両手を保護していた。彼の装身具は、単に手袋ばかりではなかった。庭を歩いて、大理石の噴水のほとりに紫の色を垂れているあの目ざましい灌木のそばに來ると、彼は一種のマスクでその口や鼻を掩った。この木のあらゆる美しさは、ただその恐ろしい害毒を隠しているかのように――。それでもなお危険であるのを知ってか、彼は後ずさりしてマスクを

はずし、声をあげて呼んだ。もつとも、その声は弱よわしく、身のうちに何か病氣をもっている人のものであった。

「ベアトリーチェ、ベアトリーチェ！」

「はい、お父さん、なにかご用……。」と、向うの家の窓から声量のゆたかな若やいだ声がきこえた。

その声は熱帯地方の日没のごとくに豊かで、ジョヴァンニは何とは知らず、紫とか真紅の色とか、または非常に愉快なある香気をも、ふと心に思い浮かべた。

「お父さん、お庭ですか」

「おお、そうだよ、ベアトリーチェ」と、父は答えた。「おまえ、ちよつと手をかしてくれ」彫刻の模様のついている入り口から、この庭園のうちへ最も美しい花にもけつして劣らない豊かな風趣をそなえた、太陽のように美しい一人の娘の姿があらわれた。その手には眼も醒めるばかりの、もうこれ以上の強い色彩はとも見るにたえないと思われるような、非常に濃厚な色彩の花を持っていた。彼女は生命の力と健康の力と精力とが充満しているように見えた。これらの特質はその多量を彼女の処女地帯の内に制限せられ、圧縮せられ、なおかつ強く引きしめられているのである。

しかし庭を見おろしているうちに、ジョヴァンニの考えは確かに一種の病的になったであろう。この美しい未知の人が彼にあたえた印象は、さらに一つの花が咲き出したかのように

あつた。そうして、この人間の花はそれらの植物の花と姉妹きょうだいで、同じように美しく、さらにそれよりも遙かに美しく、しかもなお手袋をはめてのみ触れ得べく、またマスクなしには近づくべからざる花のようであつた。ベアトリーチェが庭の小径に降りて来た時、彼女はその父がきわめて用意周到に避けてきたいくつかの植物の匂いを平気で吸い、また平気でそれにも手も触れているのが見えた。

「さあ、ベアトリーチェ」と、父は言った。「ご覧、私たちのいちばん大切な宝のために、しなければならぬ仕事がたくさんある。私は弱っているから、あまりむやみにそれに近づくと、命を失うおそれがある。それで、この木はおまえひとりに任せなければならぬと思うが……」

「そんなら、わたしは喜んで引き受けます」と、再び美しい声で叫びながら、彼女はかの目ざましい灌木にむかつて腰をかがめ、それを抱くように両腕をひろげた。

「ええ、そうですよ。ねえ、わたしの立派な妹さん、あなたを育ててゆくのは、このベアトリーチェの役目なのです。それですから、あなたの接吻キッスと……それから私の命いのちのその芳ばしい呼吸いきとを、わたしに下さらなければならぬのですよ」

その言葉にあらわれたような優しさを、その態度の上にもあらわして、彼女はその植物に必要と思われるだけの十分の注意をもつて忙しく働きはじめた。

ジョヴァンニは高い窓にもたれかかりながら、自分の眼をこすつた。娘がその愛する花の

世話をしているのか、または花の姉妹がたがいに愛情を示しあっているのか、まったくわからなかった。しかも、この光景はすぐに終わった。ドクトル・ラツパチーニがその庭造りの仕事を終わったのか、あるいはその慧眼がジョヴァンニのあることを見てとったのか。そのいずれかは知れないが、父は娘の手をとって庭を立ち去ってしまった。

夜はすでに近づいていた。息づまるような臭気が庭の植物から発散して、あけてある窓から忍び込むようであった。ジョヴァンニは窓をしめて寢床にはいつて、美しい花と娘のことを夢想した。花と娘とは別べつのものであつて、しかも同じものである。そうして、その両者には何か不思議な危険が含まれていた。

しかし朝の光りは、太陽が没している間に、または夜の影のあいだに、あるいは曇りがちな月光のうちに生じたところの、どんな間違つた想像をも、あるいは判断さえも、まったく改めるものである。眠りから醒めて、ジョヴァンニがまつさきの仕事は、窓をあけてかの庭園をよく見ることであつた。それは昨夜の夢によつて、大いに神秘的に感じられてきたのであつた。早い朝日の光りは花や葉に置く露をきらめかし、それらの稀に見る花にも皆それぞれに輝かしい美しさをあたえながら、あらゆるものをなんの不思議もない普通日常の事として見せている。その光りのうちにあつて、この庭も現実の明らかな事実としてあらわれたとき、ジョヴァンニは驚いて、またいささか恥じた。この殺風景な都会のまんなかで、こんな美しい贅沢な植物を自由に見おろすことの出来る特権を得たのを、青年は喜んだのである。

彼はこの花を通じて自然に接することが出来ると、心ひそかに思った。

見るからに病弱の、考え疲れたような、ドクトル・ジャコモ・ラッパチーニも、またその美しい娘も、今はそこには見えなかつたので、ジョヴァンニは自分がこの二人に対して感じた不思議を、どの程度までかれらの人格に負わすべきものか、また、どの程度までを自分自身の奇蹟的想像に負わすべきものかを、容易に決定することが出来なかつた。しかし彼はこの事件全体について、最も合理的の見解をくだそうと考えた。

その日、彼はピエトロ・バグリオーニ氏を訪問した。氏は大学の医科教授で、有名な医者であつた。ジョヴァンニはこの教授に宛てた紹介状を貰つていたのである。教授は相当の年配で、ほとんど陽気といつてもいいような、一見快活の性行を有してゐた。彼はジョヴァンニに食事を馳走し、殊ことにタスカン酒の一、二罎をかたむけて、少しく酔いがまわつてくると、彼は自由な楽しい会話でジョヴァンニを愉快にさせた。ジョヴァンニは双方が同じ科学者であり、同じ都市の住民である以上、かならず互いに親交があるはずだと思つて、よい機おりを見てドクトル・ラッパチーニの名を言い出すと、教授は彼が想像してゐたほどには、こころよく答えなかつた。

「神聖なるべき仁術の教授が……」と、ピエトロ・バグリオーニ教授は、ジョヴァンニの問いに答えた。「ラッパチーニのごとき非常に優れた医者けなの、適当と思われる賞讃に対して、それを貶けなすようなことを言うのは悪いことであろう。しかし一方において、ジョヴァンニ君

は旧友の子息である。君のような有望の青年が、この後あるいは君の生死を掌握するかもしれないような人間を尊敬するような、誤まった考えをいただくのを黙許してもいいかわるいかという僕は自己の良心に対して、少しばかりそれに答えなければならぬ。実際わが尊敬すべきドクトル・ラツパチーニは、ただ一つの例外はあるが、おそらくこのパドウアばかりでなく、イタリー全国におけるいかなる有能の士にも劣らぬ立派な学者であろう。しかし、医者としてのその人格には、大いなる故障があるのだ」

「どんな故障ですか」と、青年は訊いた。

「医者のことをそんなに詮索するのは、君は心身いずれかに病気があるのではないかな」と、教授は笑いながら言った。「だが、ラツパチーニに関しては——僕は、彼をよく知っているの、実際だと言いつ得るが——彼は人類などということよりも全然、科学の事ばかりを心にかけているといわれている。彼におもむく患者は、彼には新しい実験の材料として興味があるのみだ。彼の偉大な蘊蓄に、けしつぶぐらゐの知識を加えるためにも、彼は人間の生命——なかんずく、彼自身の生命、あるいはそのほか彼にとって最も親しい者の生命でも、犠牲に供するのを常としているのだ」

「わたしの考えでは、彼は実際畏るべき人だと思います」と、心のうちにラツパチーニの冷静なひたむきな智的態度を思い出しながら、ジヨヴァンニは言った。「しかし、崇拜すべき教授であり、また、まことに崇高な精神ではありませんか。それほどに科学に対して、精神的な

愛好をかたむけ得る人が他にどれほどあるでしょうか」

「少なくとも、ラッパチーニの執とつた見解よりは、治療術というもつと健全な見解を執るのでなかつたら……。ああ、神よ禁じたまえ」と、教授はやや急せき立つて答えた。「あらゆる医学的効力は、われわれが植物毒剤と呼ぶものの内に含蓄されているというのが、彼の理論である。彼は自分の手ずから植物を培養して、自然に生ずるよりは遙かに有害な種じゆの恐ろしい新毒薬を作つたとさえいわれている。それらのものは彼が直接に手をくださずとも、永遠にこの世に禍わざわいするものである。医者たる者がかくのごとき危険物を用いて、予想よりも害毒の少ないことのあるのは、否定し得ないことである。時どきに彼の治療が驚くべき偉効を奏し、あるいは奏したように見えたのは、われわれも認めてやらなければなるまい。しかしジョヴァンニ君。打ち明けて言えば、もし彼が……まさに自分が行なつたと思われる失敗に對して、厳格に責任を負うならば、彼はわずかの成功の例に對しても、ほとんど信用を受けるにたらないのである。まして、その成功とてもおそらく偶然の結果に過ぎなかつたのであらう」

もしこの青年が、バグリオーニとラッパチーニの間に専門的の争いが長くつづいていて、その争いは一般にラッパチーニのほうが有利と考えられていたことを知っていたならば、バグリオーニの意見を大いに斟酌しんしゃくしたのであらう。もしまた、読者諸君がみずから判断をくだしてみたならば、パドウア大学の医科に蔵されている両科学者の論文を見るがよい。

ラツパチーニの極端な科学研究熱に関して語られたところを、よく考えてみた後に、ジョヴァンニは答えた。

「よく分かりませんが、先生。あの人はどれほど医術を愛しているか、私には分かりませんが、確かにあの人の人にとって、もつと愛するものがあるはずです。あの人には、ひとりの娘があります」

「ははあ」と、教授は笑いながら叫んだ。「それで初めて君の秘密がわかった。君はその娘のことを聞いたのだね。あの娘についてはパドウアの若い者はみな大騒ぎをしているのだが、運よくその顔を見たという者は、まだほんの幾人いくにんもない。ベアトリーチェ嬢については、わたしはあまりよく知らない。ラツパチーニが自分の学問を彼女に十分に教え込んだということ、彼女は若くて美しいという噂だが、すでに教授の椅子に着くべき資格があるということ、ただそれだけを聞いている。おそらく彼女の父は、将来わたしの椅子を彼女のものにしようとして決めているのだろう。ほかにまだつまらない噂は二、三あるが、言う価値もなく、聞く価値もないことだ。では、ジョヴァンニ君。赤葡萄酒の盃をほしたまえ」

ジョヴァンニは飲んだ酒にやや熱くなつて、自分の下宿へもどつた。酒のために、彼の頭はラッパチーニと美しいベアトリーチェについて、いろいろの空想をたくましゅうした。帰る途中で偶然に花屋のまえを通つたので、彼は新しい花束を一つ買つて来た。

彼は自分の部屋にのぼつて、窓のそばに腰をおろしたが、自分の影が窓の壁の高さを超えないようにした。それで、彼はほとんど発見される危険もなしに庭を見おろすことができた。眼の下に人の影はなかつたが、かの不思議な植物は日光にぬくまりながら、時どきにあたかも同情と親しみを表わすかのように、静かにうなずき合つていた。庭園の中央のこわれた噴水のほとりには、それを覆うように群がる紫色の花をつけて、めざましい灌木が生えていた。花は空中に輝き、それが池水の底に映じて再びきらきらと照り返すと、池の水はその強い反射で、色のついた光りを帯びて溢れ出るようにも見えた。

初めは前に言つたように、庭には人影がなかつた。しかし間もなく——この場合、ジョヴァンニが半ば望み、半ば恐れたごとく——人の姿が古風の模様のある入り口の下にあらわれた。そうして、植物の列をなしている間を歩み来ながら、甘い香りを食べて生きていたという古い物語のなかの人物のように、植物のいろいろの香気を彼女は吸つていた。ふたたび

ベアトリーチェをみるに及んで、青年がいつそうおどろいたのは、彼女がその記憶よりも遙かに美しいことであつた。彼女は太陽の光りのうちに輝き、また、ジョヴァンニがひそかに思つていた通り、庭の小径こみちの影の多いところを明かるく照らすほどに、その人は光り輝いているのであつた。

彼女の顔は前のときよりも、いつそうはつきりと現われた。そうして、彼は天真爛漫な柔和な娘の表情に、いたく心を打たれた。こんな性質を彼女が持つていようとは、彼の考えおよばないところであつたので、彼女がいつたいたいどんな質たちの人であろうかと、彼は新たに想像してみるようになった。彼は忘れもせずに、この美しい娘と、噴水の下に寶石のような綺麗な花を咲かせている灌木と、この両者の類似点を再び観察し、想像するのであつた。——この類似は、彼女の衣服の飾りつけと、その色合いの選択とによつて、ベアトリーチェが弥いっが上にも空想的気分を高めたからであつた。

灌木に近づくと、彼女はあたかも熱烈な愛情を有しているかのように、その両腕を大きくひらいて、その枝をひき寄せて、いかにも親しそうに抱えた。その親しさは、彼女の顔をその葉のうちに隠し、きらめく縮れ毛は皆その花にまじつて埋められてしまうほどであつた。

「私の姉妹！^{マイ・シスター} あなたの息をわたしに下さい」と、ベアトリーチェは叫んだ。「わたしはもう、

普通の空気がいやになつたのですから。——そうして、あなたのお花を下さいな。わたしはきつと大事に枝を折つて、わたしの胸ハートの側にちゃんとつけて置きます」

こう言つて、ラッパチーニの美しい娘は灌木の最も美しい花の一輪をとつて、自分の胸につけようとした。しかしこの時、あるいは酒のためにジョヴァンニの意識が混乱していたのかも知れないが、もしそうでないとすれば、実に不思議なことが起こつた。小さいオレンジ色の蜥蜴トカゲかカメレオンのような動物が小径を這つて、偶然にベアトリーチェの足もとへ近寄つて来たのである。

ジョヴァンニが見ている所は遠く離れていて、そんなに小さなものは到底見えなかつたであろうと思われるが、しかし彼の眼には、花の切り口から、一、二滴の液体が蜥蜴の頭に落ちたと見えたのである。すると、その動物はたちまち荒あらしく体をゆがめて、日光のもとに動かなくなつてしまった。ベアトリーチェはこの驚くべき現象をみて、悲しそつたであつたが格別におどろきもせず、しずかに十字を切つた。それから彼女はためらいもせずに、その恐ろしい花を取つて自分の胸につけると、花はまたたちまちに紅くれないとなつて、ほとんど宝石も同様にきらきらと輝いて、この世の何物もあたえられないような独特の魅力を、その衣服や容貌にあたえるのであつた。ジョヴァンニはびつくりして、窓のかげから差し出していた首を急に引つ込めて、慄ふるえながら独りごとを言つた。

「おれは眼が覚めているのだろうか。意識を持つていっているのだろうか。いつたい、あれはなんだろう。美しいと言つていいのか、それとも大變に怖ろしいといふのか」

ベアトリーチェはなんの気もつかないように、庭をさまよい歩きながらジョヴァンニの窓

の下へ近づいて来たので、彼女に刺戟された痛烈の好奇心を満足させるためには、彼はそこから首を突き出さなければならなかった。あたかもそのときに庭の垣根を越えて、一匹の美しい虫が飛んで来た。おそらく市中を迷い暮らして、ラッパチーニの庭の灌木の強い香気に遠くから誘惑されるまでは、どこにも新鮮な花を見いだすことが出来なかつたのであろう。

この輝く虫は花には降りずに、ベアトリーチェに心を惹かれてか、やはり空中をさまよつて彼女の頭のまわりを飛びまわつた。これはどうしてもジョヴァンニの見あやまりに相違なかつたのであるが、ともかくも彼はこう想像したのである。ベアトリーチェが子供らしい楽しみをもつて虫をながめていると、その昆虫はだんだんに弱つて来て、その足もとに落ちた。そうして、その光っている羽はねをふるわしているかと見るうちに、とうとう死んでしまつた。それがどういふわけであるのか、彼には分からなかつたが、おそらく彼女の息に触れたがためであろう。ベアトリーチェはふたたび十字を切つて、虫の死骸の上にかがんで深い溜め息をついた。

ジョヴァンニはいよいよ驚いて、思わず身動きをすると、それに気がついて彼女は窓を見あげた。彼女は青年の美しい頭——イタリー式よりはむしろギリシヤ型で、美しく整つた容貌と、かがやく金髪まきげの捲毛まきげとを持つていた——その頭が中空にさまよつていた、かの虫のように彼女を一心に見詰めているのを知つた。ジョヴァンニは今まで手に持つていた花束をほとんど無意識に投げおろした。

「お嬢さん」と、彼は言った。「ここに清い健全な花があります。どうぞジョヴァンニ・グアスコンティのために、その花をおつけ下さい」

「ありがとうございます」と、あたかも一種の音楽のあふれ出るような豊かな声をして、半分は子供らしく、半分は女らしい、嬉しそうな表情でベアトリーチェは答えた。「あなたの贈り物を頂戴ちやうだいいたします。そのお礼に、この美しい紫の花を差し上げたいのですが、わたしが投なげてあなただけのところまでは届きません。グアスコンティさま、お礼を申し上げるだけで、どうぞおゆるし下さい」

彼女は地上から花束を取り上げた。未知の人の挨拶にこたえるなど、娘らしい慎しみを忘れたのを内心恥ずるかのように、彼女は庭を過ぎて足早に家の中へはいってしまった。それはわずかに数秒間のことであつたが、彼女の姿が入り口の下に見えなくなるうとして、何かの美しい花束がすでに彼女の手のうちで凋しおれかかっているように見えた。しかし、それは愚かな想像で、それほど離れたところにあつて、新鮮な花の凋しほんでゆくことなどがどうして認められるであらう。

このことがあつてのち、しばらくの間、青年はラッパチーニの庭園に面している窓口に行くことを避けた。もしその庭を見たらば、何かいやな醜怪な事件が、かさねて彼の眼に映るのであるうと思つたようであつた。彼はベアトリーチェと知り合いになつたがために、何か解げし難いようなある力の影響をうけていることを、自分ながら幾分いくぶんか気がついた。もし彼の心

に本当の危険を感じているならば、最も賢明なる策はこのパドウアを一度離れることである。第二の良策は、日中に見たところのベアトリーチェの親しげな様子に出来るだけ慣れてしまつて、彼女をきわめて普通の女性と思うようになることであろう。殊ことに彼女を避けているあいだ、ジョヴァンニはこの異常なる女性に断然接近してはならない。彼女と親しい交際が出来そうにでもなつたらば、絶えず想像をたくましゅうしている彼の気まぐれが、いつか真实性を帯びて来る虞おそれがあるからである。

ジョヴァンニは、深い心を持たずして——今それを測はかつてみたのではないが——敏速な想像力と、南部地方の熱烈な気性とを持つていた。この性質はいつでも熱病のごとくに昂たかまるのである。ベアトリーチェが恐るべき特質——彼が目撃したところによれば、その恐ろしい呼吸とか、美しい有毒の花に似ているとかいうこと——それらの特質を持つていると否いなにかかわらず、彼女はすくなくとも、非常に猛烈な不可解の毒薬をそのからだのうちに沁み込ませてしまつたのである。彼女の濃艶は彼の心を狂わせるが、それは愛ではない。彼はまた、彼女の肉体にみなぎるように見えるごとく、彼女の精神にも同じ有毒の原素が沁み込んでいると想像しているが、それは恐怖でもない。それは愛と恐怖との二つが生んだもので、しかもその二つの性質をそなえているものである。すなわち愛のごとくに燃え、恐怖のごとくに顫ふるえるところのものである。

ジョヴァンニは何を恐るべきかを知らず、また、それにも増して何を望むべきかをも知ら

なかつた。しかも希望と恐怖とは絶えずその胸のうちで争っていた。交るがわるに、他の感情を征服するかと思えば、また起つて戦いを新たにするのである。暗いと明かるとを問わず、いずれにしても単純なる感情は幸福である。赫かくたる地獄の火焰ほのおをふくものは、二つの感情の物凄いもつれである。

時どきに彼はパドウアの街や郊外をむやみに歩き廻つて、熱病のような精神を鎮めようと努めた。その歩みは頭の動悸と歩調を合わせたので、さながら競争でもしているように、だんだんに速くなつていくのであつた。ある日、彼は途中である人にさえぎられた。ひとりの人品卑しからぬ男が彼を認めて引き返し、息を切りながら彼に追いついて、その腕を取つたのである。

「ジョヴァンニ君。おい、君。ちよつと待ちたまえ。君は、僕を忘れたのか。僕が君のように若返つたとしてもいふのなら、忘れられても仕方がないが……」と、その人は呼びかけた。

それはバグリオーニ教授であつた。この教授は俐口りこうな人物で、あまりに深く他人の秘密を見透し過ぎるように思われたので、彼は初対面以来、この人をそれとなく避けていたのである。彼は自己の内心の世界から外部の世界をじつと眺めて、自己の妄想から眼覚めようと努めながら、夢みる人のように言つた。

「はい、私はジョヴァンニ・グアスコンティです。そうしてあなたは、ピエトロ・バグリオーニ教授。では、さようなら」

「いや、まだ、まだ、ジョヴァンニ・グアスコンティ君」と、教授は微笑とともに青年の様子を熱心に見つめながら言った。「どうしたことだ。僕は君のお父さんとは仲よく育つたのに、その息子はこのパドウアの街で僕に逢つても、知らぬ振りをして行き過ぎてもいいのかね。ジョヴァンニ君。別れる前にひとこと話したいから、まあ、待ちたまえ」

「では、早く……。先生、どうぞお早く……」と、ジョヴァンニは、非常にもどかしそうに言った。「先生、私が急いでいるのがお見えになりませんか」

彼がこう言っているところへ、黒い着物をきた男が、健康のすぐれぬ人のように前かがみになって弱よわしい形でたどつて来た。その顔は全体に、はなはだ病的で土色を帯びていたが、鋭い積極的な理智のひらめきがみなぎっていて、見る者はその単なる肉体的の虚勞きよらうを忘れて、ただ驚くべき精力を認めたであろう。彼は通りがかりに、バグリオーニと遠くの方から冷やかな挨拶を取り交したが、彼はこの青年の内面に何か注意に値あたいすべきものあらば、何物でも身透さずにはおかぬといったような鋭い眼をもつて、ジョヴァンニの上にきつとそそがれた。それにもかかわらず、その容貌には独特の落ち着きがあつて、この青年に対しても人間的ではなく、単に思索的興味を感じているように見られた。

「あれが、ドクトル・ラツパチーニだ」と、彼が行つてしまつた時に教授はささやいた。「彼は君の顔を知っているのかね」

「私は知っているというわけではありません」と、ジョヴァンニはその名を聞いて驚きながら

答えた。

「彼のほうでは確かに君を知っているよ。彼は君を見たことがあるに違いない」と、バグリオーニは急ぎ込んで言った。「何かの目的で、あの男は君を研究している。僕はあの様子で分かったのだ。彼がある実験のために、ある花の匂いで殺した鳥や鼠や蝶などに臨むとき、彼の顔に冷たくあらわれるものとまったく同じ感じだ。その容貌は自然そのもののごとくに深味をもっているが、自然の持つ愛の暖か味はない。ジョヴァンニ君。君はきつとラッパチーニの実験の一材料であるのだ」

「先生。あなたは僕を馬鹿になさるのですか。そんな不運な実験だなどと……」と、ジョヴァンニは怒気を含んで叫んだ。

「まあ、君、待ちたまえ」と、執拗な教授は繰り返して言った。「それはね、ジョヴァンニ君。ラッパチーニが君に学術的興味を感じたのだよ。君は恐ろしい魔手に捉われているのだ。そうして、ベアトリーチェは……彼女はこの秘密についてどういう役割を勤めるのかな」

しかしジョヴァンニはバグリオーニ教授の執拗にたえきれないで、逃げ出して、教授がその腕を再び捉えようとしたときには、もうそこにはいなかった。教授は青年のうしろ姿をまばたきもせずに見つめて、頭を振りながらひとりごとを言った。

「こんなはずではないが……。あの青年は、おれの旧友の息子だから、おれは医術によつて保護し得る限りは、いかなる危害をも彼に加えさせないつもりだ。それにまた、おれに言わせ

ると、ラツパチーニがああ青年をおれの手から奪つて、かの憎むべき実験の材料にするなどとは、あまりにひどい仕方だ。彼の娘も監視すべきだ。最も博学なるラツパチーニよ。おれはたぶんおまえを夢にも思わないようなところへ追いやってしまうであろう」

ジョヴァンニは廻り道をして、ついにいつの間にか自分の宿の入り口に来ていた。彼が入り口の鬨しきをまたいだときに、老婦人のリザベッタに出逢つた。

彼女はわざと作り笑いをして、彼の注意をひこうと思つたが、彼の沸き立った感情はすぐに冷靜になつて、やがて茫然ぼうぜんと消えてしまったので、その目的は達せられなかつた。彼は、微笑をたたえた皺だらけの顔の方へ真正面に眼を向けてはいたが、その顔を見ているようには思われなかつた。そこで、老婦人は彼の外套がいのとうをつかんだ。

「もし、あなた、あなた」と、彼女はささやいた。その顔にはまだ一面に微笑をたたえていたので、彼女の顔は幾世紀を経て薄ぎたなくなつた怪異な木彫りのように見えた。

「まあお聴きなさい。庭へはいるのには、秘密の入り口があるのでございませすよ」

「なんだつて……」と、ジョヴァンニは無生物が生命を吹き込まれて飛び上がるように、急に振り返つて叫んだ。「ラツパチーニの庭へはいる秘密の入り口……」

「しつ、しつ。そんなに大きな声をお出しになつてはいけません」と、リザベッタはその手で、彼の口を蔽おほいながら言つた。「さようでございませす。あの偉い博士さまのお庭にはいる秘密の入り口でございませす。そのお庭では、立派な灌木の林がすっかり見られます。パドウアの

若いかたたちは、みんなその花の中に入れてもらおうと思つて、お金を下さるのでございませす」

ジョヴァンニは金貨一個を彼女の手に握らせた。

「その道を教えてくれたまえ」と、彼は言つた。

たぶんバグリオーニとの会話の結果であろうが、このリザベツタ婦人の橋渡しは、ラッパチーニが彼をまき込もうとしていると教授が想像しているらしい陰謀——それがいかなる性質のものであつても——と、何か関連しているのではないかという疑いが、彼の心をかすめた。しかし、こうした疑いは、ジョヴァンニの心を一旦かきみだしたものの、彼を抑制するには不十分であつた。ベアトリーチエに接近することが出来るということを知つた刹那、そうすることが彼の生活には絶対に必要なことのように思われた。

彼女が天使であろうと、悪魔であろうと、そんなことはもう問題ではなかつた。彼は絶対に彼女の掌中しょうちゆうにあつた。そうして、彼は永久に小さくなりゆく圈内に追い込まれて、ついに、彼が予想さえもしなかつた結果を招くような法則に、従わなければならなかつた。

しかも不思議なことには、彼はにわかにある疑いを起こした。自分のこの強い興味は、幻想ではあるまいか。こういう不安定の位置にまで突進しても差し支えないと思われるほどに、それが深い確実な性質のものであろうか。それは単なる青年の頭脳の妄想で、彼の心とはほんのわずかな関係があるに過ぎないか、またはまるで無関係なのではあるまいか。彼は疑つ

て、躊躇ちゆうちゆうしてあと戻りをしかけたが、ふたたび思い切つて進んで行つた。

皺だらけの案内人は幾多のわかりにくい小徑を通らせて、ついにあるドアをひらくと、木の葉がちらちらと風にゆらいで、日光が葉がくれにちらちらと輝いているのが見えた。ジョヴァンニは更に進んで、隠れた入り口の上を蔽つている灌木の蔓つるがからみつくのを押しのけて、ラッパチーニ博士の庭の広場にある自分の窓の下に立つた。

われわれはしばしば経験することであるが、不可能と思うようなことが起こつたり、今まで夢のように思つていたことが実際にあらわれたりすると、歡樂または苦痛を予想してほとんど夢中になるような場合でも、かえつて落ち着きが出て、冷やかなるまでに大胆になり得るものである。運命はかくのごとくわれわれにさからうことを喜ぶ。こういう場合には、情熱が時を得顔えがおにのさばり出て、それがちよいどいい工合ぐあいに事件と調和するときには、いつまでもその事件の陰にとどこおっているものである。

今のジョヴァンニは、あたかもそういう状態に置かれてあつた。彼の脈搏みやくはくは毎日熱い血潮で波打っていた。彼はベアトリーチェに逢つて、彼女を美しく照らす東洋的な日光を浴びながら、この庭で彼女と向かい合つて立ち、彼女の顔をあくまでも眺めることによつて、彼女の生活の謎になつている秘密をつかもうと、出来そうもないことを考えていた。しかも今や彼の胸には、不思議な、時ならぬ平静が湧いていた。彼はベアトリーチェか、またはその父がそこらにいるかと思つて、庭のあたりを見まわしたが、まったく自分ひとりであるのを知

ると、さらに植物の批評的觀察をはじめた。

ある植物——否、すべての植物の姿態が彼には不満であった。その絢爛けんらんなることもあまりに強烈で、情熱的で、ほとんど不自然と思われるほどであった。たとえば、ひとりで森の中をさまよっている人が、あたかもその茂みの中からこの世のものとも思われぬ顔が現われて、じろりと睨にらまれた時のように、その不気味な姿に驚かされない灌木はほとんどなかった。また、あるものはいろいろの科に属する植物を混合して作り出したかと思われるような、人工的の形状で、感じやすい本能を刺戟した。それはもはや神の創造したものではなく、単に人間がその美を下手に模倣して、墮落した考えによって作りあげたものに過ぎなかった。これらはおそらく一、二の実験の結果、個個こごの植物を混合して、この庭の全植物と異った、不思議な性質をそなえたものに作り上げることにおいて成功したのであろう。ジヨヴァンニはただ二、三の植物を集めてみたが、それは彼が有毒植物ということをかねて熟知している種類のものではなかった。

こんな考察にふけつているとき、彼はふと衣きぬずれの音を聞いた。ふりかえつて見ると、それはベアトリーチェが、彫刻した入り口の下から現われ出たのであった。

三

ジョヴァンニはこの際いかなる態度をとるべきものか。庭園に闖入した申しわけをすべきものかどうか。また、みずから望んだことではなくても、少なくともラツパチーニとその娘には無断でここへ立ち入ったことを自認すべきものかどうか。そんなことは別に考えていなかったもので、その瞬間すこしくあわてたが、ベアトリーチェの態度を見るにつけて、彼の心はやや落ち着いた。もつとも、誰の案内でここにはいることを許されたかということになれば、なおそこに一種の不安がないでもなかった。彼女は小径を軽く歩んで来て、こわれた噴水のほとりで彼に出逢つて、さすがに驚いたような顔をしていたが、また、その顔は親切な愉快な表情に輝いていた。

「あなたは花の鑑識家でございますね」と、ベアトリーチェは彼が窓から投げてやった花束を指して微笑みながら言った。「それですから、父の集めた珍しい花に誘惑されて、もつと近寄って見たいとお思になるのも不思議はありません。もし父がここにおりましたら、自然こういう灌木の性質や習慣などについて、いろいろな不思議なおもしろいことをお話し申し上げることが出来ましように……。父はそういう研究に一生涯をついやしました。そうして、この庭が父の世界なのでございます」

「あなたもそうでしょう」と、ジョヴァンニは言った。「世間の評判によると、あなたもたくさんの花やいい匂いについて、ずいぶん造詣ぞうけいが深いそうではありませんか。いかがです、わたしの先生になつて下さいませんか。そうすると、わたしはラッパチーニ先生の教えを受けるよりも、もつと熱心な学生になるのですが……」

「そんないい加減な噂があるのでしょいか」と、ベアトリーチェは音楽的な愉快な笑い方をして訊きいた。「わたくしが父に似て植物学に通じているなどと、世間では言っておりますか。まあ、冗談でしょう。わたくしはこの花のなかに育ちましたけれど、色と匂いのほかには、なんにも存じませんのです。その貧弱な知識さえも時どきに失なくなくなってしまふように思うことがあります。ここにはたくさんの花があつて、あまりにけばけばしいので、それを見るとわたくしはなんだか忌いましくなつて来ます。しかしあなた、こうした學術に関するわたくしの話は、どうぞ信用して下さいさらないように……。あなたのご自分の眼でご覧になることのはかは、わたくしの言うことなどはなんにもご信用なさらないで下さい」

「わたしは自分の眼で見たものをすべて信じなければならぬのですか」と、ジョヴァンニは以前の光景を思い出して逡巡しりごみしながら、声をとがらして訊いた。「いいえ、あなたはわたくしに求めなさ過ぎます。どうぞ、あなたの口唇くちびるからもれること以外は信じるなど言つて下さい」

ベアトリーチェは彼の言うことを理解したように見えた。彼女の頬は真紅まっかになつた。しか

も彼女はジョヴァンニの顔をじつと眺めて、彼が不安らしい疑惑の眼をもつて見ているのに対して、さながら女王のような傲慢ごうまんをもつて見返した。

「では、そう申しましょう。あなたがわたくしのことをどうお考えになつていたとしても、それは忘れて下さい。たとい外部の感覚は本当であつても、その本質において相違してゐるところがあるかもしれません。けれども、ベアトリーチェ・ラツパチーニのくちびるから出る言葉は、心の奥底から出る真実の言葉ですから、あなたはそれを信じて下さつてもよろしいのです」

彼女の容貌には熱誠が輝いていた。その熱誠は真実そのものの光りのようにジョヴァンニの意識の上にも輝いた。しかし、彼女がそれを語つてゐる間、その周囲の空気のうちには、消えやすくはあるが豊かないい匂いがただよつていたので、この青年はなんとも知れぬ反感から、努めてその空気を吸わないようにしていた。

その匂いは花の香りであろう。しかも、彼女の言葉をさながら胸の奥にたくわえてあつたかのように、かくも不思議の豊富にしたのは、ベアトリーチェの呼吸であろうか。一種の臆病心は影のようにジョヴァンニの胸から飛び去つてしまつた。彼は美しい娘の眼を通して、水晶のように透きとおつたその魂を見たように思つて、もはやなんの疑惑も恐怖も感じなかつた。

ベアトリーチェの態度にあらわれていた情熱の色は消えて、彼女は快活になつた。そうし

て、孤島の少女が文明国から来た航海者と談話をまじえて感ずるような純な遊びが、この青年との会合によつて彼女に新しく湧き出したように思われた。

明らかに彼女の生涯の経験は、その庭園内に限られていた。彼女は日光や夏の雲のような、単純な事物について話した。また、都会のことや、ジョヴァンニの遠い家や、その友人、母親、姉妹などきょうだいについてたずねた。その質問はまったく浮世離れのした、流行などということはまったく掛け離れたものであったので、ジョヴァンニは赤ん坊に話して聞かせるような調子で答えた。

彼女は今や初めて日光を仰いだ新しい小川が、その胸にうつる天地の反映に驚異を感じているような態度で、彼の前にその心を打ち明けた。また、深い水源みなもとからはいろいろの考えが湧き出して、あたかもダイヤモンドやルビーがその泉の泡の中からでも光り輝くように、寶石のひかりを持った空想が湧き出した。

青年の心には折りおりに懷疑の念がひらめいた。彼は兄妹きょうだいのように話をまじえて、彼女を人間らしく、乙女おとめらしく思わせようとするような者と、相並んで歩いているのではないかと思つた。その人間には怖ろしい性質のあらわれるのを彼は実際に目撃しているのである。その恐怖の色を理想化しているのではないかと思つた。しかもこうした考えはほんの一時的のもので、彼女の非常に真実なる性格のほうは、容易に彼を親しませるようになったのである。

こういう自由な交際をして、かれらは庭じゅうをさまよい歩いた。並木のあいだをいくたびも廻り歩いたのちに、こわれた噴水のほとりに来ると、そのそばにはめざましい灌木があつて、美しい花が今を盛りと咲き誇つていた。その灌木からは、ベアトリーチェの呼吸から出るのと同じような一種の匂いが散つていたが、それは比較にならないほどにいつそう強烈なものであつた。彼女の眼がこの灌木に落ちたとき、ジョヴァンニは彼女の心臓が急に激しい鼓動を始めたらしく、苦しうにその胸を片手でかさえるのを見た。

「わたしは今までに初めておまえのことを忘れていたわ」と、彼女は灌木に囁きかけた。「わたしが大胆にあなたの足もとへ投げた花束の代りに、あなたはこの生きた宝の一つをやるうと約束なすつたのを覚えています。今日お目にかかった記念に、今それを取らせて下さい」と、ジョヴァンニは言つた。

彼は灌木の方へ一歩進んで手をのぼすと、ベアトリーチェは彼の心臓を刃でつらぬくような鋭い叫び声をあげて駈け寄つて来た。彼女は男の手をつかんで、かよいからだに全力をこめて引き戻したのである。ジョヴァンニは彼女にさわられると、全身の繊維が突き刺されるように感じた。

「それにふれてはいけません。あなたの命がありません。それは恐ろしいものです」と、彼女は苦悩の声を張りあげて叫んだ。

そう言つたかと思うと、彼女は顔をおおいながら男のそばを離れて、彫刻のある入り口の

下に逃げ込んでしまった。ジョヴァンニはそのうしろ姿を見送ると、そこには、ラッパチーニ博士の痩せ衰えた姿と蒼あおざめた魂とがあつた。どのくらいの時間かはわからないが、彼は入り口の蔭にあつてこの光景を眺めていたのであつた。

ジョヴァンニは自分の部屋にただひとりとなるやいなや、初めて彼女を見たとき以来、ついに消え失せないありたけの魅力と、それに今ではまた、女性らしい優しい温情に包まれたベアトリーチェの姿が、彼の情熱的な瞑想のうちによみがえつてきた。彼女は人間的であつた。彼女はすべての優しさと、女らしい性質とを賦ふ与よされてきた。彼女は最も崇拜にあたいる女性であつた。彼女は確かに高尚な勇壮な愛を持つことができた。彼がこれまで彼女の身体および人格のいちじるしい特徴と考えていたいろいろの特性は、今や忘れられてしまったのか。あるいは巧妙なる情熱的詭弁によつて魔術の金冠のうちに移されてしまったのか。彼はベアトリーチェをますます賞讃すべきものとし、ますます比類なきものとした。これまでも醜みにくく見えていたすべてのものが、今はことごとく美しく見えた。もしまた、かかる変化があり得ないとしても、醜いものはひそかに忍び出て、昼間は完全に意識することの出来ないような薄暗い場所にむらがる漠然とした考えのうちに影をひそめてしまった。

こうして、ジョヴァンニはその一夜を過ごしたのである。彼はラッパチーニの庭を夢みて、あかつきがその庭に眠っている花をよび醒ますまでは、安らかに眠ることができなかつた。

時が来ると日は昇つて、青年のまぶたにその光りを投げた。彼は苦しそうに眼をさました。まったく醒めたとき、彼は右の手に火傷やけどをしたような、ちくちくした痛みを感じた。それは彼が宝石のような花を一つ取ろうとした刹那に、ベアトリーチェに握られたその手であった。手の裏には、四本の指の痕あとのような紫の痕があつて、拳こぶしの上には細い拇指おやゆびの痕らしいものもあつた。

愛はいかに強きことよ。——たといそれが想像のうちのみ栄えて、心の奥底までは揺り動かさないような、うわべばかりの膺まがいものであつたとしても——薄い霞のように消えてゆく最後の瞬間までも、いかに強くその信念を持続することよ。ジョヴァンニは自分の手にハシカチーフを巻いて、どんな禍わざわいが起こつて来るかと憂いたが、ベアトリーチェのことを思うと、彼はすぐにその痛みを忘れてしまつたのである。

第一の会合の後、第二の会合は実に運命ともいうべき避けがたいものであつた。それが第三回、第四回とたびかさなるにつれて、庭園におけるベアトリーチェとの会合は、もはやジョヴァンニの日常生活における偶然の出来事ではなくなつて、その生活の全部であつた。彼がひとりでいる時は、嬉しい逢う瀬の予想と回想とにふけていた。

ラッパチーニの娘もやはりそれと同じことであつた。彼女は青年の姿のあらわれるのを待ちかねて、そのそばへ飛んで行つた。彼女は彼が赤ん坊時代からの親しい友達で、今でもそうであるかのように、なんの遠慮もなしに大胆に振舞つた。もし何かの場合で、まれに約束

の時間までに彼が来ないときは、彼女は窓の下に立って、室内にいる彼の心に反響するような甘い調子で呼びかけた。

「ジョヴァンニ……。ジョヴァンニ……。何をぐずぐずしているの。降りていらつしやいよ」
それを聞くと、彼は急いで飛び出して、毒のあるエデンの花園に降りて来るのであった。
これほどの親しい間柄であるにもかかわらず、ベアトリーチェの態度には、なお打ち解けがたい点があった。彼女はいつも行儀のいい態度をとっているのです、それを破ろうという考えが男の想像のうちには起きないほどであった。すべての外面上の事柄から観察すると、かれらは確かに相愛の仲であった。かれらは路^{みち}ばたでささやくには、あまりに神聖であるかのように、たがいの秘密を心から心へと眼で運んだ。かれらの心が永く秘められていた火焰^{ほのお}の舌のように、言葉となつてあらわれ出るときには、情熱の燃ゆるがままに恋を語ることさえもあつた。それでも接吻や握手や、または恋愛が要求し神聖視するところの軽い抱擁さえも試みたことはなかつた。彼は彼女の輝いたちぢれ毛のひと筋にも、手をふれたことはなかつた。彼の前で彼女の着物は微風に動かされることさえもなかつた。それほどにかれらの間には、肉体的の障壁がいちじるしかつた。

まれに男がこの限界を超えるような誘惑を受けるように思われた時には、ベアトリーチェは非常に悲しそうな、また非常に厳格な態度になつて、身を顫^{ふる}わせて遠く離れるような様子を見せた。そうして、彼を近づけないために、なんにも口をきかないほどであつた。こんな

時には、彼は心の底から湧き出て来て、じつと彼の顔を眺めている、不気味な恐ろしい疑惑の念におどろかされるので、その恋愛は朝の靄もやのように薄れていつて、その疑惑のみがあとに残った。しかも瞬間の暗い影のあとに、ベアトリーチェの顔がふたたび輝いた時には、彼がそれほど恐怖をもって眺めた不思議な人物とはすっかり変わっていた。彼が知っている限りでは、彼女は確かに美しい初心うぶな乙女おとめであつた。

ジョヴァンニが曩まことにバグリオーニ教授に逢つてからは、かなりに時日が過ぎた。ある朝、彼は思いがけなく、この教授の訪問を受けて不快に思つた。彼はこの数週間、教授のことなどを思い出してもみなかつたのみならず、いつそいつまでも忘れていたかつた。彼は長く打ちつづく刺戟に疲れてはいたが、自分の現在の感激状態に心から同情してくれる人でなければ逢いたくなかつた。しかしこんな同情は、バグリオーニ教授に期待することは出来なかつた。教授はしばらくの間、市中のことや大学のことなどについて噂うわさばなしをしたのちに、ほかの話題に移つて行つた。

「僕は、この頃、ある古典クラシツク的な著者のものを読んでいるが、その中で非常に興味のある物語を見つけたのだ」と、彼は言つた。「君もあるいは思い出すかもしれないが、それはあるインドの皇子の話だ。彼はアレキサンダー大帝に一人の美女を贈つた。彼女はあかつきのように愛らしく、夕暮れのように美しかつたが、非常に他人と異つてゐるのは、その息がペルシヤの薔薇の花園よりもなお芳かぐわしい、一種の馥郁ふいくたる香気を帯びてゐることであつた。アレキサン

ダーは、若い征服者によくありがちなことであるが、この美しい異国の女をひと目見るとたちまちに恋におちてしまった。しかも偶然その場に居合わせたある賢い医者が彼女に関する恐ろしい秘密を見破ったのだ」

「それはどういうことだったのですか」と、ジョヴァンニは教授の眼を避けるように、伏目ふしめがちに訊いた。

バグリオーニは言葉を強めて語りつづけた。

「この美しい女は、生まれ落ちるときから毒薬で育てられて来たのだ。そこで、彼女の本質には毒が沁み込んで、そのからだは最もはなはだしい有毒物となった。つまり、毒薬が彼女の生命の要素になってしまったのだ。その毒素の匂いを彼女は空中に吹き出すのであるから、彼女の愛は毒薬であつた——彼女の抱擁は死であつた。まあこういうことだが、なんと君、実に不思議なおどろくべき物語ではないか」

「子供だましのような話ではありませんか」と、ジョヴァンニはいらいらしたように椅子から起たちあがつて言った。「尊敬すべきあなたが、もつとまじめな研究もありましょうに、そんなばかばかしい物語をお望みになるひまがあるとは、おどろきましたね」

「時に君、この部屋には何か不思議な匂いがするね」と、教授は不安そうにあたりを見まわしながら言った。「君の手套てびょうろの匂いかね。幽かすかながらもいい匂いだ。しかし、けつして心持ちのいい匂いではないね。こんな匂いに長くひたつてみると、僕などは気分が悪くなる。花の匂

「いのようでもあるが、この部屋には花はないね」

教授の話を聴きながら、ジョヴァンニは蒼あおくなつて答えた。

「いいえ、そんな匂いなどはしません。それはあなたの心の迷いです。匂いというものは、感覚的なものと精神的なものとを一緒にした一種の要素ですから、時どき、こういうふうになれわれは欺だまされやすいのです。ある匂いのことを思い出すと、まったくそこにないものでも実際あるように思い誤まりやすいものですからね」

バグリオーニは言った。

「そうだ。しかし僕の想像は確実だから、そんな悪戯いたずらをすることはめつたにない。もし僕が何かの匂いを思いうかべるとしても、僕の指にしみ込んでいる売薬の悪い匂いだろうよ。噂によると畏友ラツパチーニは、アラビヤの薬よりも更にいい匂いをもつて、薬に味をつけるそうだ。美しい博学のベアトリーチェも、きつと父と同様に、乙女おとめの息のようないい匂いにする薬を、患者にあたえることだろう。それを飲む者こそ災難だ」

ジョヴァンニの顔には、いろいろな感情の争いをかくすことが出来なかつた。教授が、清く優しいラツパチーニの娘を指して言った言葉の調子が、彼の心に忌いやな感じをあたえた。しかも自分とはまるで反対の見方をしていて教授の暗示が、あたかも百千の鬼が齒をむき出して彼を笑っているような、暗い疑惑を誘い出したのである。彼は努めてその疑いをおさえながら、ほんとうに恋人を信ずるの心をもって、バグリオーニに答えた。

「教授。あなたは父の友人でした。それですから、たぶんその息子にも友情をもって接しようというおつもりなのでしょう。わたしはあなたに対して心から敬服しているのです。しかしわれわれには、口にしてはならない話題があるということ、どうか考えていただきたいのです。あなたはベアトリーチェをご存じではありません。それがために間違ったご推測をなすつては困ります。彼女の性格に対して、軽慮な失礼な言葉をお用いになるのは、彼女を冒瀆ぼうとくするといふものです」

「ジョヴァンニ。憐れむべきジョヴァンニ」と、教授は冷静な憐愍れんびんの表情を浮かべながら答えた。「僕はこの可憐かれんな娘のことについて、君よりも、ずっとよく知っている。これから君にむかつて、毒殺者ラッパチーニと、その有毒の娘とに関する事実を話して聞かせよう。そうだが、有毒者ではあるが、彼女は美しいには美しいね。まあ、聴きたまえ。たとい君が腹を立てて、僕の白髪しろがを乱暴にかきむしっても、僕はけっして黙らない。そのインドの女に関する昔の物語は、ラッパチーニの深い恐ろしい学術によって、美しいベアトリーチェのからだに真実と なつてあらわれたのだ」

ジョヴァンニはうめき声を立てて彼の顔をおおうと、バグリオーニは続けて言った。

「彼女の父はこの学術に対して、狂的というほどに熱心のあまり、わが子とその犠牲とするに躊躇しなかつたのだ。公平に言えば、彼は蒸溜器をもつて彼自身の心を蒸発してしまつたかと思われるほど、学術には忠実な人間であるのだ。そこで、君の運命はどうなるかという問

題であるが……疑いもなく、君はある新しい実験の材料として選ばれたのだ。おそらくその結果は死であろう。いや、もつと恐ろしい運命かもしれない。ラッパチーニは自分の眼の前に、学術上の興味を惹くものがあれば、いかなるものでもちつとも躊躇しないのだ」

「それは夢だ。たしかに夢だ」と、ジョヴァンニは小さい声でつぶやいた。

教授は続けて言った。

「けれども、君、楽観したまえ。まだ今のうちならば助かるのだ。たぶんわれわれは彼女が父の狂熱によつて失われている普通の性質を、悲惨なる娘のために取り戻してやれると思うのだ。この小さな銀の花瓶を見たまえ。これは有名なベンヴェニウト・チェリーニの手に成つたもので、イタリーで最も美しい婦人に愛の贈り物としても恥かしくないものだ。殊にこの中にはいつているのはまたとない尊いもので、この解毒剤を一滴でも飲めば、どんな劇薬でも無害になるのだ。ラッパチーニの毒薬に対しても、十分の効力あることは疑いない。この尊い薬を入れた花瓶を、君のベアトリーチェに贈りたまえ。そうして、確実の希望をもつてその結果を待ちたまえ」

バグリオーニは精巧な細工をほどこした小さい銀の花瓶を、テーブルの上に置いて出て行つた。彼は自分の言つたことが青年の心の上にいる効果をあたえることを望んだ。

「まだ今のうちならば、ラッパチーニをさえぎることが出来るだろう」と、彼は階段を降りながら、独りでほくそえんだ。「彼について本当のことを白状すれば、彼はおどろくべき男だ

——実に不思議な男だ。しかしその実行の方法を見ると、つまらない藪^{やぶ}医者だ。古来の医者
のよい法則を尊ぶわれわれには我慢のならないことだ」

四

ジョヴァンニがベアトリーチェと交際している間、前にも言ったように、彼はときどきに彼女の性格について暗い疑いの影がさした。それでも彼はどこまでも彼女を純な自然な、最も愛情に富んだ、偽りのない女性であると思っていたので、今かのバグリオーニ教授の主張するがごときものの姿は、彼自身の本来の考えとは一致せず、はなはだ不思議な、信じ難いもののように思われた。

実際この美しい娘を初めて見たときには、忌^{いま}わしい思い出があつた。彼女がさわるとたちまちに凋^{しお}れた花束のことや、彼女の息の匂いのほかにはなんら明らかな媒介物もなしに、日光のかがやく空気のうちで死んでいった昆虫のことや、それらは今でもまつたく忘れることは出来なかつたが、こういう出来事は彼女の性格の清らかな光りのうちに溶^とけこんで、もはや、事実としての効力を失い、いかなる感情が事実を証明しようとしても、かえつてそれを誤まれる妄想と認めるようになっていた。

世の中にはわれわれが見、指でふれるものよりも、さらに真実で、さらに実際のなものがあつた。そういう都合のいい論拠のもとに、ジョヴァンニはベアトリーチェを信賴した。それは彼の深い莫大な信念からというよりも、むしろ彼女の高潔なる特性による必然的の力

に由来しているのであつたが、今や彼の精神は、これまで情熱に心酔して登りつめていた高所に踏みとどまることを許さなくなつた。彼はひざまずいて世俗的な疑惑の前に降伏し、それがためにベアトリーチェに対する純潔な心象をけがした。彼女を見限つたというのではないが、彼は信じられなくなつたのである。

彼は一度それを試みれば、すべてにおいて彼を満足させるような、ある断乎たる試験を始めようと決心した。それは、ある怪異な魂なくしてはほとんど存在するとは思われないような恐ろしい特性が、はたして彼女の体質のうちひそんでいかどうかということを試験することであつた。遠方から眺めているのならば、とかげ蜥蜴や、昆虫や、花について、彼の眼は彼をあざむいたかも知れない。しかも、もしベアトリーチェがわずか二、三步を離れたところに新しい生きいきとした花を手にして現われたのを見たとすれば、もはやその上に疑いをいれる余地よちはなくなるであらう。こう考えたので、彼は急いで花屋へ行つて、まだ朝露のかがやいている花束を一つ買った。

今は彼が毎日ベアトリーチェに逢う定刻であつた。庭に降りてゆく前に、彼は自分の姿を鏡にうつして見ることを忘れなかつた。——それは美しい青年にありがちな虚栄心からでもあり、かつは情熱の燃ゆる瞬間にあらわれる一種の浅薄な感情と、虚偽な性格との表象とも言うべきであつた。彼は鏡をじつと眺めた。彼の容貌に、こんなにも豊かな美しさは、今までにけつして見られなかつた。その眼にも今までこんな快活の光りはなかつた。その頬にも

今までこんな旺盛な生命の色が燃えていなかった。

「少なくとも彼女の毒は、まだおれの身体には流れ込んでいないのだ。おれは花ではないのだから、彼女に握られても死ぬようなことはないのだ」と、彼は思った。

彼はさつきから手に持っていた花束に眼をそそいだ。そうして、その露にぬれた花がもう萎れかかっているのを見たとき、なんとも言われない恐怖の戦慄が彼の全身をめぐった。その花は、ついきのうまでは生きいきとして美しい姿を見せていたのである。

ジョヴァンニは色を失つて、大理石のように白くなった。かれは鏡の前に突つ立つて、何か怖ろしいものの姿でも見るように、彼自身の影をながめた。彼は部屋じゅうにみなぎっているように思われる匂いについて、バグリオーニ教授の言つたことを思い出した。自分の呼吸には、毒気が含まれているに違いない。彼は身を慄わした。——自分のからだを見て顫えた。

やがて我れにかえつて、彼は物珍らしそうに一匹の蜘蛛を眺め始めた。蜘蛛はその部屋の古風な蛇腹じやばらから行きつ戻りつして、巧みに糸を織りまぜながら、いそがしそうに巣を作っていた。それは古い天井からいつもぶらりと下がるほどに強い活潑な蜘蛛であつた。

ジョヴァンニはその昆虫に近寄つて、深い長い息を吹きかけると、蜘蛛は急にその仕事をやめた。その巣は、この小さい職人のからだに起こっている戦慄のためにふるえた。ジョヴァンニは更にいつそう深く、いつそう長い息を吹きかけた。彼は心から湧いて来る毒どく

しい感情に満たされた。彼は悪意でそんなことをしているのか、単に自棄やけでそんなことをしているのか、自分にも分からなかった。蜘蛛はその脚を苦しそうに痙攣けいれんさせた後、窓の先に死んでぶら下がった。

「呪われたか。おまえの息ひとつでこの昆虫が死ぬほどに、おまえは有毒になったのか」と、ジヨヴァンニは小声で自分に言った。

その瞬間に、庭の方から豊かな優しい声がきこえてきた。

「ジヨヴァンニ……。ジヨヴァンニ……。もう約束の時間が過ぎていてはありませんか。何をぐずぐずしているのです。早く降りていらつしやい」

ジヨヴァンニは再びつぶやいた。

「そうだ。おれの息で殺されない生き物はあるの女だけだ。いつそ殺すことが出来ればいいのに……」

彼は駆け降りて、直ぐにベアトリーチェの輝かしい優しい眼の前に立った。

彼は憤怒ふんぬと失望に熱狂して、ひと睨みで彼女を萎縮しゆくさせてやろうと思いつめていたのであるが、さて彼女の実際の姿に接すると、すぐに振り切ってしまうにはあまりに強い魅力があった。彼はしばしば彼を宗教的冷静に導いたところの、彼女の美妙的な慈悲ぶかい力を思い出した。純粹な清い泉がその底から透明の姿を、彼の心眼に明らかにうつし出したとき、彼女の胸から神聖な熱情のほとばしり出たことを思い出した。彼はすべてのこの醜みにくい秘密は、

世俗的の錯覚に過ぎないことを考えた。いかなる悪霧が彼女の周囲に立ちこめているように思われても、実際のベアトリーチェは神聖な天使^{エンジェル}であることを考えた。彼はもちろん、それほどまでに信じ切ることは出来なかつたが、それでも彼女の姿は彼に対して、まるでその魅力を失うことはなかつた。

ジョヴァンニの憤怒はやや鎮まつたが、不機嫌な冷淡な態度はおおわれなかつた。ベアトリーチェは敏速な靈感で、彼と自分との間には越えることの出来ない暗い溝^{みぞ}が横たわつてゐることを早くも覺^{さと}つた。二人は悲しそうに黙つて、一緒に歩いた。大理石の噴水のほとりまで来ると、その中央には宝石のような花をつけた灌木が生えていた。ジョヴァンニはあたかも食欲をそそられるように、一生懸命にその花の匂いを吸つて喜んで、自分ながらそれに気がついて驚いた。

「ベアトリーチェ。この灌木はどこから持つて来たのですか」と、彼は突然に訊いた。

「父が初めて作りました」と、彼女は簡単に答えた。

「初めて作った……。作り出したのですか……。」と、ジョヴァンニは繰り返して言った。「ベアトリーチェ。それはいつたいたいというのですか」

ベアトリーチェは答えた。

「父は恐ろしいほどに自然の秘密に通じた人でした。わたくしが初めてこの世界に生まれ出たと同じ時間に、この木が土の中から芽を出して来たのです。わたくしはただ世間並の子供

ですが、この木は父の学問、父の知識の子供です。その木にお近づきになつてはいけません」
 ジョヴァンニがその灌木にだんだん近づいて行くのを見て、彼女ははらはらするように言いつづけた。

「その木は、あなたがほとんど夢にも考えていないような、性質を持っています。わたくしはその木と一緒に育つて、その呼吸で養われて来たのです。その木とわたくしとは、姉妹であつたのです。わたくしは人間を愛すると同じように、その木を愛して来ました。……まあ、あなたは、それをお疑いになりませんでしたか。……そこには恐ろしい運命があつたのです」

このとき、ジョヴァンニは彼女を見て、非常に暗い渋面じゆうめんを作つたので、ベアトリーチェは吐息をついてふるえたが、男の優しい心を信じているので、彼女は更に氣を取り直した。そうして、たとい一瞬間でも彼を疑つたことを恥かしく思つた。

「そこには恐ろしい運命があつたのです」と、彼女はまた言つた。「父が、恐ろしいほどに学問を愛した結果、人間のあらゆる運命からわたくしを引き離してしまつたのです。それでも神様はとうとうあなたをよこして下さいました。わたくしの大事の大事のジョヴァンニ……。あわれなベアトリーチェは、それまでどんなに寂しかったでしょう」

「それが苦しい運命だつたのですか」と、ジョヴァンニは彼女を凝視みつめながら訊いた。

「ほんの近ごろになつて、どんなに苦しい運命であるかを知りました。ええ、今までわたくし

の心は感覚を失ってしまいましたので、別になんとも思わなかったのです」

「ちくしょう！」と、彼は毒どくしい侮蔑と憤怒とに燃えながら叫んだ。「おまえは、自分の孤独にたえかねて、僕も同じようにすべての温かい人生から引き離して、口でも言えないような怖ろしい世界に引き込もうとしたのだな」

「ジョヴァンニ……」

ベアトリーチェはその大きい輝いた眼を男の顔に向けて言った。彼の言葉の力は相手の心に達するまでにはいたらないで、彼女はただ雷にでも撃たれたように感じたばかりであった。ジョヴァンニは、もう我れを忘れて、怒りに任せて罵った。

「そうだ、そうだ。毒婦！ おまえが、それをしたのだ。おまえはおれを呪い倒したのだ。おれの血管を毒薬で満たしたのも、おまえの仕業だ。おまえはおれを自分と同じような、憎むべき厭うべき死人同然な醜い人間にってしまったのだ。世にも不思議な、いまわしい怪物にってしまったのだ。さあ、幸いにわれわれの呼吸が他のものに対すると同じように、われわれの命にも関わるものならば、限らない憎悪の接吻を一度こころみて、たがいに死んでしまおうではないか」

「何がわたくしの身にふりかかって来たというのでしょうか、聖マリア！ どうぞわたくしをあわれとおぼしめしてください。……この哀れな失恋の子を……」

ベアトリーチェは、その心から湧き出る低いうめき声で言った。

「おまえは……。おまえは祈っているのだね」と、ジョヴァンニはまだ同じような悪魔的の侮蔑をもつて叫んだ。「おまえのくちびるから出て来るその祈りは、空気を〈死〉でけがしてしまふのだ。そうだ、そうだ、一緒に祈ろう。一緒に教会へ行つて、入り口の聖水に指をひたそう。おれたちのあとから来た者は、みんなその毒のために死んでしまふだろう。空中に十字を切る真似をしよう。そうすると、神聖なシンボルの真似をして、外部に呪詛じゆそをまき散らすことになるだろうよ」

「ジョヴァンニ……」

ベアトリーチェは静かに言った。彼女は悲しみのあまりに、怒ることさえも出来なかつたのである。

「あなたはなぜそんな恐ろしい言葉のうちに、わたくしと一緒に自分自身までも引き入れようとなさるのです。なるほど、わたくしはあなたのおっしゃる通りの恐ろしい人間です。しかし、あなたは何でもありませんか。この花園から出て、あなたと同じような人間に立ちまじわるのを見て、ほかの人たちが身ぶるモンスターいする、わたくしのような者は問題になさいますな。あわれなベアトリーチェのような怪物が、かつては地の上に這つていたということを、どうぞ忘れてしまつて下さい」

「おまえは、なんにも知らない振りをしようとするのか」と、ジョヴァンニは眉をひそめながら彼女を見た。「これを見ろ。この力はまぎれもないラッパチーニの娘から得たのだぞ」

そこには夏虫のひと群れが、命にかかわる花園の花の香にひきつけられて、食物を求めながら、空中を飛びまわつて、ジョヴァンニの頭のまわりに集まつた。しばらくのあいだ幾株の灌木の林に惹き付けられていたのと同じ力によつて、彼の方へ惹きつけられていることが、明らかであつた。彼はかれらの間へ息を吹きかけた。そうして、少なくとも二十匹の昆虫が、地上に倒れて死んだときに、彼はベアトリーチェを見かえつて、苦にがしげにほほえんだ。

ベアトリーチェは叫んだ。

「分かりました、分かりました。それは父の恐ろしい学問です。いいえ、いいえ、ジョヴァンニ……。それはわたくしではなかつたのです。けつして、わたくしではありません。わたくしはあなたを愛するあまり、ほんのちつとのあいだ、あなたと一緒にいたいと思つただけです。そうして、ただあなたのお姿を、わたくしの心に残してお別れ申そうと思つていたので。ジョヴァンニ……。どうぞわたくしを信じてください。たとわたくしのからだは、毒薬で養われていても、心は神様に作られたもので、日にちの糧かてとして愛を熱望していたのです。けれども、わたくしの父は……。父は、学問に対する同情、その恐ろしい同情で、わたくしたちを結びつけてしまつたのです。ええもう、どうぞわたくしを蹴とばして下さい、踏みにじつて下さい、殺してください。あなたにそんなことを言われては、死ぬことくらいはなんでもありません。けれども……。けれども、そんなことをしたのはわたくしではなかつたのです。幸福な世界のために、わたくしがそんなことをするものですか」

ジョヴァンニはその憤怒をくちびるから爆発するがままに任せておいたので、今はもう疲れて鎮まっていた。彼の心のうちには、ベアトリーチェと彼自身とのあいだの密接な、かつ特殊な関係について、悲しい柔らかい感情が湧いてきた。いわば、かれらはまったく孤独の状態に置かれたようなもので、人間がたくさん集まれば集まるほど、ますます孤独となるであらう。もしそうならば、かれらの周囲の人間の沙漠は、この孤立の二人を更にいつそう密接に結合すべきではなからうか。自分が普通の性質に立ちかえつて、ベアトリーチェの手を引いて導くだけの望みがまだ残つてはいないだろうかと、ジョヴァンニは考えるようになった。

しかもベアトリーチェの深刻なる恋が、ジョヴァンニの激しい悪口によつてこれほどに悲しくそこなわれたのちに、この世の結合、この世の幸福があり得るようには、なんという強い、また我儘わがままな卑しい心であらう。いや、こんな望みは、しよせん考えられないことである。彼女は恋に破れたる心をいだいて、現世の境いを苦しく越えなければならぬ。彼女はその心の痛手を楽園の泉にひたし、または不滅の光りに照らさせて、その悲しみを忘れなければならぬのである。

しかし、ジョヴァンニはそれに気がつかなかつた。

「愛するベアトリーチェ……」

彼女がいつものように近づくことを恐れたにもかかわらず、彼は今や異常なる衝動をもつ

て、彼女に近づいた。

「わたしが最愛のベアトリーチェ。われわれの運命はまだそんなに絶望的なものではありません。ごらんなさい。これは偉い医者から証明された妙薬です。その効能の顕著なことは、実に神しんのようだということです。これはあなたの恐ろしいお父さんが、あなたとわたしの身の上みづかにこの禍わざわいをもたらししたものは、まったく反対の要素から出来ているのです。それは神聖な草から蒸溜して取ったものです。どうです、一緒にこの薬をぐつと嘔おんで、おたがいに禍わざわいを浄きよめようではありませんか」

「それをわたしに下さい」

ベアトリーチェは男が胸から取り出した小さい銀の花瓶を受け取ろうとして、手を伸ばしながら言った。それから、特に力を入れて付け加えた。

「わたくしが嘔おみましよう。けれども、あなたはその結果を待つて下さい」

彼女はバグリオーニの解毒剤をその唇くちにあてると、その瞬間にラツパチーニの姿が入り口から現われて、大理石の噴水の方へそろそろと歩いて来た。近づくにしたがって、この蒼ざめた科学者はいかにも勝ち誇ったような態度で、美しい青年と処女おとめとを眺めているように思われた。それはあたかも一つの絵画、または一群の彫像を仕上げるために、全生涯を捧げた芸術家がついに成功して、大いに満足したというような姿であった。

彼はちよつと立ち停まって、かがんだからだを態わざとぐつと伸ばした。彼はその子供らのた

めに、幸福を祈っている父親のような態度で、かれらの上に両手をひろげたが、それはかれらの生命の流れに毒薬をそそいだ、その手であった。ジョヴァンニはふるえた。ベアトリッチェは神経的に身をふるわした。彼女は片手で胸をおさえた。

ラッパチーニは言った。

「ベアトリッチェ。おまえはもうこの世の中に、独りぼっちでいなくともいいのだ。おまえの妹分のその灌木から貴い宝の花を一つ取って、おまえの花婿の胸につけるように言つてやれ。それはもう彼にも有害にはならないのだ。わたしの学問の力と、おまえたちふたりへの同情とによつて、わたしの誇りと勝利の娘であるおまえと同じように、あの男のからだの組織を変えて、今ではほかの男とは違ったものにしてしまったのだ。それであるから、ほかのすべての者には恐れられても、おたがい同士は安全だ。これから仲よくして世界じゅうを通るがいい」

「お父さま。なぜあなたはこんな悲惨な運命をわたくしたちにお与えになったのですか」

ベアトリッチェは弱よわしい声で言った。——彼女は静かに話したが、その手はまだその胸をおさえていた。

「悲惨だと……」と、父は叫んだ。「いつたいおまえはどういうつもりなのだ。馬鹿な娘だな。おまえは自分に反対すれば、いかなる力も敵を利することが出来ないような、天賦の能力をあたえられたのを、悲惨だと思ふのか。最も力の強い者をも、ひと息で打ち破ることが出来

るのを、悲惨だというのか。おまえは美しいと同様に、怖ろしいものであることを悲惨だというのか。それならば、おまえはすべての悪事を暴露されても、どうすることも出来えないような、弱い女の境遇のほうが、むしろ優^ましだと思ふのか」

娘は地上にひざまずいて、小声で言った。

「わたくしは恐れられるよりも、愛されとうございました。しかし今となっては、そんなことはもうどうでもようございます。お父さま。わたくしはもう……。あなたがわたくしのからだに織り込もうとなすった禍いが夢のように、……。この毒のある花の匂いのように、失^なくなってしまふところへ参ります。エデンの園の花のなかには、わたくしの呼吸^{いき}に毒を沁みさせるような花はないでしょう。では、さようなら、ジョヴァンニ……。あなたの憎しみの言葉は、鉛のようにわたくしの心のうちに残っています。それもわたくしが天国へ昇つてしまえば、みんな忘れられるでしょう。おお、あなたの体質には、わたくしの体質のうちにあつたよりも、もつとたくさんさんの毒が最初から含まれていたのではありますまいか」

彼女の現世の姿は、ラツパチーニの優れた手腕によって、非常に合理的に作られていたので、毒薬が彼女の生命であつたと同じように、効能のいちじるしい解毒剤は彼女にとつて「死」であつた。

こうして、人間の発明と、それにさからう性質の犠牲となり、かくのごとく誤用された知識の努力に伴う運命の犠牲となつて、あわれなるベアトリーチェは、父とジョヴァンニの足

もとに休たおれた。

あたかもそのとき、ピエトロ・バグリオーニ教授は窓から覗いて、勝利と恐怖とを混こんじたような調子で叫んだ。彼は雷に撃たれたように驚いている科学者にむかつて、大きい声で呼びかけたのである。

「ラッパチーニ……。ラッパチーニ……。これが君の実験の終局か」



世界怪談名作集 上

リットンほか 著／岡本綺堂 編訳

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：

- ・序／目次、妖物^{ダムドシング}、ラッパチーニの娘
「世界怪談名作集 上」河出文庫、河出書房新社
1987（昭和62）年8月4日初版発行
- ・貸家、スペードの女王、クラリモンド、信号手、ヴィール夫人の亡霊
「世界怪談名作集 上」河出文庫、河出書房新社
1987（昭和62）年9月4日初版発行
2002（平成14）年6月20日新装版初版発行

入力：

- ・序／目次、妖物^{ダムドシング} → もりみつじゅんじ
- ・貸家、スペードの女王、クラリモンド、信号手、ヴィール夫人の亡霊
→ 門田裕志、小林繁雄
- ・ラッパチーニの娘 → 清十郎

校正：

- ・序／目次、妖物^{ダムドシング} → 門田裕志
 - ・貸家、スペードの女王、クラリモンド、信号手、ヴィール夫人の亡霊
→ 大久保ゆう
 - ・ラッパチーニの娘 → もりみつじゅんじ
- ※ クラリモンド：「^{クランバイヤ}吸血鬼」と「^{クランバイヤ}吸血鬼」の混在は底本通りにしました。

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.7(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ